

アメリカ合衆国も日本国召喚に全力出演したいようです

スカイキッド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、日本は異世界に転移した。

日本「異世界に転移しちゃった」

米国「迎えに行つてやるよ」

日本&異世界「「こっちは来んな」」

# 目次

第1話 「在日米国民救助計画」	1
第一章 異世界へ	
第2話 「自力開通」	4
第3話 「米国の懸念」	7
第4話 「いざ異世界へ」	9
第5話 「転移、フェン王国沖合い」	12
第6話 「こちら航空自衛隊」	14
第7話 「遭遇、パーパルディア皇国皇軍」	17
第8話 「第二次フェン沖海戦」	20
第9話 「リメンバー・ロサンゼルス」	23
第10話 「再びの黒船来航」	26
第11話 「フロンティア開拓」	29
第12話 「パーパルディア侵攻作戦」	32
第13話 「パーパルディア大空襲」	35
第14話 「パーパルディア上陸作戦」	39
第二章 異世界大開拓	
第15話 「地球国家の懸念と繁栄」	42
第16話 「新天地グラメウス」	45
第17話 「グラメウス侵攻開始」	48
第18話 「密林制圧&魔獣掃討」	52
第19話 「帝国技官の衝撃と行動」	57
第20話 「好景気の渦中」	61
第21話 「眠れる獅子」	65

第22話 「国際会議に向けて」

69

第23話 「会議参加に向けて」

73

### 第三章 世界会議

第24話 「先進11カ国会議、帝国の蛮行」

76

第25話 「迫る脅威」

79

第26話 「サチュレーション・アタック」

85

第27話 「カルトアルパス迎撃戦」

91

第28話 「帝国艦隊壊滅」

97

第29話 「ミズーリvsGA」

103

第30話 「後始末と決断」

110

### 第四章 戦間期

第31話 「未来への警戒」

114

第32話 「戦力拡大」

118

作中登場の米軍兵器解説まとめ（随時更新）

122

第33話 「大艦巨砲主義の再興」

126

第34話 「対アニユンリールの準備」

130

第35話 「開戦前夜」

134

### 第五章 皇国への侵攻

第36話 「開戦」

139

第37話 「アニユンリール大空襲」

143

第38話 「大陸沖大海戦①」

148

第39話 「大陸沖大海戦②」

153

第40話 「大陸沖大海戦③」

157

第41話 「島嶼制圧」

162

第42話 「神々の落星」

166

第43話「星の落下」	170
第44話「終戦、次に備えて」	174
第六章 未来への備え	
第45話「彼を知らば百戦危うからず」	178
第46話「異世界での準備、地球での備え」	182
第47話「6年後に向けた軍拡」	186
第七章 終着	
第48話「6年後」	190
第49話「神罰の代行」	195
第50話「終着」	201

## 第1話 「在日米国民救助計画」

2015年1月某日。

その日、日本は突如として国土と国民ごと全て異世界へと丸々転移してしまった。

それと同じ頃、もちろんながら地球では日本が消えていた。

これにより太平洋周辺での海流・気流の変化による異常気象や日本経済機能の停止と世界経済の連鎖した混乱が発生、そして日本経済機能の停止による混乱が結果的に世界的経済恐慌を招くなど大混乱となった。

その中でもアメリカ合衆国は米第7艦隊を初めとする在日米軍の喪失による極東での軍事プレゼンス低下、そしてもろに経済恐慌の影響を受けた事で最大の混乱に見舞われた。

この過去例を見ない大混乱は、アメリカどころかその関係国すら深い混乱におとし入れられることとなってしまったが、それでも何とかアメリカは混乱に耐えた。

半年後には相変わらず不景気から立ち直れていなかったが、ニューヨーク政策以来の経済政策によって少なくとも経済的混乱からは立ち直れていた。

喪失した在日米軍他の米軍戦力も、各軍の部隊再編や予備役兵士の召集と現役への投入、予備戦力の戦力化によって残存戦力をやり繰りし、これで何とか戦力として維持出来る程度には回復出来ていた。

無論、そんな急ごしらえな事がいつまでも続けられる筈がないのは、誰の目から見ても明らかであった。

だがある日のこと、それは唐突に訪れた。

2015年7月――

日本転移から半年後、ホワイトハウスのもとにNASA（アメリカ航空宇宙局）から連絡が入ってきた。

それはバージニア州のグリーンバンク電波望遠鏡が行方不明と

なっている米第7艦隊の通信電波を宇宙空間から捉えたというものだった。

宇宙空間から行方不明の艦隊の電波が届いた、いったいどういうことか？

調べたところその第7艦隊の電波は太陽系外、遠く離れた恒星系の地球外惑星から発せられているらしく、その惑星はNASAによると地球に似た環境を持っているとされている。

そのため人間が棲むことも不可能ではないとされ、星の大きさは地球の数倍があるとされているが、それにしても、なぜそんな遠く離れた星から、半年も前に日本と共に消えた米第7艦隊の電波が発せられているのだろうか。

米政府はそう疑問に思い、そして思い至る。

———そうか！ 第7艦隊はあの星にいるんだ!!

米第7艦隊の電波が発せられているのはあの日、あの日本列島が地球から消えた日に、日本列島の転移に巻き込まれた第7艦隊があの星に何らかの理由で転移したのだ。

そしてその電波がこの地球に届けられているに違いない、となればあそこには第7艦隊のみならず日本列島、そして日本そのものも転移しているかもしれない。

ならば、彼らを助けにいかねばならない。

5万人の在日米軍兵士、総計17万トンの米海軍軍艦、数百機の米軍機、そして数万人のアメリカ人日本旅行客と、日本人1億2,000万人の行方を調べ、そしてこの世界へと帰還させるために。

幸いなことに、中国とロシアはまだこの事に気付いていない。ならば先に、我々が彼らを助けに行かねば。

NASAからの報告を受けて米政府は、即座にこの星へと在日アメリカ国民救助計画を作成、この計画の実施を極秘に開催した連邦議会で決議、各国に秘密で日本が転移したと思われる惑星へ救出部隊を送ることで決定した。



# 第一章 異世界へ

## 第2話 「自力開通」

2015年8月――

あのあと日本の転移したと見られている惑星は、惑星<sup>アルファ</sup>αと仮称されるようになった。

本来なら惑星αにはちゃんと正式名称があるのだが、それは長つたらしすぎるので仮称の惑星αで呼ばれている。

さてそんなことより、NASAからの報告を受けて米連邦議会にて決定した惑星αへの日本滞在米国人及び在日米軍救出部隊の派遣、だがその部隊派遣にはかなり大きな障害が存在していた。

というのもそれは単純に距離的な問題があり、日本が転移したと考えられる惑星αは地球から約105光年（＝光の速さで進んでも到着に105年かかる距離）も離れていた。

一体なぜそんなに離れた星から米第7艦隊の通信電波が地球に届いたのか甚だ疑問ではあるが、おそらく第7艦隊が転移途中に通信電波を発してその発した地点が地球から半光年程度離れた場所だったのでは、と考えられた（電波も光と同じ速度で進む）。

しかしそんな事はどうでもよく、それではあんなに離れた惑星αに到達するのは例え宇宙ロケットでも困難極まりない。

こんなこともあろうかと米国は、1980年代に計画した戦略防衛構想<sup>S</sup>の一環で火星の裏側に宇宙基地を極秘裏に建設。

そこに『オリオン型恒星間宇宙船』という核融合パルス推進の亜光速飛行型宇宙船を設置しており、これはメガトン級の核爆発を後方で繰り返し発生させ、その衝撃で推進するという方式であり、これにより宇宙船オリオンは光速の5分の1の速さで宇宙空間を飛行出来る。

だが、光速の5分の1程度の速さでは105光年も離れた惑星αへと到着するためには単純計算で525年も掛かるので、宇宙船オリオンによる部隊派遣は最終手段とされた。

ちなみに色々変な噂の絶えない秘密基地、エリア51でも実は何十年か前に墜落機を鹵獲する形で入手したUFOが存在しており、これは謎技術によって超光速航行——つまり光より速く飛べるとされる。が、あまり解析が進んでおらず不明点が多すぎるため、こちらも後回しとされた。

次に出された別案はもっとヤバいものだった。それはなんと「ワームホール」を生み出し惑星 $\alpha$ へ瞬間移動するという、つまりワープするということである。

1943年のフィラデルフィア計画における実験の際に米海軍は偶然にもワームホールを生み出す方法を発見した。

このワームホールというのは時空のある一点から別の離れた一点へと直結する空間領域でのトンネルのような抜け道であり、フィラデルフィア計画における実験の際は米海軍の軍艦がこのワームホールを経由してフィラデルフィア沖から2,500 kmも離れたノーフォーク沖に転移したのだ。

このワームホールの入り口を地球に、出口を惑星 $\alpha$ 上に作れば救出部隊を瞬間移動させることが出来るというわけで、早速、米国は太平洋上にワームホールの入り口を形成し出口を惑星 $\alpha$ の大洋上に形成した。

さて、これにて惑星 $\alpha$ に行く方法が決まったので、後は救出部隊であり、日本国民らは後回しとするにして米国民らの救出を優先したいが、それでも米国民の数は数十万人。

これを全て運びきるには大量の輸送手段が必要であり、またあの惑星の環境がよく分かっておらず、一応地球と似た環境程度には分かるが逆に言えばそれしか分からない。

そのため、まず調査部隊としてNASAの宇宙飛行士らに宇宙服を着させてあちらに展開させ、安全が確認されてから救出部隊を派遣させることとした。

本来なら宇宙飛行士なんかよりもドローンなり無人探査機なりをトンネルの向こうに渡した方が安全なのだが、不安材料をすべて排除

するには、人間による調査が必須なのだ。

やがて形成は完了した。

ワームホールは空間上に形成されたトンネルのような見た目で――しかしトンネルの先は見る事が出来ない。

ただ船舶がそのままトンネルを通れば、惑星 $\alpha$ の大洋上に瞬時に移動することが可能である。

やがて宇宙飛行士2人からなる調査部隊がワームホールの反対側へと渡り、ワームホール内に通じた通信ケーブルを介して通信を入れてきた。

――「惑星 $\alpha$ の環境は水平線が遠く感じる事を除いて、重力・気圧・気体・気温・気候・大気中の細菌、全て地球と大差がない。救出部隊の活動の障害となる要素は一切なし」

不安材料は無くなった。

これにて即座に救出部隊派遣が決定した。

### 第3話 「米国の懸念」

ついにワームホールが完成し、派遣が決定した惑星 $\alpha$ への日本滞在米国人及び在日米軍部隊の救出部隊、その規模は控えめに言って大規模である。

だが救出部隊の編成を説明する前に、まずは現在の米軍の状況について説明するでしょう。

日本の転移により、米国は在日米軍戦力を全て喪失するに至り、その中にはニミッツ級原子力航空母艦『USS ジョージ・ワシントン』を中核となす米第7艦隊第5空母打撃群も含まれていた。

第5空母打撃群という、一個空母艦隊とその周辺戦力の喪失は米国の極東における他国への軍事プレゼンスの低下をもたらした。

さらに、これを好機と見た中国による太平洋進出が活発化、5月には中国の人民解放軍と台湾軍が小規模ながら軍事衝突を起こし、第4次台湾海峡危機が発生するに至った。

米国は西海岸の米第3艦隊とグアム・鎮海の第7艦隊残存戦力を急派し、またB-52H戦略爆撃機による核パトロールの実施で威圧を掛け、何とかしてこれを抑えつけることには成功した。

だがこれによる影響を危惧した米国は台湾や韓国、さらにASEAN諸国に対して今まで以上の積極的な軍事援助を実施、また極東での軍事プレゼンスを再建すべく第7艦隊戦力の建て直しに掛かった。

いくら米帝プレイのできる米国だからって今すぐにそれをしろと言われてすぐに出来るわけではないのだ。

そのため、まず第7艦隊の中核を成す空母に関しては、退役していたが予備保管艦に指定されモスボール保存されていたキティホーク級空母『USS ジョン・F・ケネディ』が『ジョージ・ワシントン』の代理として再就役し、これを充てている。

護衛艦艇に関しては予備保管艦に指定されていたタイコンデロガ級巡洋艦3隻、他に運良く転移に巻き込まれなかった第7艦隊所属の駆逐艦1隻と第3艦隊から回航された駆逐艦2隻によって再構成さ

れていた。

艦載機も「航空機の墓場」と呼ばれるデビスモンサン空軍基地から、退役しモスボール保存されていた戦闘機F/A-18Cホーネットと、旧式の電子戦機E A-6Bプラウラーを人員ごと海兵隊からレンタルしており、後は他の海軍の航空隊から機をやり繰りして何とか構成している。

問題は人員だったが、これは他艦隊からの人員引き抜きや予備役人員の割り当て、また海軍教育過程の短縮や兵士採用基準の引き下げにより無理やり解決していた。

これにより何とかして新編第7艦隊は戦力として成り立っているが、もちろんまともな戦力とは言い難く、よって惑星 $\alpha$ に転移したと見られる第7艦隊を救助し即座に戦力として復帰させることが最大の課題となっていた。

だが問題は、惑星 $\alpha$ の状況を完全に把握できてないことにある。

少なくとも人間が宇宙服無しで活動出来ることは確認出来ている、だが惑星全体の状況は分かっておらず、一番の疑問と問題はその惑星に人間とコンタクトを取れる知的生命体が存在するか否かである。

……惑星 $\alpha$ に文明国家は存在するのか？

……存在したとして、その国は好戦的な危険な国か？

……惑星 $\alpha$ が怪獣映画に出てくるような危険な巨大生物の跋扈する世界ではないと完全に保証できるのか？

もしかしたら救助部隊はワームホールを抜け出した直後に現地の文明や生命体から攻撃を受ける可能性も存在する。

そういった訳で、いくばくか心配性染みた配慮をした米政府は、原子力空母を含めたミサイル駆逐艦、イージス巡洋艦、攻撃型原子力潜水艦、補給艦の計10隻以上の艦艇で構成される大規模な空母艦隊を派遣することで決定した。

## 第4話 「いざ異世界へ」

米第3艦隊を中核となす日本滞在米国人及び在日米軍救出部隊の編成は空母6、巡洋艦2、駆逐艦5、フリゲート3、原子力潜水艦3、輸送艦艇24、航空機約100機、陸上兵員1個旅団。

詳しい編成は以下の通りとなる。

- ・ ニミッツ級原子力空母 USSロナルド・レーガン
- ・ キティホーク級空母 USSキティホーク
- USSコンステレーション
- ・ フォレスタル級空母 USSサラトガ
- USSレンジャー
- USSインディペンデンス
- タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦
- ・ USSレイク・シャンプレン
- ・ USSプリンストン
- アーレイ・バーク級イージス駆逐艦
- ・ USSウエイン・E・メイヤー
- ・ USSスプルーアンス
- ・ USSピンクニー
- ・ USSラッセル
- ・ USSジョン・ポール・ジョーンズ
- フリゲート艦
- ・ USSヴァンデグリフト
- ・ USSシンプソン
- ・ USSサミュエル・B・ロバート
- ロサンゼルス級攻撃型原子力潜水艦
- ・ USSシカゴ
- ・ USSキー・ウエスト
- ・ USSオクラホマシティ

揚陸艦

- ・ USS マキン・アイランド
- ・ USS サンディエゴ
- ・ USS アンカレッツ
- ・ USS サマセット
- ・ USS ポンス
- ・ USS ハーパーズ・フェリー
- ・ USS コムストック
- ・ USS ラシユモア

#### 輸送艦

- ・ USS ワトソン
- ・ USS シスラー
- ・ USS ソダーマン

その他に民間から徴用した輸送船10隻

#### 補給艦

- ・ USS アラン・シエパード
- ・ USS ウォリー・シラー
- ・ USS マシュー・ペリー

艦隊の中に、マシュー・ペリーなる艦も含まれている。

別に意図して編成に組み込んだ訳ではないのだが、もしも無事にこの艦隊とマシュー・ペリーが惑星 $\alpha$ の日本に到着したら、日本のマスメディアはこう叫ぶだろう。

「黒船再来」、と。

とまあ、そんな事よりこの艦隊のうちキティホーク級航空母艦とフォレストアル級航空母艦の5隻はすでに軍属を退き予備保管艦となっていた旧式空母であるが、これらは今回は空母としての戦力ではなく主に航空機や車両などの輸送艦艇として使用する事を予定されている。

そのためこれら旧式空母には航空機が少数機を除いて搭載されず、戦闘機多数を搭載した原子力空母『ロナルド・レーガン』を旗艦とする先遣隊がワームホールの先の安全を確保したのちに後続としてワームホールを潜る予定だ。

ちなみに本来なら退役した原子力空母『USSエンタープライズ』も一緒にワームホールを潜らせるという話になっていたが、こちらは再就役にあたり燃料棒交換などに手間がかかり、また運用人員が多数必要のため却下された。

ただ、そうは言っても『エンタープライズ』を再就役のために改修工事して現役復帰させる計画事態は存在している。ビッグEは不滅なのだ。

さて、救助部隊の派遣は準備によつて予定より遅れ、秘密で開会された議会にて部隊派遣が決定した半年後の2016年1月によつて救助部隊派遣が叶った。

この頃には極東情勢も安定化し始めており、新編第7艦隊も十分に抑止効果を発揮しており、ならば今のうちに救援に行かねばならない。

日本に取り残された米国人、そして日本そのものを救いに行くために。

2016年1月18日――

サンディエゴを出港した日本滞米国人及び在日米軍救出部隊43隻のうち先遣隊に属する艦艇24隻は、ついに惑星 $\alpha$ に繋がるワームホールを潜った。

## 第5話 「転移、フエン王国沖合い」

ワームホールを潜り抜けた先、原子力空母『ロナルド・レーガン』を旗艦とする救助艦隊の先遣隊は即座に状況確認に取り掛かった。

GPSは使用不能、だがレーダーを始めとするその他の電子機器は正常に動いており、観測機械によれば重力も大気の状態も気候なども全て地球のそれとほぼ全くと言ってよいほど同じである。

ところがレーダーに先ほどまで映されていた米国の海岸線は映っておらず、そして——先に調査に渡った宇宙飛行士らが報告した通り水平線が遠い。少なくともここは地球では無いようだ。

つまり艦隊は無事に惑星 $\alpha$ に到着したらしい。

ひとまず艦隊は調査のため空母から艦載機を発艦させ、周囲の状況を確認することにし、次々に空母ロナルド・レーガンのカタパルトから艦載機が投げ出される。

発艦したのはなんと、トム猫こと可変翼戦闘機のF-14トムキャットである。

もう10年も前に退役した戦闘機だが、第7艦隊と共に消失した第5空母航空団の戦力穴埋めのため、「航空機の墓場」ことAMARC航空宇宙再生整備センターからモスボール保存されていたF-14Aを引っ張り出してきたのだ。

あの長い間米艦隊の空をフェニックスミサイルと共に護ってきた、あのトム猫なのだ。そんな伝説的・ロマン的な戦闘機が、退役如きでそう簡単にくたばったりなどしないし、復活してきてもおかしくなからう。むしろロマンは継承すべきなのである！

まあそれは置いてくとして、ただF-14と言ってもこいつはただのF-14ではなく、この空母に載せられたF-14は全てアビオニクスやコックピットの計器、ハードポイントを最新のものへ換装する改装をしており、性能は第4・5世代機相当の戦力を誇る、似て非なる性能を持っている。

そのためこのF-14はトム猫を凌駕するトム猫という意味から

『F-14Eスーパートムキャット』とも呼ばれていた。

もつとも、このF-14Eへの改装は飽くまでも戦力として使えるようにするための一時的なものであり、だいたい機体耐用年数だつてギリギリの中古品であるため、その繋ぎの間に米海軍は急ぎ後継となるF-35CとF/A-18E/F等の最新鋭機の生産を急ぎ、戦力の穴埋めに努めている。

よつてロナルド・レーガンが載せている戦闘<sup>V</sup>攻撃隊<sup>F</sup>はF-14Eの他にも新鋭機のF/A-18E/Fだつたり、F/A-18C/DやE/A-6Bのような旧式機まで様々だつた。

さて、発艦したF-14Eはハードポイントに戦術偵察ポッドを搭載して周囲の偵察活動を開始し、しばらくして東に飛んだ一機のF-14Eが二つの島の写真を撮影して帰還した。

その二つの島は向かい合った勾玉状の形をしており、それぞれの島にて中世地球程度の文明都市の形成が確認されていて、特に片方にはエド時代の日本のような町並みが存在していた。

その後、西に飛んだ別のF-14Eがとある船団の姿を撮影して帰還、それが持ち帰った写真は帆船の戦列艦とおぼしき艦艇が数百隻、海上を埋めつくしながら東に進んでいるものだった。

このままこの船団が進めば、この『ロナルド・レーガン』率いる艦隊と接触することが考えられており、問題はこの船団が何のために東に向かっているか、だ。

彼らは知らなかった。

この時発見した戦列艦の大艦隊がパールディア皇国という国の艦隊で、勾玉状の島国——フェン王国に侵攻しようとしているフェン侵攻艦隊だということ。

つまりワームホールはフェン王国沖合いに開通し、ワームホールを潜りぬけたばかりの『ロナルド・レーガン』率いる艦隊は、運悪くパールディア皇国フェン侵攻艦隊と遭遇しようとしていたのだ。

## 第6話 「こちら航空自衛隊」

中央暦1640年1月18日――

日本からすれば、かつて東シナ海があった海上の上空を3機の飛行機が飛行していた――そのうちの1つは米国が1960年代に生み出した傑作戦闘機F-4を偵察機として再設計した、RF-4E戦術偵察機だった。

日本の航空自衛隊第501飛行隊に所属するこの機体は福岡県の築城基地で給油を受けた後に再び飛び立ち、フェン王国西部を目指していた。

理由はフェン王国へ侵攻するとみられるパールディア皇国皇軍の規模を調べるためである。

現在、パールディア皇国から数百隻の戦列艦からなる大艦隊が東、それもフェン王国目指して向かっていることが判明しており、このRF-4Eは空撮により艦隊の編成を調査する任務を受けていた。

護衛の機として築城の第8航空団からF-15Jイーグルが2機随伴しており、これはパールディア皇国がワイバーンのような航空戦力を持ち込んだときの自衛用である。

フェンは日本から数百キロ離れているが、巡航速度のマッハ0.9で急行すればすぐに着くはずであり、フェンには3,000人近い日本人観光客がいるため、彼らの運命も考えたら急がずにはいられない。

一時間もすればRF-4EとF-15Jの三機からなる編隊はフェン王国西部海上の上空に到達していた。

「ん？……え？」

するとここで、護衛のF-15JのHUDがレーダーで捉えた情報を投影し、それを見たイーグルのパイロットは思わず二度見した。

「IFF（敵味方識別装置）に反応？ これは……アメリカ軍!？」

それは何とレーダー上に米軍機の信号を発する航空機が飛行していることを示していた。

間違いなく米軍機、しかしなぜここに米軍機がいるのか？ 彼には不明であった。

「こちらイーグル2、レーダーに反応。正面より米軍機」

「ハア？ 米軍機？ 在日米軍の連中、こんなところまで出張ってきたのか？」

「分かん。だが12分後にすれ違う。とりあえず通信を入れる」

イーグルのパイロットのうち、片方が米軍機とおぼしき反応の機体に通信を入れようとした、その時である。

『あー、あー、こちらアメリカ海軍第2空母航空団。航空自衛隊機、応答せよ』

それより先にこちら側から通信が入ってきた。

どうやら相手も言うとおおり、やはり米軍で間違いないようなのだが、通信の音声を耳にした空自戦闘機パイロットは疑問に思った。

(第2空母航空団？ 在日米軍に第2空母航空団は居ないはずだが……)

在日米軍の空母航空団は、厚木と岩国の第5空母航空団ただ一つだけであり、確か第2空母航空団はカリフォルニアの部隊だったはず——前に対抗演習したことがあったため、このパイロットはそれを知っていた。

だがカリフォルニアの部隊がなぜこの世界に？

12分後、ようやくRF-4EとF-15Jの三機は件の米軍機と遭遇した——だがその米軍機の正体を知った時に受けた彼らの衝撃は凄まじいものだった。

「な……トム猫？」

その機体は何ともう10年も前に米軍から退役したはずのF-14であり、無論日本国内には（在日米軍基地の展示機を除いて）一機も存在していない、存在しないはずの機体だった。

「それにこれは一体……!?!」

そして問題は、それだけではない。

彼らの眼下、フエンの沖合いの海上には空母一隻とそれを中核に輪形陣を敷いた、巡洋艦や駆逐艦からなる十数隻の軍艦が大規模な空母打撃群を形成し、展開していた。

米海軍の空母打撃群は日本にも存在している。

ニミッツ級原子力空母『USSジョージ・ワシントン』を中核に日本の転移に巻き込まれてしまった第5空母打撃群だ。

だが第5空母打撃群は日本政府からの活動自粛の要請により横須賀港に釘付けされており、少なくともジョージ・ワシントンが横須賀を出港したとのニュースも聞かない。

ところが、よく見たらあの空母は『ジョージ・ワシントン』ではなく——『ジョージ・ワシントン』は艦番号77、しかしあの艦の艦番号は76である。

このパイロットは、たまたま自分の好きな大統領の名が付いた艦ということからこの艦の艦番号からそれが何なのか悟った——米空母の『ロナルド・レーガン』だ。

そして、空母『ロナルド・レーガン』がこの世界にいるという話は聞いたことがなく、少なくとも転移前に燃料棒交換のために地球世界で長期ドック入りしたとの話は聞いたことがあった。

航空自衛隊の戦闘機パイロットは、何か自分たちが恐ろしいことに遭遇してしまったのだと、直感的に感じてしまった。

## 第7話 「遭遇、パーパルディア皇国皇軍」

米空母『ロナルド・レーガン』率いる救出艦隊は、ここが惑星αであることを完全に確信した。

なぜなら、日本の自衛隊の戦闘機——日の丸を描いた灰色のF—15Jイーグルと、同じく日の丸を描いた緑色のF—4ファントム——濃緑色の塗装からして恐らく偵察機型のRF—4Eレコンファントムだろう——の三機編隊と遭遇したからだ。

確かに彼らは以前まで地球に存在していた存在だが、日本列島が惑星αに消えた以上それについていった彼らは地球には存在していない、つまりここは惑星αで間違いないようだ。

「やはり間違いなかった」

彼らの不安の種は一つ消えたが、依然として消えない悩みが存在し、それは西から迫る謎の艦隊——要するにパーパルディア皇国のフェン侵攻艦隊であった。

なおもその艦隊は接近し続け、やがてお互いがお互いを視認出来るほどの位置に来てしまった。

もちろん皇国側は奇襲のはずのこの作戦が、何故か所属不明艦隊米空母艦隊の目の前に来てしまったことに大混乱となっていた。

それだけではなく、しかもその所属不明の艦隊の艦はどれもこれもかつてのフェン沖海戦で監査軍が戦ったとされる日本の軍艦——護衛艦『みようこう』と報告通りの形状ではないか！

……実際は、その日本の軍艦——護衛艦「みようこう」はアメリカのアーレイ・バーク級イージス駆逐艦をベースに建造された艦なのだから、瓜二つなものなのだが。

だが皇国側は勘違いを確信に変えた。

日本の船だ。

ならば敵だ。

敵なら殺す。

殺してやる。  
殺すしかない。

何とも理不尽ながら、完全に敵国の艦隊と信じきった皇国艦隊は先制攻撃として竜母から一斉にワイバーンロードを発艦させ、戦列艦隊は帆を張り一斉に突撃、砲戦距離の2 km圏内に足を急がせた。

このようにパーパルディア艦隊が戦闘準備をしている間にも、偵察にきていた空自のRF-4EとF-15Jは繰り返し空母『ロナルド・レーガン』率いる謎の米空母艦隊に警告を発した、「早く退避しろ」、「危険だ」と。

だが状況を掴めていない米空母艦隊は空自側の連絡に困惑し——というか退避ってどこに退避するんだよ——、しばしして空自偵察隊はおそらく残燃料の問題からであろう、この米空母艦隊と皇国艦隊を空撮したのちに飛び去ってしまった。

で、さらなる問題が出てきた。

西からこちらに迫る帆船の大船団（皇国艦隊）から次々とドラゴン（ワイバーンロード）が飛んできているではないか、それもこの艦隊に向けて！

まさか——まさかあいつら、この米空母艦隊にケンカ売ろうって言うのか、だから先ほどの空自偵察隊はこちらに何度も警告を行ったのか、だとしたら非常にマズイ事態だ。

緊急事態と判断した米艦隊は即座に戦闘準備に取り掛かり、護衛のイージス艦7隻はすぐさま陣形を変更して対空戦闘準備に移行、空母からはAAMを抱えたF-14とF/A-18が連続してカタパルトから投げ出され、発艦していった。

米海軍人らの血は騒いだ。

ここで殺り合おうってのか、面白え！と。

それは長らく本格的な海上戦闘をしたことがなかった米海軍人らにとっての、本能というか戦争欲が沸き上がって生まれた結果だったからなのかもしれない。

売られた喧嘩は買って出る、それが Yankee 魂の流儀というものな

のだ。

いずれにせよ、空母ロナルド・レーガン率いる艦隊はこの異世界でパーパルディア艦隊を相手に、米海軍にとって72年振りの、そして21世紀で初めての空母を利用した本格的な大海戦が勃発しようとしていた。

## 第8話 「第二次フェン沖海戦」

フェン王国に侵攻しようとしていたパーパルディア皇国の皇軍艦隊はフェン王国の都市ニシノミヤコの沖合いに迫っていた。

大砲を載せた戦列艦211、飛竜を洋上運用できる竜母12、陸上戦力を載せた揚陸船101、皇国の主力飛竜であるワイバーンロード250騎、空も海も埋め尽くす大戦力である。

「前衛の戦列艦隊が消滅!!」

「竜母が、竜母が沈みます!!」

「船が沈む！ 助けて!!」

「いやだ、やめてくれ、死にたくない!!」

ところが今、皇国艦隊はある敵と交戦する形で死闘の渦中にあり、戦列艦たちは次々と爆散し、炎に包まれて沈んでいき、そして上空のワイバーンロードたちはバタバタと墜とされていく。

一方的過ぎるそれはもはや殺戮、それもそれは彼らが戦ってるのは世界最強の空母艦隊、アメリカ海軍空母打撃群なのだから——もつとも世界最強は世界最強でも、違う世界の最強なのだが。

皇国の戦列艦にイージス巡洋艦や駆逐艦の5インチ主砲弾か、またはF/A—18戦闘攻撃機の投下した通常爆弾やクラスター爆弾が大量に降り注ぎ、彼らは爆散して原型を留めぬままに海底へと沈んでいく。

上空の皇国軍ワイバーンロードも、F—14E可変翼戦闘機の空対空ミサイルの餌食となるか、低空機動力に優れたF/A—18F戦闘機に後ろを取られ、後方から20mmバルカン砲により蜂の巣にされバスバスと墜とされていく。

何とか射程圏内に突入し砲弾や火炎弾を放った戦列艦やワイバーンロードもいたのだが、それらは艦隊のCIWSとMTHELによりすべて空中で迎撃された。

この戦闘は、最初は皇国軍ワイバーンロードによる米空母『ロナルド・レーガン』への火炎弾発射による一方的な戦闘開始から始まった。

火炎弾はロナルド・レーガンの20mm CIWSによりワイバーンロードごと撃墜されたが、危機感を感じた米艦隊は自衛行動を開始した——ただし自衛行動という名の殲滅戦闘だったのだが。

売られた喧嘩は買って出る、それも倍返しという形で。

行動を開始した艦隊のイージス艦は一斉にVLS（ミサイル垂直発射装置）の蓋を開放、さらに5インチ主砲やCIWS、機銃の砲身をイージスシステムによる制御のもと一斉に向けた。

そして上空警戒に上がった戦闘機F-14EとF/A-18が一斉に機首を下げてワイバーンロードをロックオン、また空母からも爆弾を満載した攻撃機が次々に上がった。

そして——艦隊司令からの「地獄に堕ちろ」の号令一下で米空母艦隊は一斉に攻撃を開始した。

皇国艦隊から見て、突然に米艦隊の鋼鉄艦イージス艦が一斉に閃光に包まれたかと思うと、次の瞬間には艦隊最前列にいた戦列艦50隻以上とワイバーン80騎以上が爆発に呑み込まれ粉碎した。

それから一分もせず、100隻の戦列艦が爆散して轟沈し、ワイバーンロードの6割が蒼空から叩き落とされた。

あまりの惨劇に、皇軍戦列艦の中には命令を無視し無断で撤退を始め、結果的にそれが艦隊同士での接触・衝突事故を多発させ更なる混乱を招くに至った。

「間髪いれるな！ 次弾撃て!!」

「撃て撃て！ 弾はいくらでもある！」

「パーティへようこそ、栄えある米海軍人の諸君!!」

完全なパニックに陥っていた皇国海軍人と異なり、逆に米空母艦隊の人間らはまるでこの戦場を楽しむかのように、艦長から新米水兵まで皆ハイになっていた。

そう、これだ、これなんだよ。圧倒的な軍事力を持った自分たちが、一方的に喧嘩を売ってきた相手を逆に一方的に蹂躪する。ああ、素晴らしい、まったくもって素晴らしいじゃないか！

それは久しぶり戦闘における勝利を掴みつつある米海軍人としての、そして自分たちのテクノロジーを信奉する米国民としての血が騒い

だ結果だったかもしれない。

いずれにせよ、米空母艦隊の人間たちは皆が皆、まるで狂気に取り憑かれたかのように目の前の戦闘に没頭し、まるで楽しんでいた。

だから彼らが正気を取り戻したとき、すでに海面は鮮血と火焰で真っ赤に染まり、海面を漂うのは人と竜の骸か、黒く焦げた船の残骸だけしか残ってなかった。

それほど皇国海軍にとって米海軍の実力というものは圧倒的すぎたのだ。

この一方的すぎる戦闘は、ワイバーンロードによる空母ロナルド・レーガンへの火炎弾発射から僅か5分で終了した——もちろん、パールディア皇国艦隊の全滅という形であった。

飽くまでも米艦隊の自衛行動として行われたこの海戦——後に『第二次フエン沖海戦』と呼ばれたこの海戦は、米艦隊の圧勝で幕を閉じた。

数時間後、米空母艦隊は急行した日本海上自衛隊の護衛艦『たかのみ』と遭遇した。

どうやら先ほどの空自偵察隊の報告を受け、この米空母艦隊を調べるために急行したらしく、米艦隊はそのままその護衛艦に案内される形で日本本土に向かった。

すべては順調だった。

ただ唯一、問題があるとするならば、それは皇国軍戦列艦3隻が戦闘のどさくさに紛れ、地球と繋がるワームホールを潜ってしまったことだった。

そのことには、この時はまだ誰も気付いていない。

## 第9話 「リメンバー・ロサンゼルス」

第二次フエン沖海戦のドサクサに紛れ、パールディア皇国の戦列艦3隻が、地球へと繋がるワームホールを通過してしまった。

それは単なる偶然に過ぎなかったし、その戦列艦たちもワームホールを潜ろうとして潜った訳ではなかった。

一方的過ぎるアウトレンジから繰り出される米艦隊からの砲撃を回避するため、右往左往と回避機動を取っていたら、いつの間にかワームホールの入り口に近づいてしまったのだ。

そして戦闘に集中している米艦隊はこれに気付かず、また戦列艦隊もそのままワームホールに呑み込まれ——そのまま地球へとやって来てしまった。

何が起きたか把握できてない戦列艦隊だったが、付近を航行し、しばしして近くに陸地を見つけると、そこを侵攻目標であるフエン王国のニシノミヤコと勝手に判断し、そこへ向かった。

実際にはこれはニシノミヤコではなく、ワームホールから比較的近いアメリカの大都市ロサンゼルスだったのだが、彼らがそんな事知る由もない。

皇国艦隊の人間はほとんどが直接ニシノミヤコを見たことが無かったし、高層ビルによる摩天楼も独特な地形と捉えてしまっていたため、ロサンゼルスがニシノミヤコなのか疑いもしなかった。

付近にワームホールの入り口を監視する艦艇はいなかったのか、という疑問も出るだろう、いや確かに周辺には中露の潜水艦や民間船を警戒して、米海軍のフリゲート3隻とアーレイ・バーク級駆逐艦が1隻いた。

だが突然ワームホールの中から現れた時代錯誤も甚だしい戦列艦にどう対処できようか（この時はまだワームホールの先で空母艦隊が戦闘状態に陥ったことをこのフリゲートの乗員は把握してなかった）。

考えてもみてほしい、友軍空母艦隊の入っていったトンネルからし

ばしして近世の戦列艦が出てくるのを。地球外なのでエイリアンならまだ分かるが戦列艦とは。

また戦列艦隊側も、先のフェン沖でこちらに虐殺を仕掛けてきた米空母艦隊の艦艇と似たフリゲートから逃れようと、一目散に逃げ走り——そしてたまたまロサンゼルスに到達した。

そういう訳で、パニックに陥りながらも、戦列艦隊は当初の作戦を遂行すべく、フェンの——もといロサンゼルスの海岸を砲撃した。

当時は1月、普段なら大勢のビーチ客もごく少数のサーフィン客を除いていなかったが、戦列艦による一斉砲撃は少なからぬ被害をロサンゼルスの市街に生み出し、少なからず負傷者を出した。

無論、すぐさま急行したフリゲートと沿岸警備隊のバーソルフ級巡視船による57m砲の砲撃で三隻とも撃沈された。

沈む船から海に飛び込み、市街地に逃げ込んだ皇国兵（マスケツト銃で武装）もいたが、彼らは緊急出動したロス市警特殊部隊SWAT（あと勝手に加勢した地元ギャング集団ら）により全員制圧か逮捕された。

幸いなことに全体的には大した被害ではなかったが、このロサンゼルス砲撃事件は米国が直接攻撃された事件として、アメリカ国民にとって9・11以来の衝撃となった。

まあつまり——米国を怒らせてしまった。

米政府はこれを『太平洋地域の海賊集団によるテロ攻撃』として対海賊戦争の実施を国民に主張、世論もかつての太平洋戦争における「リメンバー・パールハーバー」と同じように、「リメンバー・ロサンゼルス」のスローガンの下にこれを支持した。

アメリカは民主主義の国であり、これによって議会で大規模な海賊掃討部隊が決議、部隊編成がされた——が、これは米政府の作戦でもあった。

つまり対海賊部隊と称した、惑星αへの増派部隊派遣であり、惑星αに救出部隊を送ることが決定したときから、米政府はあるとき唐突に気がついた。

——地球と似たような環境をした惑星α。これってフロンティアじゃね？

という訳で先行する救出部隊とは別に、フロンティア開拓を行うための追加兵力を米政府は欲した。

そう、もしかしたら地下資源、人材資源、新たな市場の宝庫かもしれない惑星αを、ただ在日米国民と日本人を連れ帰るだけで放っておくのは勿体無いではないか。

だとしたら惑星αを米国の<sup>ステーツ</sup>開拓地とすれば、かなりの儲け話となるのではなからうか。

米政府には日本転移後に滑落した経済を回復させたい件もあったし、まあそれに、ワームホールから出てきて早々に空母『ロナルド・レーガン』率いる艦隊が戦列艦200隻とドラゴン250匹に襲われれば、当然のように戦力も追加しておきたくなるものだ。

そんな事があって、惑星αに派遣する戦力の追加配備が決定した。概要としては主に海軍から空母1、戦艦2、イージス艦10隻以上、艦載機200機、陸軍と海兵隊からはそれぞれ一個師団、空軍からも200機近い航空機の派遣が決定した。

だがそれは増援というより、もはやフロンティア開拓のための戦力だった。

もちろん民主主義に則り、正式に海賊討伐戦力という形で国民から同意を得た状態であった。

## 第10話 「再びの黒船来航」

その日、日本の新聞見出しは一樣に同じ文章で埋め尽くされていた。

——「第二次黒船来航」

これは横須賀港に入港した米海軍補給艦の艦名が『USNSマシュー・ペリー』であったことに由来しており、1853年、マシュー・ペリー提督率いる黒船の艦隊——米海軍東インド艦隊は当時江戸幕府により統治されていた日本に開国を求めて来航し、日本の人々を驚かせた。

そして2016年の1月21日、再びの『ペリー』の来航に日本人々はまたもや驚かされ、その日、在日米軍基地の存在する横須賀港と佐世保港には文字通り多数の米海軍艦艇が来航した。

航空母艦6隻、揚陸艦8隻、輸送船13隻、補給艦3隻、巡洋艦と駆逐艦多数、しかもその艦隊は地球から来たというのだ。

日本政府は状況把握のため、すぐさまこの米艦隊指揮官との面会を要請し、米艦隊側も断る必要がないため快くこれを了承、米空母艦隊の艦隊司令官が首相官邸に向かった。

そして、日本政府は全ての事の次第を把握した。

この大艦隊は日本の転移により取り残された在日米軍戦力とアメリカ人旅行者、日本滞在アメリカ人の救助のため（SF映画も甚だしいワームホール——詳細は不明——なるものを形成して）地球からこの世界へとやって来たのだ。

だが日本政府としても、在日外国人と在日米軍の存在は転移後に色々と厄介な問題だった——具体的にどう面倒なのか明言は控える——ため、米国へ帰還させることを了承した。

むろん、日本にいた米国民らは狂喜した。

二度と帰れないと思っていた祖国が、なんと自分たちから軍隊を派

遣して助けに来てくれて、そしてそれは在日米軍も同じで、ほぼ全隊員が帰還を希望した。

既存の在日米軍の海軍艦は旗艦『USSブルー・リッジ』、原子力空母『USSジョージ・ワシントン』を始めとして、イージス艦や揚陸艦全数十隻の海軍艦艇が帰還のために出港。

数百機近い空軍機と海兵隊機も、輸送用に引き連れてきた5隻の旧式空母に分解またはそのままの状態で載せられ、そして大勢の帰還米国民ら、そして車輛なども共にすし詰めされて出港した。

代わりに数日後、交代要員となった対海賊部隊（先のロサンゼルス砲撃事件後に結成）の空母艦隊——海軍の空母1、戦艦2、イージス艦10隻以上、艦載機200機、陸軍と海兵隊の陸上戦闘部隊多数、空軍の作戦機200機——が帰還する米軍と入れ替わるように新在日米軍として駐留した。

彼らは在日米軍を救出してそれで終わりだと思ってたのに、別の部隊が代わりに駐留してくるとは一体——まさかコイツら、この世界で何かやろうとしているのではなからうか。

日本政府や防衛関係者がこの米艦隊のことを訝しんでる間、多くの日本にいた在日米国民らも日本から家財一式、家族全員、場合によっては自家用車すらも輸送船に詰め込み、次々に日本を旅立っていった。

一部の米国民は日本への住み込みを決めた者もいた——が、それは例えばこの異世界の方が楽しそうだと思ってる変なヤツや、重犯罪を犯し指名手配中で帰国できないなど、訳アリな事情を抱えていた者たちだった。

さらにこの艦隊はアメリカ人の帰還を中心としていたが——なんと余裕の空いた数隻の輸送船に限り、地球への帰還を希望する在日外国人と日本人も輸送することにした。

彼らはこぞって帰還を希望したが、如何せん数が多すぎたため、数百万人のうち1万人が先行して帰還することとなった。

帰還者と在日米軍の詰め込みが完了した船から随時日本を出港していき、二週間後には最後の米国民らを載せた輸送船の一隻が出港した。

一応、日本政府は米艦隊に出来れば地球に取り残された日本国民らをこちらの世界に連れてきて欲しいと要請し、米艦隊側もこれを大統領に伝えておくといい残して、去っていった。

まさか、アメリカがこの世界にまで進出してくるとは、日本人は誰も思っても見なかった。

だが日本政府にはもう一つ悩みの種があり、それは先ほどの米艦隊が、フエン沖でパールディア皇国の大艦隊を文字通り全滅させたことにあつた。

おかげでフエン王国にいた日本人観光客およそ3,000人以上が助けられたのには感謝しているが、パールディア皇国は米国ではなく日本により自分たちの軍が大打撃を受けたと勘違いした。

後日、自らのプライドをズタボロにされたパールディア皇国により日本へ殲滅戦を宣言、日本は完全に米艦隊からの濡れ衣を被せられる形となったのだ。

そして米国は、日米安保を理由にこれに介入するつもりだった。

## 第11話 「フロンティア開拓」

2016年4月――

二カ月後のロウリア王国。

日本からさほど離れていないロデニウス大陸の中でも特に国土の大きいこの国の北部には巨大な軍事基地が建設されていた。

基地――それも4,000メートル級の滑走路が2本に3000メートル級の滑走路が3本もあるこの空軍基地は、しかしながら自衛隊の基地ではない。

この基地のフェンスゲートにはロデニウスの大陸共通語、日本語、そして英語で立入禁止と描かれている――アメリカ軍ロウリア基地、二ヶ月前にこの異世界Ⅱ惑星αの開拓に乗り出した米政府が設置した、突貫的な前線基地である。

日本と一緒に転移したアメリカ人と一部在日外国人を地球へ帰還させたのち、米政府はとんでもない行動に出た。

惑星αに日本列島を発見したこと、日本にいた自国民を地球へ帰還させたこと、惑星αを新たなフロンティアとして開拓しようとしていることを国内外に公表したのだ。

別に公表しなくても良いじゃないか、いや確かにそうだが、米国民以外の在日外国人らも救助した以上、いずれはどのみち他国にバレるのは必然的ではあった。

そのため公表に乗り出したようだが、このニュースは世界的に大きな反響を生み出し、米国民は政府のこの発表を軒並み好意的に受け取ったが――他国は資源問題や石油価格とかの事を気にして批判的に受け取った。

特に中国とロシアはこの発表にいろんなルートで云々と口を出してきたが、要するに自分たちも異世界開拓をさせろと言ってるのだ。

無論、米国はそれらの声を一切切無視して開拓権を独裁した――

だってアイツらに開拓権を渡したら、どんなことになるか分かったもんじゃないもの、と米国政府は思っている。

まあ、異世界——特に日本とも貿易している資源大国のクイラ王国での資源開発、ロウリア王国の土地開拓により、米経済は過去例を見ないほどの急成長を遂げた（米国は両国と国交を締結した。まあクイラは日米が全力でブランチマイニングしようが直下掘りしようが地下資源が無限水路が如く湧き出てくるし、ロウリアも日本は土地の広さと文明発達の遅れから北部の開発だけで持て余していたのでちょうど良かった）。

その米経済復活による反動で日本転移以降の経済恐慌で冷えきっていた世界経済も右肩上がりし始めた——そもそも対日投資額の多い米国から恐慌が始まったのだ——ため、中露+αの国以外は異世界開拓を後々には好意的に受け取り始め、大半の欧州諸国は開拓を支持するようになった。

まあこれによって石油資源が異世界から輸入されてきて、石油が売れなくなることを焦った中東諸国などの石油輸出国や石油取引所が、原油価格をバカみたいに安くし始めた——おかげで自動車大国はみんな喜び、バイオ燃料輸出国の経済が死んだ。

だが異世界開拓には問題があった。それは現地民族との対立である——というとまるで西部開拓民とインディアンのようなので語弊があるだろう。もう少し詳しく述べると、米国（と日本）がパーパルディア皇国と戦争状態になったのだ。

米艦隊はワームホール付近で皇国の大艦隊を殲滅し、それが原因でとぼつちりを受けた日本は皇国に民族浄化を宣言されている。

そして皇国は戦列艦でロサンゼルスを砲撃したため、米国はパ皇に本気で怒り狂っている。

さて、そんなこんなで自衛隊はパ皇と戦争を繰り広げ——すでに日本近海やアルタラスで自衛隊と皇軍が何度も衝突している、もちろん自衛隊側が圧倒的に有利な状態で——、その間にパ皇許すまじを掲げる米政府は異世界進駐米軍の大規模増派を決定している。

先ほどのロウリア基地もまた、米軍がそのパ皇との戦争のために作

り上げた基地であり、すでにロウリア王国は今世界最大の軍事基地と化していた。

そしてその基地や軍港には8隻の大型空母からなる8個空母打撃群、1,000機の米空軍の戦闘機や攻撃機に戦略爆撃機、7個陸軍師団と1個海兵師団、全て米軍戦力である部隊が地球から送られ、配置されていた。

「あいつら、本気だ」

とは何処かの日本政府官僚の言葉。

日本とフロンティアを探してこの異世界に飛び込んできた拳句、現地の国家を報復として亡国化させようとまでしている。

ちなみにその足掛かりとして日本列島の在日米軍基地も運用していくため、やはり不沈空母である日本から日本国民を地球に帰還させる計画は破棄されたそう。

というわけで、日本はこの世界での居残りが米国により決定されてしまった。

せっかく日本は異世界に転移してきたのに、これではいっただろうと何処にいようと、日本はアメリカの影響を受けていくしかなさそうだった。

## 第12話 「パールディア侵攻作戦」

2016年6月6日――

あれからさらに数ヶ月が経ち、この日パールディア皇国は1日で米国に降伏した――一体何があったのか、その過程について今から説明しよう。

5日深夜にロウリア王国各地の基地と日本の在日米軍基地から出撃したアメリカ軍異世界進駐軍は、パールディア皇国を降伏させるために動いた。

ついに米国がパールディアを完全に下すための本格的な行動に出たのだ。米国軍の戦略は基本的に徹底的に準備を行い、準備完了と同時に一気に敵国内部へ急速侵攻、これを落とすとすというものである。そしてその戦略をぬかりなく行うため、米国の侵攻は今さらとなったのだ。

作戦第一段階として、数百隻の戦列艦や竜母を抱えるパールディア皇国各地の軍港に対し、沖合いに展開した米海軍空母打撃群から飛び立った戦闘機による空爆とイージス艦及び攻撃原潜による巡航ミサイル攻撃を実施し、制海権を奪取する。

航空母艦は米本土から回航されたニミッツ級原子力空母『USSカール・ヴィンソン』の他、先の在日米国民救助艦隊に所属し、つい最近近代化改装を受けて前線投入された旧式のキティホーク級空母、フォレストル級空母の計5隻がそのまま参加。

そのほか、地球から回航された元新編第7艦隊の通常動力空母『USSジョン・F・ケネディ』、さらにこの日のために現役復帰した世界初の原子力空母『USSエンタープライズ』が参加した。

艦載機は主力のF/A-18E/Fスーパーホーネット、戦力補填で緊急生産された最新鋭機F-35CライトニングII、旧式ながら依然主力のF/A-18C/Dレガシーホーネットのほか、以前同様に参加するF-14Eスーパートムキャット、そしてF-14Eをさらに改造したF-14Fが主力を努める。

だが、さらには数的不足を補うために「航空機の墓場」から引つ張り出された数百機のF-4、F/A-18A/B、A-7、A-6のような退役済み旧式機までもが、現役復帰という形で存在していた。そう、この日のためにかき集められた艦載機500機はこういった旧式機を墓場から引きずり出した上で計上された数なのだ。一体F-4だけで何百機が墓場にモスボールされてると思っっているのだね？

え、そんな旧式機なんて今時役に立たないって？ 何を言うか、外見はお古だが中身は最新機器でアップグレードしているのだ。確かに機体耐用年数は中古だから短いし、最新鋭機には歯も立たないが、鈍足なドラゴンしか持たぬ皇国相手には戦力的には問題ない。

この作戦に参加した艦載戦闘機・攻撃機の数は前述の通り三桁に及び、空母は8隻、巡航ミサイルを放つ巡洋艦と駆逐艦、原子力潜水艦の数は合計して二桁に上った。

おい待て、お前らつい最近まで第7艦隊消失からの軍事力不足で困ってたんじゃないのか、と問い質したくなる規模の兵力であるが、フロンティア開発により好景化しはじめた米国の底力でそこは何とかしている。これぞ米帝プレイ。米帝プレイは余裕が出来た時こそ、その本領を發揮するのだ。

弾薬もどうしたんだと聞きたくなるが、経年劣化し始めた旧式弾薬の一斉在庫処分セールだ、問題ない。

そんなこんなで作戦開始日となった6日早朝、パールディア皇国各地に点在する、数百隻もの戦列艦やら竜母を擁する海軍軍港や港湾では、爆発音が途切れることなく響き渡っていた。

空からはF/A-18やF-4、A-7の編隊が500トンにおよぶ大量の爆弾の雨を降らせ、その編隊が去った後は駆逐艦や巡洋艦、原潜から放たれたタクティカル・トマホーク巡航ミサイルが空を埋めつくしながら飛翔し、これでもかと撃ち込まれる。

そうこうしていると、今度はF-35CやF-14Fといった艦載機の編隊がやってきて何十発もの誘導爆弾を落としたり、港に接近し

たタイコンデロガ級イージス巡洋艦複数隻が5インチ主砲で直接的に港を艦砲射撃したりしていく。

仕舞いにはつい最近に現役復帰したアイオワ級戦艦『USSアイオワ』『USSミズーリ』の2隻の戦艦が沿岸部に向けて16インチ砲弾(40.6センチ)を何十発も連射してブチ込んだり、トマホークを乱射したりとやりたい放題である。

何千発もの航空爆弾と空対地ミサイルにロケット弾、機関砲弾、そしてタクティカル・トマホークと、戦艦の16インチ砲弾の集中砲火を受けた港湾は、当然ながら跡形もなく吹き飛んだ。

もちろんその港湾に停泊していた戦列艦や竜母にも爆弾や砲弾やミサイルが降り注ぎ、何もかもが木っ端微塵に吹き飛ばされた。

まあそんな感じで、皇国の海軍基地とその港湾機能はほぼ全て潰され——ほんの一部が戦後を見据えて攻撃されなかったが——、そこに停泊していた戦列艦や竜母数百隻は全て撃沈された。

もちろん、防空のために竜母や付近の基地から合計して1,000騎近いワイバーンロードとワイバーンオーバードが上がってきたのだが、それらは艦隊防空中のF-14FやF-35Cの中距離AAMと、十数隻のイージス艦の長距離SAMの餌食となり、全く米艦隊に近づけぬまま、すべてが上空に散った。

まあ要するに、パールディア側の戦力は米軍側の攻撃に対して、まともに対抗することが出来なかった訳である。

これによりパールディア皇国の保有する総計1,000隻近い艦艇は本国に居たものに限りほぼ全て撃沈、制海権は完全に奪取される形となり、アメリカ軍の攻撃開始から15分でパールディア皇国海軍は全滅する形となった。

## 第13話 「パールディア大空襲」

米軍は皇国沖合いの制海権を奪取した。

制海権奪取後は、作戦第二段階となる。それは米空軍戦力により、パールディア皇国に対して戦闘爆撃機と戦略爆撃機を多数動員し、皇国国内の陸軍基地と工業生産施設の全滅を狙った戦略爆撃である。

今回の作戦のために米国はワームホールを通じて地球から持ち込んだ、重量物運搬船改造の人工衛星打ち上げ艦を8隻と、重量物打ち上げロケット（HLV）多数、さらに『X-37C宇宙往還機』<sup>スペースプレーン</sup>2機をこの世界に持ち込んでいる。

それを利用して米国は現在、この星の惑星軌道にGPS衛星を40基も打ち上げている。

そのおかげで現在、惑星αと米国が呼称するこの世界ではGPS機能が異常なく機能しており、巡航ミサイルの誘導も航空機のGPS航法もすべて問題なく行える状態となっていた。

それでは今回の作戦戦力を説明する。

今回は多数の目標を一気に叩き潰すため、大量の爆弾を積んだ大型戦略爆撃機、誘導爆弾を載せ精密爆撃を行う攻撃機と戦闘爆撃機、そしてそれらを護衛する戦闘機からなり、作戦参加機は総計すれば400機に昇る。

戦略爆撃機は「航空機の墓場」からモスボール状態のものを引き出し最低限再運用出来るように改装したB-52HやB-52Gと、同じく引っ張ってきた退役済みのB-1B「ランサー」などの戦略爆撃機を改装のち再就役させて地球から持ってきていた。

戦闘爆撃機や攻撃機は現役のA-10CやF-15Eなどの機体、また退役モスボール済みのところを引っ張りだしたF-111シリーズとAC-130Hといった機体から構成される。

護衛戦闘機も現役もしくはモスボール状態から引き摺り出したF-15やF-16にF-4、現役バリバリのF-22Aラプター、試

験も兼ねて最新機のF-35AやF-15SEサイレントイーグルなどが参加。

それどころか実戦における実地試験のため、なんとB-21、F-15X、B-1R、B-52J、MQ-47B、MQ-58、MQ-25などのまだ採用されてなかったり、開発中の最新航空機までもが数機だけ参加しているほどだった。

さて、そんなわけで実施された作戦参加機400機によるパールディア皇国への戦略爆撃であるが、その結果はもはや爆撃演習と言っても過言ではない有り様となった。

まず、各地の皇国の軍事産業地帯には大挙したB-52やB-1Bといった戦略爆撃機により絨毯爆撃が実施され、ほとんどの都市が廃墟も残らないような荒地に変えられた——強いて言うなら民間人犠牲者を減らすため避難勧告のビラをばら蒔いた後だったが。

沿岸地帯の住民は先の米海軍による猛攻撃を目撃してたため全員逃げたが、内陸部に住んでいた人間はそれを目撃してなかったし——それにプライドの高い皇国の人間なのだ、逃げるはずもなかった。

皇国軍の主要軍事基地も、A-10の30mm機関砲アヴェンジャーが建物を木つ端微塵に粉碎し、F-15Eがバンカーバスターを様々な施設に落として、AC-130が上空を旋回して105ミリ／40ミリ砲弾の雨を降らせ、MC-130が投下したMOAB<sup>モアブ</sup>になにもかもが消し飛ばされる。

たまーに爆薬と信管を詰め込んだトイレだったりバスタブだったりキッチンシンクだったりも落とされるが、それはご愛嬌。

こんなのを喰らったら当然どんな軍隊でも行動できる筈がないが、皇国軍は迎撃のためにワイバーンオーバード500騎（以前の空襲時に飛んできたのはほとんどが海軍所属騎だった）が出撃した。

しかしそれらは全て護衛のF-22AとF-15に墜とされ、それのみならず、元から皇国軍には亜音速飛行する米空軍機に通用するまともな迎撃手段がなかったためにまともな迎撃が困難だった。

そのため、皇国側にまともな対空戦力が無いと発覚すると、誘導爆弾を搭載していた機はちゃんと高高度から落としていたが、無誘導爆弾を抱えてた爆撃機はほとんどがイタズラ染みた超低空爆撃を行った。

B-11BやF-111、A-110のような元から低空からの爆撃を考慮した機ならまだしも、F-115EやF-116のような一応は低空爆撃も出来る程度の機体どころか、鈍足鈍重機なB-52でさえもが低空爆撃を行う始末。

彼らが低空爆撃を行った言い分はこうだ。

——「スリルがある！」

そんなスリルを求めたおかげで、B-52の内1機が超低空爆撃中に対空砲火——皇国がこの世界の近代文明国から密輸した20ミリ対空機銃——による攻撃を受けて被弾するという因果応報な事態も起きたが、「成層圏の要塞」の渾名は伊達ではない。

その巨体と8発のエンジンからなる生存性の高さにより被撃墜機や撃破判定された機体は1機もなく、むしろ対空砲陣地は襲来したA-110によりお返しとばかりに撃った弾の数百倍の数の30ミリ機関砲弾を喰らい沈黙した。

それに考えてもみてほしい。

これは全体——全作戦参加機数400機のうち、僅か1機のみ被害、つまり0.25%の被害でしかないのだ。ぜんぜん大した被害ではない。

この大爆撃の結果、パールディアの三大皇国陸軍基地と飛竜隊基地、そしてデュロを始めとする全ての軍事工業都市は完全に叩き潰され、文字通り何も無くなってしまった。

民間人に対する無差別な爆撃は制限されていたが——とはいえビラ撒きによる勧告後には民間人がいようがまいが徹底して各地の都市を米軍は叩き、少なくとも空爆による爆弾類の嵐にあったそれらの地域において爆撃前の面影は全くなく、完全なるやり過ぎ<sup>オーバーキル</sup>であった。

そういつたわけで、このアメリカ軍によるパールディア皇国攻略

作戦の第二段階は幕を閉じる事となった。

そして、作戦第三段階も間髪入れぬ間にすぐさま行われる事となっていた。

## 第14話 「パールディア上陸作戦」

パールディア王国攻略作戦の第一段階と第二段階の成功によって制海権と制空権を確保した米軍は、作戦最終段階——最終段階はズバリ皇国海岸への直接上陸——に移った。

海軍の支援のもと、米海兵隊と米陸軍による合同での上陸作戦を行いそのまま陸上侵攻で皇国首都を包囲、そこへ空挺部隊を皇国首都に下ろし、これを制圧、皇国の首脳施設を制圧する。

上陸戦力は4個海兵師団6万名強、M1エイブラムズからなる250台の主力戦車と、それを上回る数のLAV-25を始めとする装甲車輛やトラック、150機のヘリコプターとなり、もちろんほとんどが海岸からの強襲上陸とヘリコプターからの空挺強襲を敢行する予定だ。

さて、作戦は海軍による港湾制圧と空軍による戦略爆撃が完全に終了した昼頃に開始される運びとなり、皇国沖合いに展開した多数の米海軍揚陸艦から、数十隻の上陸用ホバークラフト(LCAC)とAAV7水陸両用装甲車が発進した。

空母や強襲揚陸艦からも多数のヘリコプターが飛び上がり、海上と上空を突き進む。

上空からは数百機のヘリコプター——UH-1やUH-60などの汎用ヘリ、CH-47やCH-46にMV-22オスプレイなどの大型輸送ヘリ、MH-6やRAH-66などの小型ヘリ、AH-1ZやAH-64Eなどの攻撃ヘリが向かう。

それらのヘリの一部は機体に大型のスピーカーを取り付けている。そしてそこから、地獄の黙示録よろしくワグナーやロックンロール、合衆国歌を響かせながらやって来て——やはりお前ら遊びに来ただけじゃないか——、ミサイルと機関銃を沿岸に乱射しまくった。

一応、海岸にはマスケット銃や手回し式ガトリング銃で武装し、地竜リントブルムを従えた皇都防衛隊の兵士らが多数いた。

が、それらは皆まともに反撃する暇もなく全滅させられた。

何せ上空からは攻撃ヘリの編隊が列を組んでロケット弾とミサイルを降らせ、海上からはアイオワ級戦艦 USS アイオワ、USS ミズーリの2隻が16インチ砲で彼らの陣地を艦砲射撃でコテンパンにするのだ。

さらに海上から迫る上陸部隊も機関銃やグレネードランチャーを乱射してくるし、上陸部隊を援護するイージス駆逐艦からもトマホークが飛んでくる。

仕舞いには航空支援に現れた複数のA-10サンダーボルトII攻撃機がマーベリック空対地ミサイルや30mmアヴェンジャー機関砲で皇国兵を死体すら残さず吹き飛ばしていくのだ。

マーベリックの側面には、デカデカと雑な英語でこんな風にペイントが描かれている。

——「資本主義の大安売り中、みんな纏めて貰いやがれ！」

まあそんな冗談はさておき、そんなこんなで皇国兵らはまともに上陸阻止をすることもできず、やがて米軍の上陸部隊が次々と海岸に上陸。

M4A1自動小銃で武装した海兵隊兵士や、120mm滑腔砲を載せたM1A2エイブラムズ主力戦車、LAV-25やAAV7などの水陸両用装甲車と皇国兵は交戦。

当然ながら、数世紀分もの技術格差があり、なおかつ戦車すら持つような相手に勝てる筈もなく、皇国兵らは惨敗、壊走した。

とどめに、壊走した皇国兵は間髪いれずに上陸した自走多連装ロケット砲HIMARSとM109A6自走榴弾砲による遠距離攻撃を受け、殲滅されている。

海岸の皇国兵士らの殲滅後、米軍地上部隊は部隊集結の後に、多数の戦車を配備する陸軍の第18機甲師団を中心として皇都エストシラント目指して突進した。

数百輦のM1A2戦車、AAV7水陸両用車やLAV-25装甲車、ストライカー装甲車、ハンヴィーやMRAP、武装トラックなどが皇国住宅街の家々を踏み潰して皇都を目指し、やがてネズミ一匹通

さぬ勢いで皇都を包囲した。

上空からは、第82空挺師団と第101空挺師団所属の数千人の兵士と、歩兵旅団戦闘団の空挺戦車『グリフィンII軽戦車』、ストライカー旅団の空挺仕様のストライカー装甲車を満載したC-17グロブマスターIII大型輸送機が大挙した。

数十分後、米陸軍と米海兵隊は機甲戦力を持ってして包囲された皇都エストシラントに対し、オスプレイとC-17に載せられた空挺兵らがパラシュート降下して展開。

またC-17輸送機から空挺投下されたグリフィンII軽戦車とストライカー装甲車らも戦力として加わり、彼らは合流して戦力を固めた後、一路皇城であるエストシラント城を目指した。

数分後、米軍と皇城を護る皇国軍近衛集団は交戦、交戦の末にそれから皇国の文字通り最後の砦は振り払われ、また米軍特殊部隊群、通称『グリーンベレー部隊』も突入し、激戦の末に皇城は完全に米軍によって制圧。

皇城は陥落し、皇城に立て籠っていた皇国政府首脳陣と皇帝ルディアスは米軍に捕縛された。

捕まったルディアスはそこで米国に対し皇国側の完全降伏を宣言、これによりパーパルディアは米国の攻略作戦開始から18時間もせず陥落した。

パーパルディアと米国との戦争は、これにて終了したのだ。

## 第二章 異世界大開拓 第15話 「地球国家の懸念と繁栄」

パーパルディア王国との戦争が終結した後、米国はパーパルディアを自国の実質的な植民地、もとい開拓地として開発を開始した。

パーパルディアはかつて所有していた植民地を全て米国の自治区として没収され——米国からすれば下手に独立されて紛争にならなくても困るからだ——、工業地帯も全て米軍の戦略爆撃で破壊された。

かつてこの大陸の中でも最大の魔法技術による繁栄を誇った工業先進国は、交渉で皇族らによる政治も奇跡的に維持を許されたものの、僅か18時間の間で国家としては一気に転落し、この地域に多数ある農業後進国の一つへと変化していた。  
もちろん、その農業生産力は限りなく低い。

対して新たなフロンティアを手に入れた米国は、とにかく凄い勢いの好景気により、本国はもはやお祭り騒ぎも甚だしい状態だった。

米国は常にクイラとパーパルディアの鉱脈から石油、鉄鉱、レアメタルなど大量の地下資源が大量に手に入り、ロウリアや第三文明圏など巨大な市場相手に大量の民生品を売ったり工場を作ったりすることで、とにかく儲かっている。

それ以外にも、異世界で戦争したことにより米軍が再軍拡を開始、このお陰で米国内の軍需産業はものすごい勢いで成長を続け、民生品の輸出で国内産業の成長も著しい。

そのため今の米国は、異常も異常な勢いの好景気の只中にあり、そしてその影響は地球でも現れていた。

米国経済の活性化は地球の他国家へも多大な恩恵を促し、今や世界中が好景気である——まあ、その影響は中国やロシアにも出たのだ

が。

なお日本だが……パールディア戦争後、何やかんやあって、米国内にワームホールの船舶通行許可を取り付け、ワームホールを介して地球国家との交流が再開されることとなった。

通行許可といっても、入り口と出口では米軍が中核となってワームホールを通過する船舶を臨検し、通過する人間はFBI（連邦捜査局）により徹底的に身元調査を行われるため、非常に厳しいものである。（ちなみにこれに引っかけた複数名の各国スパイが何故か行方不明となっている）

だがこれによって日本は地球国家との貿易や文化交流が再び可能となった訳である。

これに特に歓喜したのは日本のサブカル好きな海外オタク達と、日本国外にいたため共に転移できず地球に残された日本人達、そして有能な人材が帰還すると狂喜した日本国外務省だった。

さて、そんな中で米国は好景気絡みで欧州と更に仲良くなったし、国内に余裕が出来たので発展途上国への今まで以上の支援も実施、発展途上国との関係が良好化した。逆に中国やロシアとの対立は悪化していた。

何故なら中国は巨大な人的市場であり、ロシアは石油資源国であるが、米国が異世界で第三文明圏という名の巨大市場で大儲けし、クイラという名の資源地帯から山ほど地下資源を持ってきて国内で使っている。

今は米国の好景気による恩恵を受けてるから良いが、いずれ米国のみならず欧州諸国すべてが市場を異世界に移したら中国は詰む——今はまだ米国は欧州に異世界への市場進出を拒んでいた。

そして米国が異世界産の地下資源を地球世界の国家に輸出し始めたら今度は資源国のロシアが詰む。というか資源国が全部詰む——今のところは輸出せず、それらの資源は米国が国内だけで使っていたのだが。

そんな次第であり、だから米国はもつと異世界での行動を抑えろというのが、中国やロシアなどの言い分である。もちろん米国は今まで通り変わらさずやっている。

しかも、米国が異世界進出のために米軍の再軍拡を始めた——空母だけで退役艦が7隻も現役復帰したのだ——ことは非常に脅威と捉え、彼らもまた対抗して再軍拡を始めていた。

特に中国はそれが顕著である。

米国に対抗し、最新ステルス戦闘機であるJ-20、J-31の量産配備や、空母「遼寧」を参考にした国産大型空母の量産を行っている。

さらに中国軍はとんでもない無茶をしようとしてるらしく、米海軍のアイオワ級戦艦 2隻の再就役に触発されたのか、これに対抗すべくソ連崩壊時のドサクサに紛れて入手したソヴィエツキー・ソユーズ級超弩級戦艦の設計図を一部改編した、新型の国産戦艦を建造しているという噂もあるほどだ……飽くまでも噂だが。

そしてロシアもまた、米軍や中国軍に対抗して10万トン級大型原子力空母の突貫建造、開発中の最新ステルス戦闘機Su-57の完成と実戦配備、MIG-35やSu-35の大量生産を急がせ、急激な軍拡を行っている。

これら大国の大規模軍拡は、特に欧州の人々の間で冷戦の再来として囁かれ、「最悪、第三次世界大戦の引き金となるのでは」という恐怖心すら抱かせた。これによってなのか、主に欧州の富裕層を中心として、第三次大戦に備えて異世界の日本へ人々が疎開する動きすらある。

この地球が今後どのような歴史を歩むこととなるのか、それは異世界に進出した米国の行動の次第に懸かっているのは明白だった。

## 第16話 「新天地グラメウス」

2017年1月10日――

あれから5カ月が経過し、米国は異世界における再び新たなフロンティアを開拓するため、再び軍事行動を起こすべく準備をしていた。

新たなフロンティアとは、第三文明圏の存在するフィルアデス大陸の北にある巨大な大地、ずばり魔物大陸こと『グラメウス大陸』である。

その大陸は北にあり、人類の文明はほぼ存在しないとされているが、代わりに多くの魔物と称される特殊生物(?)が生息しているらしい。

そして――米国は考えた。

ここを大規模な農地にしたり、もしかしたら何かあるかもしれない地下資源が手に入るのでは？

そして、ここにいる魔物を捕まえる事が出来たら、何かしらの医療関係の研究に使えるのではないか？

かつては魔王と呼ばれる、魔物の上位互換的な存在もこの大陸にはいたらしい。

だが、そいつは米国がこの惑星 $\alpha$ に進出する直前に自衛隊が有害鳥獣駆除を名目に、南下してきたところを殺してしまったらしいのだ。

他にも自衛隊はエスペラント王国という大陸内唯一の人類文明圏を拠点として、魔獣の討伐活動を行っているらしい。

だがそれだとしても、依然としてこのグラメウスには大量の研究サンプル……じゃなくて魔物がいるのは確かなことだ。

それにグラメウスはかなり巨大な大陸で、資源開発や農業開発、移民、開拓、軍事演習地、大規模実験場などなど、手に入れたら使い所には困らない。

しかも魔物がうじゃうじゃ居ることが問題となり、第三文明圏の国々やそれ以外の国々もこの大陸に攻め込んだり開拓地にしたりすることはないらしい。

ならば開拓するより他無い！

そういうわけで米国は、今回もまた異世界進駐米軍部隊を前面に押し出し、新たな土地にてフロンティア開拓が行われることとなった。

今回の作戦における参加兵力は空軍と海軍、陸軍と海兵隊——要するに四軍が中心となっている。また、今回は米軍から突貫的な新兵器が参加した。

それは2015年に米海軍を退役していたタラワ級強襲揚陸艦USSナツソー、USSペリリューの二隻を再利用した軍艦だった。甲板上に自走ロケット砲『MLRS』の227mmロケット弾12連装発射機を100基も敷き詰めたそれは、現代の制圧ロケット砲艦である。

一艦あたり総数1200発の『M26A2』227mmクラスター弾頭ロケット弾を一斉発射可能（実際には交互射撃だが）。

合計してサッカーコート1400面分（＝東京ドーム約208個分）の面積にクラスター爆弾の雨を降らせることが出来る。

これが参加したのにはグラメウス大陸に棲む魔物の数の多さを考慮してのものであり、文明力の低いこの異世界では人海戦術が多用される。

朝鮮戦争で中華人民解放軍のそれを受けてベトナムとパールハーバーに次いでトラウマと化してる米軍は、この対人海戦術兵器がどれほど有効なのか調べたいという意図もあった。

またこの整地作業には、ロケット砲艦2隻の他にも面制圧を目的に多数の戦闘爆撃機や戦略爆撃機、海軍艦船が参加する。

また、人類未開の地であり不整地が多いことから、ヘリやティルトローター機などの回転翼機に兵士を載せ、空中機動戦を展開する予定だ。

もちろん、そのため陸上戦力はヘリ降下兵と空輸可能な装甲車輛——LAV—25装甲車、ストライカー装輪装甲車などを中心に構成す

ることとされた。

それに敵は飽くまでも生物、統制の取れた軍隊とは異なり大してろくな抵抗も考えられないため、戦力は当然ながら皇国戦の時より少なくなっている。

だが、そんな少ない——もつとも前回と比較して、だが——兵力ですら、この世に地獄を作り上げるのがアメリカ軍。

今回のグラメウス侵攻……もとい開拓も、大変な事になりそうなのは、誰の目から見ても明らかであった。

## 第17話 「グラメウス侵攻開始」

2017年1月初頭――

全ての準備が完了し、ついに米軍によるグラメウス大陸侵攻は開始された。

作戦開始に先立ち、グラメウス大陸の沖合いには「ヤンキー・ステーション」と呼ばれる空母機動部隊の遊弋地点が指定された。

そこには2隻の空母――旧式原子力空母『USSエンタープライズ』、通常動力空母『USSサラトガ』が展開している。

彼らは合流して一つの空母機動部隊を形成し十数隻に及ぶ多数のイージス巡洋艦とミサイル駆逐艦、原子力潜水艦に護衛され、また上陸部隊を満載した強襲揚陸艦2隻、ドック型揚陸艦3隻と共に展開した。

作戦の順序として、まずはグラメウス大陸の南部にて大規模な上陸作戦を実施。

続いて海岸堡を確保し、部隊を三つにわけて南のトーパー王国、北西の大陸内部にあるエスペラント王国、大陸内北東の鬼人族の国へまっすぐ進軍である。

鬼人族の国は、エスペラント王国に日本の自衛隊が一時進駐した際に所在が分かった鬼人――ホントに鬼のような見た目をした亜人の住む国だ。

とりあえず前線拠点としてここがちょうど良いので、米軍はまっすぐここに進軍である。

そのためには、まず上陸作戦時に海岸堡を確保すべく、海岸付近の魔獣の一掃が第一目標とされた。

作戦開始早々、グラメウス大陸には地獄が出現した。

立ち上る黒煙、噴き延びる火焰、逃げ惑う魔獣たちの悲鳴、鼻腔を刺激する硝煙と焼けた肉の臭い、広範囲に渡る大規模な森林火災と、

降り注ぐ砲弾爆弾の雨。

グラメウス大陸には米海軍の巡洋艦や駆逐艦、フリゲート、沿海域戦闘艇の放った大小さまざまな砲弾と、多数のトマホーク巡航ミサイルが降り注いだ。

空母の護衛を務めるタイコンデロガ級巡洋艦やアーレイ・バーク級駆逐艦、ズムウォルト級駆逐艦、インディペンデンス級LCSなどの艦艇による海上からの一斉攻撃だった。

色々と開発が失敗して中途半端な性能となったズムウォルト級駆逐艦は、今回の作戦でトマホーク・キャリアー兼オーダーメイドで臨時製造した通常砲弾を載せ砲撃艦として、言ってしまうえば「いらん子」扱いされて送られていた。

さらに改タラワ級ロケット砲艦2隻の227mmロケット弾、合計2400発が発射され——その光景はまるで洋上の火山が噴火したかのようなだった。

連続発射された多量のロケット弾は、着弾数秒前で上空にて破裂、内部に梱包された多数のクラスター爆弾を撒き散らし、豪雨の要領で大地に降り注いだ。

また他にも、アイオワ級2隻と同様に再就役したアイオワ級戦艦 USS ニュージャージー、サウスダコタ級戦艦 USS アラバマの二隻の戦艦が40.6cm三連装砲から咆哮を上げる。

このUSSアラバマは先に再就役したアイオワ級と比べてさらに旧式であるが、それでも再就役にあわせてアイオワ級同様の改修が施され、戦力的にはかなり力強くなっていた。

これに加えてサラトガ、エンタープライズの2隻の大型空母からF-14F、F/A-18C/D、F-4、A-4、A-6、A-7などの旧式の戦闘機や攻撃機が発艦。

彼らは物騒な航空爆弾やら何やらを胴体や翼の下に抱え、グラメウス大陸上陸地点の上空に飛来した。

もちろんアビオニクス、エンジン換装など近代化改修を施してるとはいえ、全部「航空機の墓場」から引っ張ってきた旧式の退役機体で

ある。

それほど、異世界進出における旧式大型空母7隻の一斉再就役は海軍航空機の大量不足を巻き起こし、退役機の一斉現役復帰をせざるをえない状況を引き起こしたのだ。

もちろんそれは不味いので、現在F/A-18E/FとF-35B/Cなどの新世代機の量産を急いでいるが、間に合っていないのが現状である。

そのため今回のように旧世代機しか投入できない戦闘なども異世界では多々あったが、今回のようなモンスター狩りではこれで十分だ。

これら現役復帰した退役艦載機たちは、ロデニウスや沖繩の基地から飛来した米空軍戦略爆撃隊のB-52、B-1Bと共に、その優れた兵装搭載量を活かして大量の爆弾の雨あられをグラメウスの大地に降らせた。

無誘導爆弾、クラスター爆弾、大型爆弾、小型爆弾、誘導爆弾、焼夷爆弾、燃料気化爆弾など種類はさまざま。

それこそ、条約により在庫処分待ちだったベトナム戦争時代のナパーム弾、超大型爆弾、デイジーカッター（なぜか倉庫に残ってた未使用品）も山ほど持ち込み、これをグラメウスの大地に降らせ、広大な範囲の森を焼き払った。

その様はまるで、かつてベトナム戦争における米軍のベトコンに対する攻撃とかなり似ていた。

空を切り裂くジェットの高音、翼を広げ獲物を狙う猛禽類のようなヘリの爆音、地を焼きつくすナパームのガソリン臭。

降り注ぐロケット弾、地を焼き尽くすナパーム弾、周囲を風ぎ払うように炸裂する榴散弾、甲高い音を上げながら地面に突進する2000ポンド爆弾。

森を焼かれ、木を焼かれ、草花を焼かれ、土地を焼かれ、大気を焼

かれ、地面を焼かれ、海岸を焼かれ、山を焼かれ、獣を焼かれる。

ベトナム戦争時代のベトナムに対するトラウマが、何もなかった森を焼き討ちする習性を、米軍人らの体に刻み込んでしまったようだ。

グラメウスは海岸まで魔物達で溢れていたが、そこにあったのはただただ轟音、爆音、悲鳴、喚声、そして魂消るのを告げる断末魔による地獄の大合唱。

艦載機らによるナパーム弾までも使用した空爆と戦艦の艦砲射撃、改タラワ級ロケット揚陸艦によるロケット攻撃により、グラメウスの大地は完全に耕された。

後には魔獣含めて何も残らなかった——何も。

焦土と化した海岸からは完全に魔物がいなくなり、この猛爆撃により多くの魔物たちも大陸奥地へと逃げ帰った。

そしてその後方から、それを追撃するかのようには海兵隊兵士を満載した多数の揚陸艇と、ヘリコプター多数機からなる空中機動部隊が上空に現れつつあった。

この地獄のようなグラメウス大陸侵攻は、まだ始まったばかりなのだ。

## 第18話 「密林制圧&魔獣掃討」

二週間と五日後、グラメウス大陸の海岸から上陸した合衆国の米陸軍と海兵隊からなる陸上部隊および空中機動部隊。

彼らは、空軍と海軍航空隊の近接航空支援を受けつつ、着実に密林を制圧しながらグラメウス大陸の奥地にまで侵攻していた。

この数日の間にアメリカ軍は、南はトーパ王国、北西はエスペラント王国、北はまもなく鬼人族の国といった位置まで到達している。

比較的早い進軍だったとはいえ、密林に潜んでいる魔獣たちの掃討は着実に行われている。

人を食べる魔獣は当然ながら行動中の米軍にとっての脅威であり、当然人を襲うため脅威度が高い。

そのため当たり前だが魔獣は進軍中の米軍にも襲いかかってくるし、それらが突然密林の中から飛び出してくれば、それはもはやゲリラ兵そのものだ。

かつてのベトナム戦争、さらにいえば冷戦時代の中南米、太平洋戦争の硫黄島を始めとする地域でゲリラ兵相手に何度も手を焼かされた米軍は、今回のグラメウス大陸制圧において徹底したゲリラ制圧——もとい魔獣制圧を行った。

こんな言葉がある——『密林の制圧作戦は、駆逐艦による対潜戦闘と同じだ。敵を叩き潰したと確信が持てない限り、そこで戦い続けさせるべきなのだ。それを行わねば、どれほど兵力を投入したところで、おつつくものではない』。

かつて米国が介入したベトナム戦争では、アメリカ軍はヘリコプターを用いた歩兵の空中機動のみによる地域制圧を行った。

だがこれは、地域から地域を空中から移動するために広域制圧には向いておらず、取りこぼしが多いため、ベトコンを一掃出来ないという問題があった。

そうして取りこぼしとなったゲリラ兵が、米軍の補給路に潜み、制圧済みとされた地域で補給部隊などに攻撃を行った。

だから米軍はベトナムを制することが出来なかつた——もつともこれは誇大表現で、実際には国内世論による批判も大きかつたが。

とはいえどやはり、ベトナムではゲリラによる影響が大きかつたのは事実で、今回は容赦無しの対ゲリラ戦を行う。

そのため今回は、ヘリを用いた空中機動も行うが、それよりも地上から森を切り開いて少しずつ地域を制圧して、確実に地域を制圧し、魔物を一掃する。

それこそゲリラ狩りは、先の言葉にあるような駆逐艦の「対潜戦闘」の勢いでだ。

今回はこれに加えて、世論の都合——もし枯葉剤など撒けば本土で「米軍による悲劇のベトナム戦再び」と罵られかねない——で枯葉剤なんかは使えない。

よつて地域の地上制圧のために、歩兵部隊の数も、装甲車輛の数も、さらには熱赤外線暗視装置、近接航空支援機の数まで多量に増やされて投入された。

もつとも、これには別の理由もある。

それはモンスター狩りとはいえ、かつて自衛隊が戦闘した『魔王ノスグーラ』なるものや、それに相当する驚異的な魔獣がこの密林にいるかもしれないからだ。

そのノスグーラとやらは人間を食べる身長3.5mほどのバケモノで、35mm口径程度の機関砲弾なら弾き、50m近いジャンプが可能で、魔法で1km離れた地域を焼き払うことも可能という、かなり危険な存在だ。

自衛隊もこの魔王ノスグーラとやらには苦戦したらしく、地对空ミサイルによる攻撃と10式戦車による砲撃でようやく仕留めたらしい。

そのため、もしもこれやその亜種に遭遇した場合に備え、M1エイブラムス戦車やM2ブラッドレー歩兵戦闘車、LAV-25装輪装甲車、105mm砲またはTOW対戦車ミサイル搭載型のストライカー

装甲車などといった、多数の戦車や対戦車兵器が上陸している。

実際、『ゴウルアス』とかいうデカイ魔獣が何体か出現してるのだが、そいつは自動小銃で倒せるくらい防御力は低いのに、AAV7水陸両用装甲車を一撃で大破させれる威力の爆裂魔法を放ってくるような危険生物だ。

これらを制圧するためにも、大量の戦闘装甲車輛、そしてそれらを密林で動かすために必要な多数の工兵と、装甲ブルドーザを始めとする多数の工作車輛が持ち込まれていた。

ちなみにこれら工作車輛はあまりにも数が足りなかったため、日本の建機・重機メーカーにブルドーザやコンボ（シヨベルカー）を大量発注、グラメウス到着後に運転席のガラスを防弾仕様に張り替え、スラットアーマーを張り巡らせ、運転席を中心に防弾板を貼って装甲化、機関銃の装備をするなどして装甲化させて戦闘工兵車輛に仕立てあげていた。

これによる影響は、転移後に営業が不安定となっていた建機メーカーや重工企業に多額の外貨を投下させ、彼らの財源を充分以上に潤すこととなった。

加えて、今回グラメウス大陸における地域制圧を目的として地球からGBU-43/B MOAB<sup>モアブ</sup>—Massive Ordnance Air Blast、大規模爆風爆弾兵器が数発持ち込まれている。

稀に気化爆弾の一種として間違えられることのあるこの爆弾は、ただただ炸薬量の多い通常の爆弾である。通常の爆弾である（大事なことなので2回言いました）。

だが総重量で約10tにもなるその爆弾の威力は、実地試験の際、その凄まじい爆発のため、原子爆弾のようにキノコ雲が発生したという事から容易に想像出来るだろう。

これを米軍はすでに6発もグラメウスの大地で使用している。飽くまでもヘリの着陸地帯確保や前哨基地を建てるための土地を確保するために、森を薙ぎ払うのに使用されてるが、たまに対魔物で直接

使われている。

なにせ、グラメウス大陸の火山でキ〇グギドラ擬きの三つ首巨大怪獣、じゃなくて巨大魔獣が出現してきたりもしたので、そういう時に切り札として使われる。

この時、エスペラントの住民が「もう一体いたのか」と驚いてたが、米軍にはそれがどういう意味かはよく分からない。

余談だが、件のキングギ〇ラ擬きの魔獣が現れた時には、日本特撮映画オタクでもあつた侵攻部隊指揮官の米軍大將がその魔獣が「ホンモノ同様の強さがあるのでは」と大慌てで付近の空軍部隊と洋上の海軍艦艇に支援を出した。

これによりトーパ王国・日本に置かれた前線飛行場や基地からスクランブル緊急発進したF-22・F-35A戦闘機、A-10・AC-130攻撃機、B-52爆撃機、MOAB搭載のMC-130W特殊輸送機、総計数十機の全力投入による大規模空爆と、洋上のイージス艦・改タラワ級ロケット揚陸艦による巡航ミサイル・長距離ロケット弾による飽和攻撃を実施。

結果として思ってたよりもだいぶ弱かったキン〇ギドラ擬きは、F-22とF-35の対空ミサイルの飽和攻撃で撃ち墜とされた後、地上で攻撃機による攻撃と巡航ミサイルとロケット弾の雨霞を浴びて身体的高速再生が間に合わず絶命、オーバーキルとばかりにその死骸がB-52編隊による絨毯爆撃とMOABの投下を受けて死体すら残らなかつた。

というか、その地点を中心に半径150mのクレーターが出来てしまった。

それはさておき  
閑話休題。

まあそういういったヤバイ兵器を多用したお陰なのか——それとも米軍が空中機動と陸上移動の双方に移動手段を分けたためか——どうかは知らないが、すでにグラメウスの四割は制圧できている。進軍度

なら大陸の七割くらいは進んでいた。  
グラメウス大陸の完全制圧まで、あと少しの辛抱だ。

## 第19話 「帝国技官の衝撃と行動」

ほぼ同じ頃。

この惑星 $\alpha$ ——異世界の中で西も西の場所に存在している第二文明圏と呼ばれる地域。

世界に三つある文明圏の一つで、ムー大陸全域とその周辺海域の島々からなるこの地域の更に西、そこにちっぽけな島国が存在する。

その国は名をグラ・バルカス帝国という。

ムー大陸の北西、西の果てに突如として現れたこの国は周辺の諸国を圧倒的な軍事力と技術格差であつと言う間に配下に収め、第二文明圏全体に対して宣戦を布告するなどかなり滅茶苦茶な事をしている。にも関わらず、この国の軍事力と技術力は相当に高いのか、すでに西方世界の多数の文明圏外国家が制圧され、世界でも特に力のある列強国の一角とされるレイフォルをもわずか5日間で滅ぼし植民地化するなど、その力は計り知れない。

ところが——この国の正体、それは東にて転移した日本国と同じように、突如として異世界から転移してきた、転移国家である。

実際、中世〜20世紀前後の文明力の国が多い第二文明圏国家の中で、彼らの文明力はただ唯一20世紀半ばを行っている。

日本同様にいきなりこの世界に飛ばされてきたグラ・バルカス帝国は、自分たちよりも文明レベルの低いこの世界で戦争を幾度も起こし、侵略した相手国を蹂躪し、そこを植民地とするなど、とにかく暴れまわっていた。

さて、そんな国には奇妙な特徴がある。

それは彼らの保有する兵器が、何故か大日本帝国陸海軍の持つそれとそっくりなものばかりなことである。

例えば、彼らの海軍が持つ超大型戦艦『グレードアトラスター』は細部を除けば戦艦大和に瓜二つだし、戦闘機『アンタレス』はゼロ戦に酷似している。

戦車だって、九七式中戦車チハの擬きもいれば九五式軽戦車の擬きだっている。

ただしその中には戦中に完成せず幻に終わった超重爆撃機『富嶽』の擬きが（量産体制に入っていないとはいえ）開発されているなど、細かな差異も存在している。

いくら文明レベルが第二次世界大戦程度とはいえ、なぜ日本軍のそれと似てしまうのかは全くもって謎である。

少なくとも一つ言えることは、この世界では他文明と比べても比較的に軍事力と技術力の高い彼らの侵略を、今のところ止める手段は無いということだけだった。

そんな彼らだが、彼らも彼らで少なからず焦りを感じていた。

「なんだ、これは……？」

グラ・バルカス帝国首都は帝都ラグナの一角、官庁街に連なり摩天楼を形成するビルディングの一つである技術研究所本部ビル。

帝国軍における各種武器兵器の研究、考案、設計、試作などを行っている施設で、その中の部署の一つ、帝国軍内でも実用前段階にある各種技術を研究する、先進技術実験室。

先程の眩きが漏れたのは、この部署に所属する技師カンダルの口だった。

「これは戦車なのか……？」

彼は数枚の写真を眺めていた。

それは彼の帝国大学時代の同級生である情報局職員のカグアノが送ってきた、パーパルディア皇国という東の国で帝国のスパイが撮ってきた写真だ。

パーパルディア皇国はこの世界における列強国の一つで、一年半前から日本というさらに東の島国——情報局の見解では日本は帝国と同じ転移国家の可能性があるらしい——と戦争していた。

が、突如参戦したアメリカとかいう国——こちらも転移国家らしいがどこに本土があるのか判明していない——に国土をボッコボコに

され、1日で降伏したらしい。

まあ、1日で国家が降伏した例は自分たち帝国の戦争におけるレイフォルの件もあり、特段おどろかされるようなことではない。

問題は、皇国に派遣されていた帝国のスパイから送られてきた、アメリカ軍の上陸部隊を撮影した写真だ。

「この戦車……近くに立つ人間の大きさから考えるに、帝国軍のワイルダー重戦車より大きい……主砲の口径長も長いな……口径は100mmはあるんじゃないか？　まさか艦砲を載せてるんじゃない……」

その写真には近代火器で武装し迷彩服を纏った多数の兵士と、複数台のトラックや装甲車、上陸用舟艇らしき小型船舶、そして戦車のお化け——M1エイブラムズ主力戦車——が写っていた。

「もしや戦車ではなく、これは自走砲なのか？　いや、しかし……」

第二次世界大戦時相当の戦車しか知らない帝国軍人にとって、その写真に写る米軍の戦車は化物バケモノそのものだ。

帝国軍の主要な戦車であるハウンド中戦車（チハ中戦車擬き）ですらM1戦車から二周りも小さいのだ。これが戦車だと言われても、そうそう信じられないだろう。

「もし、もしもこんな戦車と帝国軍の戦車が正面きって戦えば勝ち目はない……！　もしかしたら戦車のみならず、アメリカの軍の兵器は我が軍のそれよりも優越してるのでは……!?!」

もし仮に、この世界が史実原作通りの歴史を辿れば、皇国に現代戦車は上陸しなかったし、それをグ帝のスパイが目撃することもなかっただろう。

だが皇国に米軍の最新戦車が上陸してしまったこの世界では、そういうわけにもいかなかった。

歴史は着実に変わりつつあった。

「急いでこれに対抗する兵器を立案せねば！」

カンダルは急ぎこの写真にあるような戦車のオバケに対抗する兵器を開発すべく動いた。

それは彼の愛国心から沸き上がる無謀な衝動か、はたまた技術者としての対抗心からか、それは分からない。

彼は上層部に理解させるのは難しいと判断しつつもこれを連絡し、同僚仲間と共にこれに対抗する手段の考案を始め、他の部署にも戦車と戦闘機、爆撃機を中心に新型を開発するよう根回しした。

真に残念だったのは、その行動が国家としてではなく、彼個人としてのものに限定されてしまったことだった。

## 第20話 「好景気の渦中」

2017年7月――

半年が経過し、米国はさらに多くの地域を支配していた。惑星α――異世界において魔物大陸ことグラメウス大陸を完全制圧したのち、米国による異世界での経済活動は活発化の一途にあった。

現在、グラメウス大陸では大規模な入植活動が行われている。

グラメウス大陸は大陸南部海域を暖流が流れているため緯度の割には温暖な地域であり、農地としては充分活用可能だからだ。

またクイラ王国に匹敵する莫大な量の地下資源が眠っているように、米国・日本・エスペラント王国・鬼人族国家・第三文明圏周辺各国により資源開発が行われていた。

日本もまあ、一枚噛むことが出来ているので一応は満足している。それに、米国が開発のために大量の物資を発注し、大量の外貨を投下したお陰で特需も起きており（特需は経済的に少なくない危険も孕んでいるが）、悪い話ではなかった。

今のところ、フロンティアことグラメウス大陸の開発はものすごい勢いで行われており、米国から低所得層の人間を中心として大量の移民が開拓目的で異世界へ送られている。

現在、異世界移民者数は1000万人に上り、多くの人々がロウリア王国、クイラ王国、グラメウス大陸などの土地へ渡っている。

もちろん、他国のスパイや諜報員らが紛れ込まないよう、人選はFBIによる徹底した身元検査のもと行われるのだが。

また、米国は日本に仲介してもらい、異世界の数少ない近代国家、神聖ミリシアル帝国とムーとも国交を締結していた。

この国々は米国の市場として製品輸出に大きな需要を上げており、民製品はもとより各種兵器にまで及ぶあらゆる製品を米国は輸出して儲かっている。

無論、技術的優位を維持できる範疇で、だが。あとそのままでは相

手国の経済がいずれ詰みかねないようなマズイ行為なので、現地に工場を建設することなども行っている。

彼らは日本と異なり新世界技術流出防止法など持っていない。

対するミリシアルは一部の魔導製品や魔法技術、『ミスリル』という希少金属の輸出を、ムーは自分たちが必要としない鉱物資源——空洞山脈で採れる『アンオブタニウム』と呼ばれる超伝導物質——の輸出、海外領土の共同開発提案を米国に対して行っている。

米国は巨大な市場を手にして大量の製品を売り上げ、ムーとミリシアルは国内工場建設により新たな技術の入手・蓄積が出来る。

もちろん列強である彼らの立場も尊重した政策もとっており、双方 Win—Win なこの関係には米国もミリシアル・ムーも喜んでおり、今度の国際会議『先進１ーカ国会議』に米国も是非とも参加するようにミリシアルとムーは依頼している。

ちなみにだが日本もこの会議に参加することが決まっている。

それは魔王討伐の功績、エスペラント王国および鬼人族の国の発見と救助の実績、パーパルディアでの戦争におけるアルタラス王国解放、皇国軍勢力に打ち勝った経験があるなどの実績が買われ、実質的に強国としてこの世界に認識され始めているためだ。

・・・日本は日本で対パーパルディア戦を進めており、その過程の一環で皇国占領地のアルタラス島を解放したのだが、直後に米軍が勝手にパーパルディアを降伏させたのだ。

あと、会議への参加理由は第三文明圏とその周辺国家を束ねていることも原因の一つではある。

現在のアメリカの好景気ぶりは凄まじい。その好景気ぶりは過去最高と言っても過言ではなく、日本転移後に低迷の続いていた米国経済は回復からの上昇傾向にある。

日本も米国にそれに負けじとばかりに販売競争をしており、ミリシアルとムーの間で米国も貿易をしているとはいえ、文明圏外国や大半の第三文明圏内国、そしてムーも比較的日本の独壇場に近い。

しかしながら米国もロウリア・パーパルディア・ミリシアルという市場を抑えているのであり、どっちがどれだけ市場を獲得するか勝

負でもある。

また米国経済回復の要因の一部は、各種軍需産業が多大な需要を手に行っているのも一理ある。

今のところ、米国は異世界国家への武器兵器輸出をまだ認めてない。

にも関わらず軍需産業が儲かっているのは、何よりも常に戦力が枯渇している異世界進駐米軍の戦力拡充が原因である。

今現在、異世界進駐米軍の装備は保管状態にあつた予備の物を生き返らせたものばかりで、それらの更新を急いでいる。

そして更新の兵器を軍が各企業に発注し、軍需産業が潤うという算段である。米国経済活性化の後、軍の国防予算も久々に大量増額されていた。

そして作られた兵器は、フロンティア開発のために惑星αへ送られるのだ。

また、フロンティア開発には欧州にも一枚噛ませようという話すらある。

元宗主国イギリスの連中が何かやらかしそうな気もしないでもないが、とりあえず彼らも一枚噛ませても良いんじゃないかと、米政府は考えていた。

まあすでに日本がそれに一枚噛んでいる。

それはもちろん地理的な——文字通り地理的な関係があり、また米国としても、人材も資材も協力者も多い方が良いからだ。

前例があるし、日本だけ例外じゃなくたって、まあ良いのではないかと、そういう話だ。

そのため米国のみならず日本もいろいろと好景気であり——こちららは技術格差を活かした製品輸出による面が大きい——、その好景気ぶりはかつてのバブルに追い付きそうだとも言われている。

無論、その影響は地球でも出ている。

特に欧州は米国の異世界開拓における物資調達のために大量の米ドルが投下され、それら物資を米国に輸出するという形で特需景気が発生している。

同じ出来事は、米国から欧州と同じ事をされたアジア全域でも起こっている。

異世界での投資を睨んだ各企業への投資により、株価も緩やかながら軒並み高騰しており、強いて言うなら資源国の経済が低迷し始めているくらいである。

そんな形で、今世界は好景気である。

ただ、当然ながら。

米国のフロンティア開発を快く思わない国だって、地球には存在するのだ。

## 第21話 「眠れる獅子」

中国。

かつて世界六大文明の一つとして数えられた黄河文明と長江文明が存在し、その後の数世紀、国名、王朝、政治体制、指導者を変えつつもアヘン戦争までアジア最大の勢力を持った大国として君臨した国家。

アヘン戦争以降は西欧の列強諸国の影響、そして極東の突然変異国である亜列強・日本の勢力増加、国内の内乱などにより最大の勢力という名誉は失われていた。

しかし21世紀以降、経済的に日本を追い越した中国は再びアジア最大の勢力を持った大国として君臨し——そして日本が異世界に転移した後、完全なるアジア最大の大国として再び君臨した。

2015年4月。

中国政府は日本転移による米第7艦隊の部隊消失をいいことに、ついに行動を開始した。

日本の転移により米国の極東軍事プレゼンスが低下した段階で、中国軍は戦力展開の目標ラインである第一・第二列島線の確保のために動き出したのである。

中国海軍の空母「遼寧」を旗艦とする空母艦隊を台湾沖合いに展開した。

空母1隻、ミサイル駆逐艦4隻、フリゲート2隻、補給艦1隻が出撃し、連日のように爆撃機や戦闘機が台湾上空へと飛来。

これにより東太平洋地域で米軍・台湾軍・韓国軍他と中国軍による緊張状態が発生するなどし、それによる混乱は長く続いた。

中国海軍による台湾沖合いでの挑発行動を発端とする『第四次台湾海峡危機』と、中国に唆される形で北朝鮮軍が南下を図った事による『半島危機』は極東情勢を極度に緊張化させた。

だが中国はすぐにも戦略目標を達成するチャンスであり、この日本転移による機会を逃さず、またすぐにも行動を起こすつもりだった。

……つもりだったのだ。

2016年4月。

あの日、合衆国が過去に類を見ない、とんでもないことを起こした。合衆国は消えた米第7艦隊と日本列島を遠く離れた地球外惑星にて発見し、あろうことかワームホールなるものを形成して救出してきただのである。

合衆国は米第7艦隊からなる在日米軍部隊を地球に帰還させ、さらにその惑星——惑星αの開拓を名目に、大規模な軍拡を開始したのだ。

退役していた旧式の大空母7隻、戦艦6隻、数千機の退役軍用機が現役復帰し、戦車や装甲車、新型航空機、イージス艦も次々に量産された。

兵士上限数の増加により増えた数十万人の合衆国軍兵士——異世界に夢を見た多くの合衆国の若者達が軍に志願し、軍は大量の人材確保にも成功していた——も脅威だった。

最大の問題は、惑星αをフロンティアとして開拓し始めた米国の経済力は恐ろしいまでに絶好調で、これだけの軍拡を問題なく行える力があることだった。

中国首脳部は憂鬱だった。これはまさしく由々しき事態である。

確かに再就役した米軍の空母や戦艦はそのほとんどが旧式かつ惑星αに送られてるし、兵士もまた然り<sup>しか</sup>なのだが、それでも、それでもだ。

合計して17隻の大空母——まもなく最新型のG・R・フォード級が就役予定のため18隻に増える予定だ——だけでも、1隻しか大型空母を持たない中国海軍では追い着けない。

最悪の場合、米国と戦争を起こしたら、17隻もの空母が中国に殴りかかって来ることも否定できない。

ならば中国はなるべく合衆国と事を構えなければ良いのでは、と思われるかもしれないが、それも今の中国には無理な話である。

なぜならば、中国は地球最大の人的市場であり、それを活かして経済的に乗り上がってきたのだが、合衆国は異世界に人的市場を見出だし始めてるからだ。

もし、もしも米国、さらに欧州諸国までも異世界に市場を移したとしたならば、中国経済の崩壊、そして最悪共産党の失脚も考えられる。まさか米国もそこまで馬鹿な真似はやらないとは思いますが、それを防ぐためには軍拡や軍の挑発による威嚇で、これを抑制せねばなるまい。

中国は現在急ぎ軍拡を行っている。

2016年後半以降、中国海軍は2020年までに新型の大型空母4隻、小型空母4隻、強襲揚陸艦4隻を完成させるのを目標に緊急建造を開始した。

2025年までには排水量10万トンの超大型空母2隻をさらに追加で進水させる予定である。

大型空母は中国唯一の空母「遼寧」（旧ヴァリヤーク）をベースに、小型空母はキエフ級「ミンスク」をベースに、強襲揚陸艦は完全新規設計を目指している。

現在、大型空母は2隻が進水間近であり、あとの艦載機パイロットの訓練も性急で行われていた。

護衛を務める駆逐艦、巡洋艦、フリゲートの建造、艦載機となるJ-15、J-10K、J-20、J-31などの量産も然りだ。

こんな性急さで本当に戦力として成立するのかと聞かれれば、確かに疑問が残る。

しかし、中国には時間が無いのだ。

また中国はこの時、空母や護衛艦艇の他にも、米海軍に対抗するた

め、とんでもないことを行っていた。

人々の間では都市伝説程度にしか囁かれていなかったソヴィエツキー・ソユーズ級をベースとした大型艦艇……

——要するに、戦艦の建造である。

## 第22話 「国際会議に向けて」

2017年9月1日。

この日、日本の航空自衛隊に最新ステルス戦闘機のF-35A<sup>II</sup>ライトニングII<sup>II</sup>が配備された。

F-35A、航空自衛隊が旧式化したF-4EJ/EJ改戦闘機の後継機として第4次F-X選定により選定した最新のステルス戦闘機である。

日本の転移により納入が無期限延期されていたが、アメリカが異世界に介入したお陰で再び納入が可能となっていた。

日本国は現在F-35Aを合計42機導入する予定で、日本の転移した世界の情勢の都合上、すぐにでも多数機を揃えたいところである。

そのため本来予定されていた国内組立製造のほか、米国で製造されたものを直接購入するなどしており、数の確保に急いでいる。

またこの他にもこの世界での情勢を考慮して、海自のヘリ搭載型護衛艦「いずも」「かが」を改造して軽空母にし、その艦載機用に垂直着陸機型のF-35Bが42機追加導入されるとのことだ。

米国との交流が再び可能となったあとはF-35のみならず、納入が無期限延期されていたRQ-4無人偵察機も同様に納入が再開されていた。

現在の日本では、これらの他にも幾つかの戦闘機や航空機の導入計画が進んでいた。

日本の異世界転移後、今までと国外情勢が完全に一変してしまった日本国では、自衛隊の防衛戦略や戦術においてさまざまな変更を余儀なくされていた。

例えば、この広大な世界では当然のように戦闘機には長い航続距離<sup>スーパークルーズ</sup>が求められるようになり、さらには緊急で展開するための超音速巡航

能力、文明圏外の野戦飛行場でも運用できる野戦運用能力も求められている。

その結果、日本はこの世界で技術格差を活かして稼いだ大金をはたき、試験的にいくつかの最新型の機体となる戦闘機を自衛隊向けに導入していた。

例えば航続距離の長い機体として、米空軍の戦闘爆撃機F-15E “ストライクイーグル”をベースにした、F-15SE “サイレントイーグル”が6機のみ試験的に配備された。

異世界進出した米軍向けに提案されていた機体で、試験運用のため生産されたものを日本が購入した形だ。

他にも超音速巡航能力を持つ機体として欧州の “タイフーン”、 “ラファール Mk. 2”、野戦運用能力を持つ機体としてスウェーデンの “グリペンE”などの機体も試験運用が行われてる。

もちろん、自衛隊の兵器導入が及んでるのは空だけではない。

海でも先述のヘリ搭載型護衛艦「いずも」「かが」を改造した軽空母のほか、新世代イージス艦である「まや」型護衛艦、新型である多機能護衛艦の建造が進んでいた。

さてそんな中、場所は宇宙規模で大きく変わって、地球世界はアメリカ合衆国。

極東では半島の要人がマレーシアの空港にて暗殺され、半島北部から米国への威嚇と見られる大陸間弾道ミサイルの発射実験が繰り返されるといった、2015年の『半島危機』の余波が収まりきらないなど、極東で不穏な雰囲気が続いている。

そんな中、米国大統領選では新大統領が決まり、政権の積極的な経済政策を期待した人々により市場が沸き立つなど、比較のお祭り騒ぎが続いている米国。

このアメリカが介入している異世界では間もなくビッグイベントが開催される——そう、『先進11カ国会議』だ。

これは惑星αでも有数の国際会議で、2年に1度の頻度で、異世界最強と称される国家、神聖ミリシアル帝国の港町カルトアルパスで開催される。

五大列強国や準列強国など、異世界にて多大な影響力を持つ大国が参加し、今後の世界の流れを決定する重要なイベントだ。

今回は実質的に列強の座から落とされたパーパルディア皇国に代わって、列強のミリシアルやムーの推薦で米国も招待されていた。

ちなみに日本もエスペラント王国への救済、魔王軍撃退といった功績、実質的な東方世界の主であるなどの理由によって招待される。

要するに今回の会議に限っては先進12カ国会議となるのだ。

とりあえず参加にあたり、米国の本国の位置をミリシアルの外交官に尋ねられた。

なので米国の外交官が宙そら——その先の地球を指差したら、白い目で見られたとかなんとか。

仕方ないであろう、だって、本当に、宙の先の人間なのに——たぶん彼らからすれば古の魔法帝国よりも不可解に違いないだろうが。

閑話休題。

一先ずそんなことは置いておくにせよ、今回の会議ではこの世界の国々に対して米国からも聞いておきたいことがいくつもあった。

例えば、以前制圧済みのグラメウス大陸の土地開発中に、何かのビーコンらしき物体——それも魔導制御された——が地中から発見された。

米国が単独で解析したが、魔法技術がミリシアルのものを導入したばかりの米国では、ビーコンであること以外よく分からなかった。

そのため日本に解析を依頼したが、結局日本も分からず、他に伝手のある文明圏外国でも正体は判明せず、分からないままとなった。

このビーコンが何なのか、もしかしたら何か知ってるかもしれない。この世界の有力国家に聞いておきたいのだ。

米国は知らなかった。

それが『魔帝復活ビーコン』、かつてこの世界を地獄の底に突き落とし、恐怖で支配した古代文明の復活を支援するシステムであるということ。

## 第23話 「会議参加に向けて」

2018年1月。

米国のワームホールを通じた異世界介入からおよそ2年、日本の列島異世界転移からおよそ3年が経過し、フィリアデス大陸や文明圏外のロデニウス大陸、グラメウス大陸、その周辺の文明圏外国は主に米国と日本によってこれまでの常識では考えられない勢いの開発が行われた。

米国によるこれら大陸地域での大規模な土地開発作業および移民による大規模開拓、日米の貿易競争、高品質製品の流入などがその原因である。国の繁栄は文明水準と生活水準の向上をもたらしつつある。

それは遠く離れたムーやミリシアルも同様である。かの国では巨大な市場と十分な経済力、比較的発展した文明があることを理由に日米共に進出が激しい。両国は国土開発により高速道路や鉄道路線が整えられ、都市部では超高層ビルの建設がいくつも始まっていた。

### 閑話休題。

米国と日本が参加予定の先進11カ国会議、この会議に米国は試験航海も兼ねて最新原子力空母 USSジェラルド・R・フォードを送ることにした。

USSジェラルド・R・フォードは合衆国海軍でも最大の排水量を誇る大型空母であり、2017年7月に就役したばかりの最新鋭艦でもあった。艦載機数はざっと70機前後であり、一隻で中小国（地球基準）の空軍戦力に匹敵する。しかも電磁カタパルトにより連続した航空機発艦も可能だ。

有事に備えて護衛にイージス巡洋艦2隻、イージス駆逐艦3隻、フリゲート2隻、強襲揚陸艦1隻、戦艦1隻が随伴する（攻撃型原潜を随行させることも考えられたが、ミリシアル周辺の海底地形の情報は

不鮮明のため見送られた)。

砲艦外交だ、と罵られる規模かもしれないが、先進11カ国会議ではこれが普通だ。この世界はとにかく覇権主義がまかり通っており、国際会議だろうが実力を示すために艦隊が送られるのだ。

戦艦——アイオワ級戦艦 USSミズーリが艦隊の編成に含まれているのも、文明力が自分たちより発達途上の国々相手には巨大な大砲を見せた砲艦外交として意味を出すからだ。

ちなみにUSSミズーリは米軍がグラメウス大陸に侵攻していた2017年1月に一時的に地球へと帰還しており、その際にサンディエゴにドック入りしている。SLERP(寿命延長プログラム)を施し、今後米海軍に就役予定の大型艦艇に搭載するいくつかの兵装の試験を行うテストベッド艦として、大改装が施されていた。

米海軍の水上戦闘艦艇の中では特段に大きく、大馬力の機関を搭載した戦艦であるミズーリは、今回VLSを搭載したり新型砲を搭載して新型砲弾・ミサイルのテストに使われていた。

改造された戦艦に最新鋭の航空母艦、公に認められた砲艦外交、非常識のような常識、これを行えるだけの力があるのなら、是非ともしなくてはなるまい。日本もアメリカがするのなら、と仕方なく海上自衛隊から一個護衛隊群の護衛艦8隻を送り込むこととなっていた。

さらに閑話休題。

今回の先進11カ国会議に参加するイレギュラーはアメリカ、日本だけではない。西の転移国家<sup>イレギュラー</sup>——グラ・バルカス帝国もまた、参加予定だ。侵略的な侵攻で第2文明圏西の文明圏外地域の大半を制し、列強レイフォールを下ろした彼らもまた、神聖ミリシアル帝国から招待を受けていた。

ミリシアルとしては、国際協調を謳う会議である以上、グラ・バルカスを西方世界の長として招かざるを得ないのだ。どうせならミリシアルは度の行きすぎたグラ・バルカスの侵略行為に一言や二言や文句を言いつけてやるつもりである。

もちろん、グラ・バルカスだつてただ会議に参加しにいくわけではない。砲艦外交が公的に認められてる会議なので、どうせなら帝国海軍の精鋭艦隊でも送つてやろうかと考えていた。

……もう一度伝えるが、グラ・バルカスだつてただ会議に参加しに行くわけではない——彼らはこの会議で、この機会に全世界へ宣戦布告するつもりであった。列強とされたレイフォルですら数日で滅んだのだ、世界征服も不可能ではない、そう考えた訳だ。

最近では、情報局や先進技術実験室が異世界国家に対する警戒を強めるべきと主張しており——無論、パーパルディアで撮られたM1戦車の写真が原因だ——、万全を期すに越した事はないとの理由で、会議に送られる艦隊の規模も増強されていた。

本来なら正規空母4隻、グレートアトラスター超大型戦艦1隻、高速戦艦2隻、重巡洋艦3隻、巡洋艦2隻、駆逐艦5隻の合計17隻からなる監査軍艦隊を会議開催地であるミリシアルに送り付ける予定だった。ところが今はもう少し数を増やすべきとの考えが主流だ。

その数は大いに増やされ、正規空母6隻、超大型戦艦1隻、大型戦艦2隻、高速戦艦2隻、重巡洋艦5隻、巡洋艦3隻、駆逐艦14隻、帝国海軍の本国艦隊までもから艦艇の一部を引き抜いた合計33隻、およそ2倍近くにまで数を増やされていた。

それなりに財布を逼迫する規模ではあるが、これから返ってくるであろう見返りを考えれば大したことではない。すべてはこの世界の国々を帝国の前に跪付かせるためなのだ。

それが実質的に不可能なことなのだ、当然彼らは知る由もない。

### 第三章 世界会議

#### 第24話 「先進11カ国会議、帝国の蛮行」

2018年4月。

神聖ミリシアル帝国の港町カルトアルパスで先進11カ国会議が開催された。この世界の主要国計11カ国の代表が集まるためそのように呼ばれているこの会議は、実際には今回米国と日本も参加したので12カ国会議になっていたりする。この会議には今回、米国は国務省から外交官2名を派遣した。

彼らの送迎という名目で最新の原子力航空母艦 USSジエラルド・R・フォードが派遣され、外交官らはそれに乗ってきていた。つい最近米海軍に就役したこの最新空母は、演習訓練も兼ねてわざわざ地球から派遣されたのである。

またその護衛としてイージス巡洋艦2隻、イージス駆逐艦3隻、フリゲート2隻、強襲揚陸艦1隻、戦艦1隻がついている。あくまでも護衛というのが名目だが原子力空母ゆえの巨大鋼鉄艦である彼らの存在は人々の目を引き、十分に砲艦外交としての意義を果たした。もちろん、人々の目を引いた存在はアメリカ艦隊だけではない。例えば日本からやってきた外交官送迎の海上自衛隊の護衛艦8隻や、遠い地の列強であるムーの機動艦隊も十分に人々の目を引いた。今年には巨大な鋼鉄製艦艇ばかりが入港するもので、人々はそれらに注目しっぱなしだった。

中でも大勢の目を惹いたのがグラ・バルカス帝国の戦艦「グレードアトラスター」率いる帝国海軍の機動艦隊だ。グラ・バルカスは今回の会議会場のカルトアルパスに戦艦1隻、空母2隻、重巡洋艦1隻、駆逐艦5隻の機動艦隊を送り込んでいた。

奇妙なことに、何故か「グレードアトラスター」は細かな違いを除けば旧日本海軍の戦艦「大和」にそっくりで、この戦艦が率いる艦隊は何故か旧日本海軍の艦艇とそっくりだった。大和と同様の威容を

誇るグレードアトラスターは、人々にある種の威圧感を示していた。さて世界各国の艦隊がカルトアルパスに入港したところで、とある奇妙なことに米国と日本は気付いた。彼らは本国から、偵察衛星からグラ・バルカス帝国の艦隊の総数は33隻であると伝えられてた。だがカルトアルパスにいるのは9隻だけである。

この消えた艦隊が何処にいったのか不明であったため、米国は駆逐艦1隻をカルトアルパス湾の外へと移動させた。

それはともかく開催された先進11カ国会議。この会議ではまずミリシアルとムーからアメリカと日本の列強加盟が伝えられるところから始まった。両国ともに列強パーパルディアに優位に戦い、魔王撃退、エスペラント王国解放、グラメウス大陸の安全確保など、この世界で急速にその影響力を出し始めたのが原因だ。

これには強いて言えば「グラ・バルカスの代表が「なぜ同じ列強を倒したのに我が国は列強入りできないのか」と不満をもらした程度でどの国も賛同を示し、各国代表者による多数決を経て決定となった。

続いてアメリカの代表がグラメウス大陸にて見つかった何かのビーコン——魔帝復活ビーコンに関する意見を聞こうと挙手しかけたが、先にエモール王国の代表が手を挙げたために発言の機会は奪われてしまった。

ところがエモール王国の代表——外務卿モーリアウルの口からとんでもない発表がされる事となった。エモール王国にて空間の占い（魔法を使つてするための中率98%）を行った結果、古の魔法帝国——魔帝、ラヴァーナル帝国の近年中の復活が確実となったというのだ。

ミリシアルなどのこの世界の国の代表ならともかく、グラメウス開拓の際に鬼人族から最低限ながら魔帝の情報を少しは手にしていたとはいえ、別世界からやってきた日米の代表は困惑するしかなかった。彼らからすれば「何で伝説の存在なんかを国際会議で話してるんだ？」くらいの認識である。

しかし会議参加者が驚愕してたり唾然としてたり、といった変な反応をしていることから、何か重大なことなのであろう程度には日米の代表にも察しはつく。だがやはり、国際会議でいきなりこんな事にならなくては今後の進展が不安でしかない。

そしてその不安は直後に訪れた。

なんとグラ・バルカス帝国代表の外交官シエリアが、突然笑い声を上げ、「この世界の国は列強ですら占いを信じるんだな、なんと野蛮な」とこの世界の列強や主要国を嘲笑した挙げ句全世界に宣戦布告したのである。どうやら端からこの会議で会議らしいことをする予定は全くなく、シエリアはただこう言いに来ただけだった。

「この世界の国々に告ぐ。自分たちの軍門に下れ。従わぬのならば、よろしい、ならば戦争だ」

そう言い残したシエリアは現在、戦艦グレードアトラスターに乗り、グレードアトラスター率いる機動艦隊はカルトアルパスから立ち去った。だが日本と米国の偵察衛星が現在、消えたグラ・バルカス帝国軍の空母機動艦隊を発見している。

この艦隊はカルトアルパスを目指しており、おそらくこの先進11カ国会議を襲撃するものと見られている。少なくとも今回の会議でグラ・バルカスはこの世界の国に宣戦布告したが、米国はこの世界の国家ではないため該当しない。

なので宣戦布告は受けてないも同然である。だが米国は売られた喧嘩は買う主義だ。このグラ・バルカスの蛮行に米国は本気で対抗することにした。カルトアルパスに停泊するUSSジェラルド・R・フォード率いる米艦隊は行動を開始した。

## 第25話 「迫る脅威」

「ミリシアルの艦隊はたいした事なかったな」

グラ・バルカス帝国東征艦隊司令官のアルカイドは、カルトアルパスに向けて僚艦と共に大海原を突き進む東征艦隊の旗艦、戦艦ベテルギウスの艦橋から海を眺めていた。

アルカイドは先ほどの戦闘を思い返す。カルトアルパスを急襲する任務を任されている東征艦隊は、先ほどマグドラ群島沖にて神聖ミリシアル帝国の艦隊と戦闘を行っていた。マグドラ群島はカルトアルパス西方に存在する島々で、情報局によるとミリシアル最強の第零式魔導艦隊が訓練地としていた。

詳しい敵戦力構成は不明だったが、東征艦隊は万全を期して戦艦4隻をここへ投入。東征艦隊が連れてきたヘルクレス級戦艦の2隻が、ミリシアル戦艦へアウトレンジから41センチ砲弾を一方的に叩き込み、敵の反撃手段を完封。

さらにここへ東征艦隊の各空母に属する戦闘機アンタレス、爆撃機シリウス、雷撃機リゲルなどからなる数百機の空母艦載機が投入されたことでミリシアル艦隊は全滅、グラ・バルカス艦隊は損害なしの圧勝となった。ミリシアルの第零式魔導艦隊を撃滅させた東征艦隊は現在、途中沖合いでカルトアルパスを出た戦艦グレードアトラスター率いる混成艦隊とつい先ほどに合流していた。

だがすでに艦隊は二つ——グレードアトラスター率いる水上打撃部隊と空母率いる機動部隊に分かれ、別々に航行している。水上打撃部隊は他国への心理効果を狙ってカルトアルパスに直接殴り込み、それを空母機動部隊が援護し、またカルトアルパスへ空襲を行う予定である。

### 艦隊編成

#### 空母機動部隊

戦艦：オリオン級高速戦艦ベテルギウス／旗艦

空母：ペガサス級6隻（マルカブ、アルゲニブ、エニフ、ホマン、マタル、サダルバリ）

重巡洋艦：タウルス級3隻

巡洋艦：キヤニス・メジャー級1隻

駆逐艦：エクレウス級4隻 スコルピウス級7隻

水上打撃部隊

戦艦：超大型戦艦グレードアトラスター ヘルクレス級大型戦艦2隻（ラス・アルゲティ、バルサー） オリオン級プロキオン

重巡洋艦：タウルス級2隻

巡洋艦：キヤニス・メジャー級2隻

駆逐艦：エクレウス級5隻

備考ながら、これらの艦艇は何故か旧日本海軍の艦艇と形状や性能が酷似しており、オリオン級は金剛型戦艦、ヘルクレス級は長門型戦艦、ペガサス級空母は翔鶴型空母、そしてもちろんグレードアトラスターは戦艦大和という具合に似ていた。

「空母艦隊より報告、空母全6隻より攻撃隊の発艦は完了したのとこのです」

いつの間にかアルカイドのもとへやって来ていた参謀が、アルカイドに報告する。

「報告ごころう。それにしても、やっぱり空母は6隻も要らなかつたんじゃないのか？」

アルカイドは参謀への返事と共に浮かんだ疑問を口にする。今回のカルトアルパス急襲、本来の予定では空母はペガサス級正規空母が4隻だけの参加だった。戦艦もグレードアトラスター含め3隻だけが参加するはずだった。

それがいつの間にか、情報局が他所に発し続けている異様なまでの警告を海軍上層部が真に受け取ったことで、空母は6隻に、戦艦は41cm砲を搭載するヘルクレス級戦艦2隻が追加されて5隻にまで増えていた。

「いくら重要な作戦だからって、強襲でもないのに空母は6隻もいら

ないだろう。戦艦だって当初の作戦通り3隻だけで十分はずだ」

「上からの命令です。我々はそれに従うしかないでしょう」

アルカイドの疑問に、参謀は肩を竦めて答えた。

「しかしだな。先ほどのミリシアルの艦隊はこの世界最強だというのは我々には大した傷も与えないで全滅した」

「あれは弱かったですね」

「ああ。あの程度なら当初予定の戦力ですら滅するのは可能だったろう。というよりも、それは出撃前から言われていたことだ。にも関わらず艦隊規模は情報局の警告で当初の二倍にまで増やされた。いつたい、情報局は何を恐れてるのだ？」

はつきり言つて過剰な数で見合わない量の戦力を投入することは、いろんな意味で無駄でしかない。燃料、弾薬は余計に消費され、指揮系統は整つてなければ混乱する——なのにそれをさせた情報局はアルカイドにとって不審でしかなかった。

アルカイドは情報局がスパイ経由で届けられたM1エイブラムズ戦車の存在が陸海軍に警告を繰り返させていることを知らない。

「さあ。もしかしたらアメリカと日本が関係してるのでは？」

「それってあの我々と同じ転移国家とされてるあの国か？ なら情報局は彼らの何を恐れてる？」

参謀は再び肩を竦める。

「さっぱり見当が付きませんな。例えば何かしら強力な兵器でも持ち合わせてたとか。とりあえず今は職務を全うしましょう。我々がやるべきは、上からの命令に従つて動くことです」

「それもそうか」

アルカイドは、とりあえず今は考えないことにした。今考えたところで、答えは全く思い浮かばないからだ。なに、カルトアルパスを攻撃すれば、答えはすぐに分かる筈だ。

ところ変わって米艦隊。

イージスシステムを搭載するミサイル巡洋艦、ミサイル駆逐艦、ミサイル戦艦と数隻の補助艦艇が輪形陣を組み、その中核に空母を配置

する形で空母打撃群を形成していた。

軍艦としては最大級のサイズを誇る空母、ジェラルド・R・フォード級原子力航空母艦。70機の航空機を搭載できるその能力は、言わば洋上の空軍基地である。そしてそのネームシップ——1番艦である『USSジェラルド・R・フォード』の4つの電磁カタパルトには、4機の戦闘機が並べられていた。

「艦載機の発艦を急がせろ！」

「邪魔な機体は退かせ！ 急げ！」

色とりどりの作業着を着た甲板作業員や甲板士官が発艦準備を進めていた。作業をする彼らの横をすり抜け、カタパルトに固定された機体の後ろに後続機が待機する。

『Cleared for take off』

『Roger, cleared for take off』

カタパルトに固定され、発艦許可を得られた機体が、甲板士官の「GO！」のハンドサインと共に蒼空へと投げ出された。

4機が順々に投げ飛ばされ、その間に空いたカタパルトには新たに別の機体が固定され、それらも4機ずつ蒼空へと投げ出されていく。そして、一個飛行隊全12機が全て離艦すると、編隊を組んで飛び去っていった。続けてさらに二個分隊規模の艦載機が発艦を始める。

空母から発艦したのは、戦闘攻撃隊「シエリフ」に所属する艦載機のF/A-18Fスーパーホーネット戦闘攻撃機、計18機であった。

1970年代後半に初飛行したF/A-18Dレガシーホーネットをベースに拡大発展型として開発・配備されたこの機体は、ベース機よりも優れたステルス性、大型化された機体、強力なエンジン、8tにまで増加された兵装および燃料ペイロード、先進アビオニクス、最新のレーダーを搭載することを特徴としている。

彼らは今回の対グラ・バルカス空母艦隊への対艦ミサイルによる飽和攻撃の任務を任されており、機体の翼下に4発ずつのハーブーン対艦ミサイルをぶら下げていた。航続距離を極端に縮める限界搭載である。

射程200キロ以上の空対艦ミサイル計72発による、敵艦が発射母機を探知できないような圧倒的遠距離からのアウトレンジ攻撃。彼らを援護するE A—18Gグラウラー電子戦機はすでにECM（電子妨害）を開始しており、おそらく敵はレーダーどころか無線すら使えないはずだ。

「目標、レーダーにて確認」

母艦上空に展開した早期警戒機E—2DアドバンスドホークアイのAPY—9レーダーはグラ・バルカス空母艦隊の全艦艇22隻の姿を完璧に捉え、その情報はデータリンクによって18機のF/A—18Fに共有されていた。すでに距離200キロ以内、HUD（ヘッドアップディスプレイ）に表示された情報は、ロックオンが完了したことを告げていた。

「シェリフ・リードより各機へ、ハープーン発射用意」

編隊長よりミサイルの発射準備命令が出され、各機のパイロットは操縦桿のミサイルトリガーに指を添えた。亜音速で巡航する機体の外部に搭載された、射程200キロにもなるハープーンの発射準備がされる。周りには攻撃を妨害する存在はなく、対する敵艦隊は攻撃を防ぐことは不可能。編隊長は思わず唸った。ああ、まったく、最高の状況ではないか。やがて編隊長は発射を命じた。

「シェリフ・リードより各機、攻撃開始！ 攻撃開始！ シェリフ1、FOX3、FOX3!!」

編隊長がFOX3——ミサイル発射の符丁を口にすると共に、編隊長はトリガーを引いた。直後、ミサイルのジェット燃料に火が灯り、ハードポイントの鉤爪から解放されたハープーンが機体から放たれた。

『シェリフ2、FOX3！FOX3！』

『シェリフ6、FOX3！』

『ストーク10、FOX3！』

編隊麾下の機からも一斉にハープーンが射出される。合計72発のミサイルが、敵空母艦隊へと向かった。搭載する高性能コンピュータと後方のE—2Dの計算によりミサイルは正確に誘導され、敵軍の

空母目掛けて真っ直ぐ飛翔する。

数分後、レーダースクリーンの中で空母を示す輝点と、ミサイルを示す輝点が重なりあった。

## 第26話 「サチュレーション・アタック」

グラ・バルカス帝国海軍東征艦隊所属の空母機動部隊は輪形陣を組み、カルトアルパス沖合いを遊弋していた。

彼らの誇る空母は艦隊の中心に配置された6隻のペガスス級正規空母——旧日本海軍の翔鶴型空母に酷似している——、250m以上の長い船体、帝国海軍航空隊の艦載機80機以上を載せられる巨体であり、護衛艦艇と共に艦隊を組んで航行する姿は、見る者に圧倒的な存在感をもたらす。

艦隊の旗艦を務める戦艦ベテルギウスの艦橋から、艦隊司令のアルカイドはその姿を眺めていた。いや、というよりは艦隊全てに視線を渡らせてるとも言える。彼はただただ、周囲に警戒の視線を巡らせている。

(考えすぎだったかな……)

とはいえ、そんな最中でも人間というのは考え事をついついしてしまうものだ。彼は先ほどからカルトアルパス攻撃艦隊の規模が増やされた理由が、敵が自分たちよりも強力なのは、と疑っていた。

「司令！ 大変です!!」

アルカイドのもとへ部下の参謀が慌てた様子で駆けてきた。

「レーダーが……レーダーが使用不能になりました」

「なんだと？ レーダーが？」

アルカイドは思わず聞き返した。レーダーが使用不能になったということは、レーダーで敵を探知することや、レーダー照準による精密射撃も出来なくなる——つまり軍艦としての能力の大幅低下を意味している。

「はい、水上レーダーも対空レーダーも全て……レーダースクリーンが真っ白になって何も映らなくなったそうです」

「故障か？」

「いえ、技師が数分前から何度も点検してますが、全く改善しません」  
「ちっ、このタイミングで……レーダーの修理急げ！ 代わりに見張

りの数を増やし、僚艦との連絡も密にするんだ」

アルカイドは参謀に指示を出す。彼は、自艦のレーダーが使えない現状、艦隊の他艦からレーダー情報を受け取って行動するしかないと考えた。さすがにレーダー照準射撃は不可能だが、敵の大雑把な位置を捉えることは出来る。無いよりはマシ、そういうつもりである。ところが現実はそのままで甘くなかった。

「それが……無線通信も使えません」

「無線もか!?!」

「はい、先ほどからスピーカーがノイズしか発しません。現在は発光信号で交信していますが、他艦も同じ状況とのことですよ」

返ってきた言葉にアルカイドは思わず嘆きたくなかった。これではまともな戦闘は出来そうにない。アルカイドがそう思い浮かべた直後、見張り員の艦内無線を通したくぐもった声が響く。

「右舷より何かが高速で接近!! 距離——」

見張り員の半ば叫ぶような報告の声は、残念ながら最後まで続かなかった。

直後、艦隊の右翼を航行していた、エクレウス級駆逐艦キタルファが閃光に包まれた。遅れて轟音と衝撃波が、アルカイドの座乗するベテルギウスのもとへ届いた。

「なっ——」

アルカイドが恐る恐る閃光を放った駆逐艦の方を見ると、船体を真っ二つにへし折られ、火炎と黒煙を噴き伸ばしつつ急速に沈没していく船の骸むくろだけが、そこにあつた。

「く、駆逐艦キタルファ、轟沈!!」

さらに遅れて見張り員が叫んだ。

米海軍航空隊所属、F/A-18Fの放ったハーブーン対艦ミサイルの初弾は、終末誘導の段階で自らのレーダーを作動させて目標を探索、もつともレーダー波反射の大きい目標——要するに艦隊の中で発射母機から一番近い位置にいた駆逐艦キタルファに狙いをつけた。

敵のレーダーによる探知を避けるため、レーダー波が乱反射する海

面すれすれを飛行するようにプログラミングされたハーブーンは、マツハ0・85の高速で超低空を飛翔、照準をつけるため目標の手前で一度上昇し、そこから急降下してキタルファに突っ込んだ。

ハーブーンが命中したのは、キタルファの魚雷発射管だった。重量500kg以上の塊が亜音速で突っ込んだ発射管には大穴が空き、その内部に装填されていた何本かの魚雷がへし折られ、そしてハーブーンの弾頭が発射管下部に到達した直後、弾頭が炸裂した。

魚雷発射管に直撃弾を受けたキタルファは、ハーブーンの弾頭に仕込まれた100kgの炸薬が炸裂したことによる内部からの爆発により魚雷発射管に装填された4本の魚雷の合計1トン近い炸薬を誘爆させ、キタルファが船体中央から真つ二つにへし折れる程の大爆発を引き起こした。

「な、何が起こった!？」

駆逐艦が海面の下へと転針していく様子を目にし、アルカイドは反射的に叫んでいた。士官の一人が彼の叫びに答える。

「攻撃です! どこからか攻撃されました!!」

そんな事は分かっている。そうじゃなくて——アルカイドはそう叫ぼうとしたが、しかしそれに答えられる者はいないはずだと思いき、口をつぐんだ。

まさか事故ではないと思うが、しかし付近には敵の航空機や艦船は見当たらず——もっとも、レーダーは使用不能なので目視によるものだが——、潜水艦による攻撃? いや、キタルファは船底ではなく上部から吹き飛んでいたように思える。見張りは直前に何かを叫んでいたが、いったい——

現実がアルカイドにそれ以上考える暇を与えることはなかった。

「右舷より先ほどの何かが多数さらに接近!!」

「い、いかん!! 回避運動をとれ! 空母からは迎撃機を上げろ!!」

彼の命令は艦内電話を通じて艦内に、探照灯の発光信号を通じて艦隊各艦に届けられた。

命令は正確に伝達された。

艦内に緊迫したブザーが鳴り響く。

水兵たちも慌ただしく持ち場についていく。

艦隊に含まれる6隻の空母は加速し、次々に戦闘機の発艦準備を始め、上空警戒中の戦闘機も索敵範囲を広くしようとした。

だが全て遅かった。

「何か——いや、敵弾、来ますッ!!」

見張りが叫んだほんの寸刻、ベテルギウスの右を走るペガスス級空母アルゲニブを閃光が包み込んだ。

3秒間のうちに、空母アルゲニブには2発のハーブーンが命中した。1発はアイランド型の艦橋の基部に命中し炸裂、アイランドを甲板に打ち倒したうえで大量の破片を飛行甲板に並べられた艦載機へ撒き散らし誘爆を引き起こしたほか、アイランドにいた士官連中を皆殺しにした。

もう1発は飛行甲板中央の艦載機エレベータを突破し、格納庫内部で炸裂、艦内に置かれた大量の航空燃料と航空兵装を一斉に誘爆させた。艦内部で瞬間的に発生した巨大な爆発エネルギーは出口を求めて艦内を駆け回り——瞬間、アルゲニブは風船のように内部から破裂する形で大爆発した。

「アルゲニブが——」

自身の目の前で空母が吹き飛ばされるのを目にし、たった今沈もうとしているフネの名前をアルカイドが口にした直後にも、地獄は連続して艦隊の各艦に到来した。

急速に迫る謎の存在に対し、すべての艦が血眼になって対空砲火を打ち上げたが、目視による照準で亜音速の目標を迎え撃つのは不可能に等しかった。

奇跡的に、1発のハーブーンの側面を40mm機関砲弾が掠めたのを除き、対空砲火がハーブーンに当てた命中弾はなかった——側面を掠めたハーブーンも結局、大したダメージとはならず、最期まで自らの役割を全うした。

空母アルゲニブが大爆発を起こしてから10秒の間に、30発以上のハーブーンが艦隊の各艦に連続して着弾した。艦隊全周の駆逐艦が次々に吹き飛ばされ、やがて艦隊内部にいた大型艦も次々に犠牲と

なった。

タウルス級重巡洋艦エルナトの特徴的な上部構造物が直撃を受けて吹き飛ばされ、キヤニス・メジャー級巡洋艦テラ・バーカが魚雷発射管に直撃を受けて誘爆、艦中央部から真つ二つにへし折れた。

さらに3発のハーブーンを受けた空母サダルバリが横転沈没し、重巡洋艦アステローペが命中弾を受けた後方の上部構造物を大爆発させた。

艦隊の他の護衛艦艇や空母も次々に船体や上部構造物から火を吹き上げ、それらは1分もしないうちに瞬く間に海底へと引きずり込まれていった。

6隻いた空母のうち4隻はすでに海中へと突き進み、残る2隻も辛うじて浮いていたが、激しく炎上する飛行甲板が空母としての能力を失ったことを端的に物語っていた。

「何が……いったい何が……」

アルカイドは目の前の光景に全く理解が追いつかなかった。

船体の小さな駆逐艦はほぼ一撃で吹き飛ばされ、大型な重巡洋艦や航空母艦ですら、1発でも受ければ大破は確実、数発受ければ簡単に沈んでいく。

こんな光景は、彼の知る戦場ではなかった。

「こんな、こんなことがあり得てたまるかあああッ!!」

彼が叫んだ直後、彼の乗る戦艦ベテルギウスの右舷と前部より強烈な閃光が発生し、かと思えば次の瞬間にアルカイドは後部の壁へ叩きつけられていた。

朦朧とする意識のなかでアルカイドが目にしたのは、ベテルギウスの前部から巨大な火焰が噴き延びる様だった。直後、艦を再び衝撃が襲い、同時にアルカイドの意識は永久に途切れた。

戦艦ベテルギウスは、3発のハーブーンを受けた。最初2発が命中、そのうち1発が二番砲塔右側面の甲板に突っ込み、炸裂した。爆炎と破片は数門の副砲を破壊すると同時に副砲弾火薬庫に勢いをめり込ませ、火薬庫誘爆を引き起こさせた。ベテルギウスは相当運の悪い箇所にも命中弾を受けてしまった。

そこへ偶然——ベテルギウス側からすれば不幸極まりないことに、もう1発のハーブーンが着弾した。傷口から突入したハーブーンは艦内奥深くで炸裂、爆発のエネルギーは艦内の水密扉を幾つも突き破りつつ駆け巡り——数瞬後、主砲弾薬庫にも火の手が回ったことで、ベテルギウスは大爆発、やがて轟沈した。

グラ・バルカス帝国海軍東征艦隊所属の空母機動部隊は、米海軍航空隊に属するF/A-18F戦闘攻撃機18機の放ったハーブーン合計72発による飽和攻撃を受け、旗艦ベテルギウスと空母6隻含め全滅するに至った。

運良くハーブーン迎撃に上がった2機と、上空の警戒にあたっていた6機のアンタレス戦闘機がいたが、彼らの母艦が失われた以上、もはや大した脅威にはなり得なかった。

#### 「戦艦撃沈」

この戦果に米海軍は大いに沸き上がった。米海軍が最後に戦艦を撃沈した1945年以来、70年以上成し遂げることが出来なかった大戦果を再び手にしたからだ。

米海軍の士気は絶好調である。

続く彼らの目標はグレードアトラスター——戦艦大和もどきが率いる艦隊である。ちょうどこの時、カルトアルパスにはグ帝の攻撃隊が突撃しようとしていた。

## 第27話 「カルトアルパス迎撃戦」

「こちら攻撃隊指揮官。アルゲニブ航空管制、応答せよ。繰り返す――」

グラ・バルカス帝国海軍東征艦隊の空母機動部隊の各空母より飛び立ったカルトアルパス攻撃隊は、攻撃目標のカルトアルパス湾を目標として時速260キロほどの低速で巡航飛行していた。

攻撃隊の航空機はアンタレス型戦闘機、シリウス型爆撃機、リゲル型雷撃機から構成されており、アンタレスは旧日本軍の零式艦上戦闘機五二型、シリウスは彗星型艦上爆撃機、リゲルは九七式艦上攻撃機とほぼ同じ見た目と性能を有する。

目標となる敵は総数60隻以上の大艦隊でしかもこの世界有数の（この世界では）精強艦隊、それが満足のいく回避運動も出来ないような内海にあり、強襲とはいえ攻撃を行うには最高の状況である。

先ほどミリシアルの迎撃機とおぼしきプロペラの無い奇妙な戦闘機が約40機ほど襲いかかってきたが、元からこちら側の数的優勢と、機体の性能差によりほとんど被害を出さぬままにこれを全滅させていた。

カルトアルパス湾を取り囲む小高い山状の地形はすでに視界の中で水平線の下、つまりすぐ目の前に迫ってきており、この小高い山を乗り越えればカルトアルパス港で、攻撃隊のカルトアルパス湾突入はもう間もなくである。

ところが突入直前に至り、トラブルが発生している。

「クソッ、繋がらないな」

カルトアルパス攻撃隊の帝国海軍機300機を率いる攻撃隊指揮官の中佐は悪態をついた。先ほどから彼は何度も母艦に無線で呼び掛けを行ってるのだが、まったくつながらないのだ。

この世界では無線を使用する国家がほぼ無いため、無線封鎖など関係なく無線通信が行われる。だが母艦とは連絡が繋がらず、戦艦グレードアトラスターのラクスタル艦長が臨時指揮官を兼任している

水上打撃部隊とは連絡がつくので、母艦に何かあったとしか考えられない。

実態は、米艦隊からの電子妨害（ECM）によるものが影響していた。対艦攻撃のために合衆国海軍航空隊が飛ばしたEA-18Gグラウラー電子戦機による帝国軍空母機動部隊への電波妨害は、帝国海軍空母へ向けられた無線、そして帝国海軍空母から向けられる無線を完全に遮断していた。

そして、彼らの母艦はこの時点で多数のハーブーン対艦ミサイルを受けて海中に没していたこと、母艦のエアカバーに当たっていた機も残敵掃討で撃墜されたことを、彼らは知らない。

「どうします、中佐？ 作戦中止でいきますか？」

指揮官の男に後部席の通信士が問う。母艦が撃沈されたなどという情報を知る由もない攻撃隊は、進撃を続けるしかなかった。

「いや、作戦中止の命令は来っていない。このまま行こう」

「分かりました」

「そろそろ突撃だ。全機に突撃命令を出せ」

「了解です」

通信士が喉頭マイクに手をあて、音声式の無線通信機を使って各機に指示を出す。指揮官の乗る機体は、リゲル型雷撃機をベースに通信能力を強化した指揮通信機型だった。

指揮官の突撃命令は300機にもなるカルトアルパス攻撃隊全機に伝えられる。アンタレス型戦闘機70機、シリウス型爆撃機84機、リゲル型雷撃機146機からなる攻撃隊は、エンジンをフルスロットルにしてカルトアルパス湾へと突入しようとした。

「ん？」

指揮官は編隊の前方で微かな閃光が連続して発生したのを目にした。

その直後、編隊の前方を飛行していた数十機ものアンタレスとシリウスが、感覚的理解の及ばない僅かなタイムラグを置いて一斉に爆散した。

グラ・バルカスの攻撃隊を迎撃したのは、海上自衛隊の護衛艦が発射した、スタンダードSM-2長距離艦対空ミサイルだった。

「スタンダードミサイル第一波、敵編隊の前列に多数命中」

「続けてスタンダード第二波、まもなく目標編隊に命中します」

「スタンダード第三段、発射始め!!」

「発射始め、一斉発射!!」

カルトアルパス湾内に控えていた日本国の海上自衛隊、第2護衛隊群に所属する護衛艦は、カルトアルパスに迫るグラ・バルカス帝国の敵性航空機300機に対して対空ミサイルによる攻撃を開始した。

グラ・バルカスの宣戦布告後にすぐ行動を開始したことで湾外へと移動した米艦隊———どうにも目的は敵艦隊の撃滅のためらしい———とは異なり、外交官護送で派遣された海上自衛隊の艦隊は日本政府の意思決定の遅さが災いして、カルトアルパス湾内に釘付けとなっていた。

そこへグラ・バルカス帝国の艦隊が迫っていることから、日本政府も仕方なく個別的自衛権と全兵装使用自由を発動、また米艦隊が攻撃隊迎撃を自衛隊に丸投げしてきた(代わりに航空支援としてF/A-18F戦闘機6機とE-2D早期警戒機1機をカルトアルパス付近に飛ばし、レーダー情報を自衛艦にデータリンクしてくれた)ため、自分たちで迎撃するしかなかった。

世界最強を自負しているミリシアル軍の、最新の戦闘機があっけなくグラ・バルカスの攻撃隊に撃退されたことで、それはより一層増した。

「敵機、50機以上を撃墜！　しかし敵編隊はなおも此方へ接近中！」  
「発展型シースパローの射程に入り次第、他の艦も攻撃を開始せよ！」

艦砲による自由射撃も許可する！」

第2護衛隊群には2隻のイージス護衛艦——「あしがら」と「きりしま」が含まれている。米海軍のアーレイ・バーク級イージス駆逐艦をベースに造られた両艦は、イージスシステムが捉えた敵機に対し、射程100キロ以上のSM-2スタンダード対空ミサイルを片っ端

から撃ちまくった。

冷戦時代に旧ソ連による超音速対艦ミサイルの飽和攻撃に対抗すべく、百発以上の超音速目標を相手取れるよう設計されたイージス艦にとってみれば、どんなに数は多くとも時速500キロ程度の鈍足で飛行するプロペラ機の迎撃など朝飯前だ。

イージス艦である彼女らは1、2秒に1発のペースでSM-2を発射、常にVLS（ミサイル垂直発射機）から煙を噴き伸ばし、SM-2の残弾をみるみる消費していく。彼女らはイージスシステムの力をもってして既に多数の敵機をSM-2で撃墜していたが、あろうことか敵編隊が引き返す様子はない。

それどころか、間もなく敵編隊は湾を囲う稜線を飛び越え、その内側に侵入してくる。危機感を感じたのか、群司令官がイージス艦以外の護衛艦にも攻撃を命じた。第2護衛隊群は2隻のイージス艦を除き、旗艦「いせ」を含め全艦がESSMを搭載していた。

「護衛艦てるづき、ESSMの連続発射を開始！」

「前方の護衛艦たかなみ、おおなみ、共に主砲による照準を開始！ さらにミサイル発射！」

米国との交流再開後に日本政府が大量に買い込んだ米国製の艦対空ミサイルと、ロウリア事変後に危機感を覚えた政府によって大量生産——ライセンス生産が出来なくなると、生産設備はそのままにライセンス料を払わないコピー生産へと変わり、米国との交流再開後にライセンス生産に戻っていた——された国内生産の艦対空ミサイルが、次々に空中へと飛び出していく。

「敵、本艦の主砲射程圏内！」

「正面对空戦闘！ 主砲、撃ち方始めツ!!」

「撃ち方始めーッ！」

やがてグラ・バルカス帝国の編隊の一部が稜線の内側に飛び出してくると、各艦の主砲であるオート・メラーラ社製76ミリ・127ミリ単装速射砲や米国製の5インチ単装砲、さらにCIWS（近接防衛火器）の20ミリ機関砲から信じられないような連射速度で弾幕を形成、グラ・バルカス帝国軍機を次々に火達磨にしていた。

グラ・バルカス帝国の軍用機が次々と自衛隊の護衛艦の主砲やCWS、ミサイルに撃ち墜とされていく中、カルトアルパス湾内にいた各国の使節護衛艦隊の人間、さらにカルトアルパスの住民らはそれを呆然と見届けていた。

誰もが世界最強と認める神聖ミリシアル帝国の防空網を易々と突破してきたグラ・バルカスの航空機が、湾内に侵入した途端にまるでハエ叩きが如く簡単に撃ち墜とされていく。しかも日本の軍艦が発射しているのは「古の魔法帝国」が使ったとされる、伝説の「誘導魔光弾」そのものではないか。

もし日本と戦ったところで、自分たちに勝ち目はない——米国の影響で史<sup>原作</sup>よりも他国からの評価が低かった日本は、この日、各国の代表の前で圧倒的な力を披露、あまり高くなかった日本に対するこの世界の各国からの評価を改めさせることに成功していた。

『何が起こっている!?!』

『分からない! 攻撃を受けて——ガッ』

『三番機被弾! いや、墜落!』

『振り切れえーッ!! ——ガガッ』

カルトアルパス湾に突入したグラ・バルカスの攻撃隊は大混乱に陥っていた。日本軍の対空戦による正確無比な——そして正体不明な攻撃を受けた攻撃隊は、10分もせぬうちに当初の300機から100機以下へと機数を大きく減らし、統率も取れていない。

攻撃隊指揮官の乗るリゲルに至っては一番電波を出してたたために真っ先に狙われて撃墜されており、指示を出す存在すらいない。あまりの急な事象によってパニックに陥った彼らは、撤退することすら忘れてしまったのだ。

最終的に戦闘は、グラ・バルカス帝国の航空機の中で無断撤退する機が徐々に徐々に増えていくことで、いつの間にか自然終了していた。

自衛隊もあまりに大量のミサイルを撃ってしまい弾薬の消耗が激しかったので、カルトアルパス攻撃隊が撤退を始めた段階で攻撃は停止していた。

こうしてカルトアルパス攻撃隊300機中、残存機67機は母艦を目標して一目散に逃げ帰った。そして彼らの母艦がすでに米艦隊によって全滅させられていることを、彼らは知らない。

## 第28話 「帝国艦隊壊滅」

戦艦グレードアトラスター率いるグラ・バルカス帝国海軍東征艦隊所属の水上打撃部隊13隻は、全艦が24ノットの速力でカルトアルパス目指して航行していた。

「報告！ カルトアルパス攻撃隊は敵の迎撃により壊滅的被害を負った模様、現在母艦に帰投中とのことですよ！」

「そうか……残存機は？」

「70機程です」

「3割以下じゃないか」

通信士からカルトアルパス攻撃隊が壊滅したとの報告を受けたグレードアトラスターの艦長、そして水上打撃部隊の臨時指揮官を兼任するラクスタルは驚嘆する。

まもなくこの水上打撃部隊——グレードアトラスター含む戦艦4隻、重巡洋艦2隻、巡洋艦2隻、駆逐艦5隻は、世界各国の精鋭艦隊の集まるカルトアルパス湾へと突入する。計画ではそうになっていた。

だが先ほどから何故か、空母機動部隊の旗艦ベテルギウスやそれに所属する他艦艇との連絡がつかず、仕方なく水上打撃部隊は当初の命令に従ってカルトアルパスを目指して航行を続けている。

そこへカルトアルパス攻撃隊壊滅の報せ、ここまで来るととてもではないが作戦がうまく行っているとと言える状況ではない。しかし撤退の命令も来ておらず、それどころかカルトアルパス湾の入り口であるフオーク海峡はもう目と鼻の先であった。

「これではエアカバーは期待できんな」

空母を持たない水上打撃部隊は当然ながら対空戦力が不足しており、そのためカルトアルパス空襲に飛来する攻撃隊の戦闘機からのエアカバーを期待していたのだが、これでは不可能だろう。

「帰投する機にエアカバーを頼めんか？」

ラクスタルは参謀に尋ねる。

「一応は頼みました。ですが、アンタレスが18機、リゲルとシリウス

がそれぞれ2機の計22機だけです」

「?」じゃあ他の機はどうしたんだ?」

「それが……奴らカルトアルパスにはもう行きたくないの一点張りで言うことを聞きません。だいいち、もう燃料がありませんよ」

艦橋の窓から、ラクスタルは空を見上げる。確かに20機程度の帝国軍航空機が編隊を組んで空を飛んでおり、しかし間に合わせの部隊のように編隊は少し乱れている。

「そうか……やむを得ん。エアカバーはとても期待出来そうにないが、このままカルトアルパス湾に突撃する。総員戦闘配置につけ!」

「総員戦闘配置!」

ラクスタルの命令は各艦に正確に伝達されていく。艦内に緊迫したブザーが鳴り響き、休憩中の兵達も慌ただしく持ち場につく。各艦も陣形を変更し、輪形陣から単縦陣へと移行を始めた。この時すでに敵の攻撃が始まろうとしていることに、彼らは気づいていなかった。

米海軍はグラ・バルカス帝国の戦艦グレードアトラスター率いる水上打撃部隊に海戦を挑もうとしていた。もちろん前時代的な主砲を用いた有視界内での砲撃戦ではなく、有視界外から一方的に艦対艦ミサイルを叩き込む飽和攻撃である。

「全艦対水上戦闘、ハーブーン発射用意!」

本来なら先ほどの敵空母機動部隊を殲滅したときのように電子戦を掛けて飽和攻撃を行いたかったが、近くに友軍である海自の護衛艦隊がいる以上、おいそれとは電子戦を行えない。

先ほど対艦攻撃に飛ばしたF/A-18Fも整備のために飛ばせないため、やはり電子戦無しかつ水上艦からの対艦ミサイル攻撃しかないのだ。

「攻撃開始!」

命令の直後から敵艦隊に向けて、艦隊のイージス巡洋艦2隻、イージス駆逐艦3隻、戦艦1隻の専用発射筒から、56発のハーブーン対艦ミサイルが撃ち出される。うち2発は動作不良を起こし海面に叩き

つけられたが、それでも54発のミサイルが順調に飛行していた。

最初にグ帝水上打撃部隊に迫るハーブーンを発見したのは、艦隊正面18キロの位置を飛行していたリゲル型雷撃機に搭乗する偵察員だった。

「ん？ あれは——!？」

偵察員は自機の遙かに低空、海面スレスレを、帝国軍のアンタレス戦闘機すら凌ぐ時速1000キロの高速で飛行している物体の群れを目にして驚愕する。

「未確認機多数、艦隊1時方向より超低空から急速接近！ 1分以内に艦隊と会敵する！ なお、敵の高度は10メートル以下、速度は時速1000キロ以上!!」

彼の通報はグレードアトラスター率いる艦隊に正しく伝わった。その通報があつたところで、グラ・バルカス帝国の艦隊が出来ることなど無いに等しいのだが。

通報を受けた旗艦グレードアトラスターでラクスタルは驚愕した。アンタレスの2倍近い速さの敵が、艦隊を目指しているという。彼は即座に命令を出した。

「対空戦闘用意だ！ 全力で撃ち落とせ！ 各艦の判断で撃ち方を始めろ!! 主副対空砲も自由射撃だ！」

いったいどんな敵なのかはラクスタルにも分からない。だが、これがカルトアルパス攻撃隊の壊滅と空母機動部隊との連絡途絶の要因であることは想像がついた。やがて艦隊に破壊が訪れる。

最初にハーブーン攻撃の犠牲となつたのは、艦隊前衛を務めるキャニス・ミナー級駆逐艦ゴメイサだった。正確に照準を付けるために一度急上昇したハーブーンは、急降下してゴメイサの上部構造物に突っ込んだ。

瞬間、ハーブーンの弾頭が炸裂。爆発の火の手はゴメイサの火薬庫

にも回り、直後にゴメイサは大爆発した。もはやゴメイサは軍艦として使うことの出来ない状態にあったが、誰もその事を気にする余裕はなかった。

他の艦にもハーブーンが迫っていたからだ。

ハーブーンが目視で確認された段階で、艦隊からは多数の40ミリ対空機関砲と10センチ両用砲から放たれた火線がこれを迎え撃つた——無論、それらの対空砲火により撃ち上げられた砲弾や機銃弾が、一発たりとてすべてのハーブーンに掠りもしなかったのだが。

やがてハーブーンは次々に艦隊の各艦に狙いをつけて急降下し、最初、艦隊前衛を務める駆逐艦ツルギ、駆逐艦メイロの2隻に閃光が走ったと思うと、次の瞬間には艦隊前方にいたヘルクレス級戦艦ラス・アルゲテイの上部構造物が爆散した。

そしてキャニス・メジャー級巡洋艦ウエズンが魚雷発射管の誘爆により中央からへし折られ、オリオン級戦艦プロキオンの艦首が派手に吹き飛び、直後にはまるで潜水艦の急速潜航が如く海底へと突き進み始めた。

続いて艦隊側面のタウルス級重巡洋艦アルキオネとケラエノが魚雷発射管に直撃を受けて艦中央から引き裂かれると、直後にはヘルクレス級戦艦バルサーが5発近いハーブーンの連続した着弾を受けて爆発炎上した。

そして——戦艦グレードアトラスターにも3発のハーブーンが迫りつつあった。

「敵弾接近！」

「総員、衝撃に備え！」

ラクスタルはもはやハーブーンを回避できないと悟ると、グレードアトラスターの艦長として、艦内の全員に衝撃に備えるよう命じる。彼には船員を護る義務があるのだ。

ラクスタルが艦橋の一角に頭を伏せた直後、グレードアトラスターをかつて彼女が経験したことの無い巨大なエネルギーが大きく揺さぶった。

すべてのハーブーンが艦隊に着弾したとき、海上にあったのは多数の船の残骸と、さまざまな漂流物と、辛うじて浮いているが、もはや軍艦としての機能が完全に失われた数隻の軍艦——

——そして、中破しつつも、まだ戦闘可能な戦艦が一隻そこにあるだけだった。

グラ・バルカス帝国東征艦隊所属の超戦艦グレードアトラスターは、対艦ミサイルによる攻撃を生き延びることに成功したのである。

グレードアトラスターが食らったハーブーンはやはり3発だった。まず1発は艦首に命中、特徴的な細長く反り上がった艦首を爆発で叩き潰し、艦首を醜く変形させたうえで、喫水線下にもダメージを起こし速力を24ノットに低下させた。

続く2発目は左舷中腹ほどに命中した。こちらは甲板上にて弾頭を炸裂させて爆発、爆発による衝撃で甲板を内側に凹ませたほか、左舷側の対空砲や副砲を全滅させたが、爆発が甲板の分厚い装甲を貫通することはなく、艦そのものに与えたダメージは軽微だった。

一部によっては自らの46センチ砲による攻撃すら耐えるグレードアトラスターの装甲を、21世紀の被弾を想定して造られていない軍艦への攻撃を想定して作られたハーブーンが貫通することはかなりの困難であった。

最後の3発目は艦の後部、水上機カタパルト付近に命中した。この命中弾はグレードアトラスター表面の甲板に爆風で大穴を開け、カタパルトやクレーンなどの彼女の航空装備を爆風で全て吹き飛ばし全滅させた。

グレードアトラスターは速力低下、左舷側対空砲の全滅、航空装備使用不可などの被害を負ったものの、それでも主砲や照準機器、レーダー、さらに各種指揮所などは無事であり——つまりとてころ軍艦として未だ行動可能だった。

だがそれを見逃してくれるほど、米海軍は甘くない。このままカルトアルパスに突撃されては危ないだろう。対艦ミサイルによる攻撃

の効果が薄いと判断するや否や、米海軍の艦隊司令官は次の手段に打って出るように命じた。

「戦艦ミズーリを出せ。戦艦どうしの殴り合いで、次こそ敵戦艦を確実に無力化しろ」

艦隊司令の命令を受け、米艦隊に含まれた戦艦 USS ミズーリが急速に増速し、敵戦艦グレードアトラスター目指していく。今回、ミズーリは様々な改装が施されていた。

21世紀に入り初の戦艦決戦——それもアイオワ級戦艦と大和型戦艦（の擬きだが）というライバル同士の夢のマッチが、この異世界の海上にて始まろうとしていた。

## 第29話 「ミズーリ V S G A」

「今度は戦艦だつて？」

対艦ミサイルの直撃を耐えた戦艦グレードアトラスターの艦橋で、レーダー士から報告を受けた艦長のラクスタルは、思わず嘆きたくなつた。

「はっ、本艦正面……カルトアルパス湾付近から戦艦らしき艦影が、巡洋艦クラスの艦艇を1隻伴い、30ノット以上で本艦に接近しているのをレーダーが捉えました」

——これ以上戦えるのか？

ラクスタルは思わずにはいられなかつた。ただでさえ、この戦艦は先ほどの未知の攻撃で中破しており、随伴艦も全滅している。ヘルクレス級戦艦の2隻はまだ浮いていたし艦としての面影も残していたが、軍艦としての機能はほぼ喪失したと見て間違いないだろう。

しかし逃げられる保証もない。グレードアトラスターは先ほどの攻撃で艦首へダメージを受けており、速力が24ノットまで落ちている。敵艦が先の光弾で攻撃してくる可能性もあるため勝つのは難しいかもしれないが、30ノット以上で迫る敵艦から逃れることはできない。

「敵との会敵予想時刻は？」

「本艦主砲の射程圏内に入るのは10分以内です」

「考えてる猶予は無いか……対水上戦闘用意！ 主砲発射準備だ！

それと、通信士！ エアカバーの航空機を全部対艦攻撃に振り向けろ！」

ラクスタルは叫び、直後に味方航空機による航空支援と、主砲——3基の45口径46センチ3連装砲による敵艦への攻撃を命じた。

一方の米海軍戦艦——USSミズーリも主砲による砲撃の準備を開始した。

ミズーリの主砲は50口径40.6センチ3連装砲3基であり、グレードアトラスターの45口径46センチ砲よりも砲身は長いが直径は細い。そのため砲の威力そのものはグレードアトラスターに分があるが、砲身長長いミズーリの主砲は砲口初速が速く、装甲貫通力はどっこいどっこいだ。

ただしミズーリには今回のカルトアルパス派遣において特別な改装が施されており、今後米海軍に就役予定の大型艦艇に搭載するいくつかの兵装の試験を行うテストベッド艦として様々な新兵装や装備、それらを運用するための最新システムを搭載していた。

例えば――

「僚艦とのデータリンク完了!」

代表として「アーセナル・シップ」――ミサイル等の火器の管制などを随伴する友軍艦によって行い、ただ自艦はそれらの火器の発射母艦として戦闘を行う艦の実験として、高性能なデータリンク・システムが付与されていた。

本来のアーセナル・シップはミサイルのみを発射するが、ミズーリの場合にはミサイルの代わりに40.6cm主砲を発射する。21世紀の軍艦による火器管制は恐ろしいまでの命中率を叩き出す。

今回はアーレイ・バーク級イージス駆逐艦 USSラファエル・ペラルタが戦艦ミズーリに随伴しデータリンクによってミズーリの火器の管制を行う。主砲から副砲、さらにミサイルやCIWSまで、ほぼ全ての――発射を除く――火器管制がラファエルに委ねられていた。

「敵航空機接近!」

「火器管制をラファエルが代行、対空ミサイル発射!」

手始めと言わんばかりに、襲来した敵の航空機22機に向け、ラファエルの管制のもとミズーリのMk.41VLSとRAM近接ミサイル、57mmCIWSが火を噴く。あくまでもテストによる対空戦闘だったが、ミズーリは5分も経たずにあっさりとこれを全滅させた。

「敵航空機、全排除!」

「よし、敵艦に砲撃を行う。弾種、多目的榴弾！ 目標には外交官が乗っていると考えられるため、撃沈はするな。上部構造物だけを破壊し無力化する」

発射するのはロケット補助推進の精密誘導HE弾であり、弾頭は21世紀生まれの高性能爆薬、さらにロケットの加速によって射程距離は100km近くにまで伸ばされ、命中率は艦船相手でも5割近くにまで上っていた（代わりに炸薬量は減ったが）。

「砲撃を開始する。主砲射撃用意、弾種多目的榴弾、全門斉射用意!!」  
ミズーリは指向させた3基9門の40.6cm主砲を50km先の敵戦艦に大きく仰角を付けて向ける。駆逐艦ラファエルの火器システムは相手との相対速度を瞬時に算出し、そして砲弾の飛翔速度をも計算、敵の未来位置に向かってミズーリの主砲を照準させた。

「撃てエーツ!!」

戦艦ミズーリの主砲が火を噴いた。

同時に戦艦グレードアトラスターの艦橋では、水平線上で閃光が起きるのが確認できた。惑星そのものの直径が地球よりも大きいため、50km先の目標も戦艦の艦橋からならギリギリ目視できる。

「て、敵艦発砲!!」

見張り所で双眼鏡を覗いていた見張り員が信じられないと言わんばかりの声音で報告の声をあげた。自艦の46cm砲は射程42kmであり、まだまだ遠い。カルトアルパスにいた米海軍の戦艦は、口径長は長いとはいえ口径は目算40.6cmであり、大したことなかったはずである。

（バカな！ まだ50kmは離れてるんだぞ！）

ラクスタルも叫びたくなかった。だがその叫びを彼は押し殺す。指揮官が冷静でなければ、部下の士気は非常に低下するからだ。代わりに、彼は命令を飛ばす。

「回避しろ！ 取り舵いっぱいー！」

「取り舵いっぱい、アイー！」

ラクスタルが命じ、舵をとった艦は大きく傾き始めた。だがラクス

タルは、回避機動を取った所で敵弾を避けられないのでは、と踏んでいた。

(もしこれが先ほど我が艦隊を壊滅させた光弾攻撃であれば、ほぼ百発百中——避けられないはずだ)

攻撃の手段こそ異なるが、彼の予想は概ね正しかった。

ミズーリが天高く発射した9発の40.6cm砲弾は、マッハ2以上の高速で50口径の砲身から飛び出した後に高空に向けて急上昇した。そして弓なりの弾道飛行に入る直前に尾部のロケットモーターを点火、運動エネルギーを増加させ、GPS誘導と内蔵されているジャイロにより軌道修正しつつ敵艦に突撃するコースを取った。

1分以上の飛行ののち、弾道飛行における終末段階に入りつつあった9発は先端の赤外線シーカーを作動させ、精密な誘導のもとスラスタで軌道を微調整しつつ未来位置を目指し続け、そしてグレードアトラスターに大落角で突っ込んだ。

命中弾は6発だった。命中弾となった6発は底部の運動信管を作動させ、砲弾内部に収められていた炸薬を起爆させた。起爆時に生じた衝撃波と爆風は着弾地点を中心として同心円状に広がり、周囲の構造物を風ぎ払った。

初弾でまさかの6発が命中、この際にグレードアトラスターの上部構造物は厚い装甲が施された主砲、司令塔、煙突などを除いて、その1/3がこのときの命中弾の炸裂によって全滅した。

「ダメージコントロール！ 応急処置要員は艦内火災の消火急げ！」  
ラクスタルはダメージコントロールの要員に命令を飛ばす。まだまだ戦えるだろうが、初弾でいきなりの大ダメージだった。

この間に、ミズーリはグレードアトラスターの砲戦圏内の42kmへと侵入していた。普通に考えれば、あのままグレードアトラスターの射程圏外から一方的にロケットアシスト弾を撃ち込むべきだったが、あれは飽くまでも試験的に装備されたため数が少なく、先の9発

で全てだった。

そのため後は全て通常の——つまりかつての砲戦距離内の38 kmで発射する砲弾だけである。非ロケットアシストであれば、多目的榴弾はまだ残っていた。

対するグレードアトラスターも、ミズーリを主砲の射程圏内に捉えたため、ようやく砲撃を始めようとしていた（ミズーリに随伴するラファエルはGAから一定の距離を保ち続けた）。

「レーダー照準、完了！」

辛うじて未だに無事だった対水上レーダーのデータをもとに、グレードアトラスターの主砲が照準される（対空レーダーは先の着弾時にイカれていた）。

「主砲、砲撃はじめ！」

「砲撃はじめ、撃てエツ!!」

ラクスタルが命じ、グレードアトラスター前部2基6門の46 cm砲が敵めがけて火を噴いた。初弾は外れ、2回目は挟叉に終わったが、3回目のうち1発はミズーリに直撃するコースを取った。

ミズーリもグレードアトラスターの砲撃を確認した。ラファエルからデータリンクしたデータにより既に着弾予測地点は計算済みであった。

「1発直撃コースです!!」

敵戦艦が放った6発の46 cm砲弾はほとんどが至近弾で、そのうち1発がどの方向に避けようともミズーリに命中するコースであった。

「この際だ。新兵装の実験を行う。対空レーザーを起動、本艦に向かって敵砲弾に照射せよ！」

「了解、『対空レーザー』起動」

ミズーリの艦尾に置かれたドーム状の物体が旋回し、そのレンズ

にあたる部分からレーザーが照射される。ドーム状の物体はレーザーの照射を続け――照射開始から10秒後、ミズーリを目指していた砲弾が空中で自爆した。

「敵砲弾の迎撃を確認！」

ミズーリには今回、試験的に『SACCOL』と呼ばれるヨウ素酸素化学レーザー砲が装備されていた。要するに、『対空用レーザー砲』である。

弾道ミサイル迎撃機「ALLI」の対弾道弾レーザー砲を艦上運用出来るように改良のもとミズーリに対空用として搭載したのがSACCOLだった。

もともと弾道ミサイルの撃墜を目的に造られたため、対空用としての威力は過剰だったが、音速で飛翔する敵砲弾の迎撃には向いていた。

その後もグレードアトラスターの砲撃を避けつつミズーリは砲戦距離に迫り、やがて砲戦距離の相対距離38kmに到達した。

「敵、主砲の射程圏内！」

「よおーし、お返しといこうじゃないか。1番2番主砲、弾種多目的弾、撃てエツ!!」

ミズーリの主砲が再び火を噴いた。

1分後、グレードアトラスターにはミズーリが放った6発の40.6cm砲弾が襲来した。非誘導砲弾とはいえ駆逐艦ラファエルの高性能FCSに精密制御され、データリンクで正確に照準されたそれらは、正確にグレードアトラスターの未来位置へと殺到し、4発が命中した。

シーカーとロケットモーターが無い分より多くの炸薬を弾頭に詰め込んでいたそれらの砲弾は、1発1発が先ほどよりも大きな爆発を起こした。

この命中弾のうち、1発がグレードアトラスターの夜戦艦橋に突っ込んだ。艦内で砲弾が炸裂したことにより前檣楼は大きな振動に包

まれ、この際に（相当デリケートなのに）辛うじて生き残ってた対水上レーダーと射撃照準レーダーがついにイカれた。

それでも測距儀が無事だったため、戦闘はさらに続いた。ミズーリは6回の斉射を行い、GAも4回の斉射を行った。だが限界が来た。

ミズーリが8回目の斉射をした際、命中弾の爆風が前部射撃指揮所の測距儀を吹き飛ばし、後部射撃指揮所は直撃弾を受けて撃破され――つまるどころ、射撃不能だった。しかも後部射撃指揮所を吹き飛ばした40・6cm砲弾は後部副砲すらも叩き潰し、大規模な火災を引き起こさせていた。

「本艦、射撃不能です」

「……クソッ」

ここまで努めて冷静を装ってきたラクスタルも、さすがに悪態をつかずにはいられなかった。もはやこの艦は戦えない。戦えないフネが出来ることなど何もなく、その戦えないフネを助けるべき味方はすでにいない。

「……降伏だ」

ラクスタルの言葉に、誰からも異論は無かった。

グレードアトラスターは戦闘旗をマストから引き下ろし、電文にて平文で降伏する旨を米海軍に発した。

米海軍はこれを受け入れてグレードアトラスター占領のために、艦隊に随伴していた米海軍特殊部隊『ネイビー・シールズ』チーム1と米海兵隊員を強襲揚陸艦の搭載していたMV-22オスプレイにてGAに送った。

ラペリング降下で甲板に降り立った彼らは瞬く間にGAを占拠し、ここにグラ・バルカス帝国のカルトアルパス攻撃作戦は潰えた。

### 第30話 「後始末と決断」

中央暦1642年4月26日――

先進12カ国会議の最中だったカルトアルパスはその日、大勢の人々でごった返していた。いや、途中でアニユンリール皇国とグラ・バルカス帝国の代表が退席したため、現在は10カ国会議となっているが。

集まったのは、会議のために集まった各国使節、その護衛を務める艦隊の将兵はもちろん、カルトアルパスの住民たち、さらには騒ぎを聞き付けミリシアル国内から集まってきた大勢の野次馬だった。彼らはある物を見て騒いでいた。

ひとつはカルトアルパスに襲来した数百機の飛行機械を一方的に殲滅した日本国海上自衛隊の護衛艦隊、もうひとつは巨大戦艦や超巨大空母を擁してグ帝艦隊を殲滅した米海軍艦隊、そして、鹵獲されたグラ・バルカス帝国の戦艦たちだった。

先日、グラ・バルカス帝国海軍がカルトアルパス湾を急襲したことで発生した『カルトアルパス沖大海戦』は、米海軍の攻勢と海自艦隊の防御により帝国海軍側の惨敗、残った少ない戦力は降伏するに至った。

米軍艦によって湾内に曳航されてきたグラ・バルカス艦艇は、米海軍の攻撃の前にも辛うじて沈まず、最終的に降伏した艦艇だ。

カルトアルパス湾に移送された鹵獲艦艇は3隻の戦艦だった。うち2隻は長門型戦艦に酷似したヘルクレス級戦艦――コルネフオロス、ラス・アルゲティ――だった。

この2隻はハープーン攻撃に耐え、船体や機関へのダメージもなく海上に浮いていた。だが上部構造物の大半が主砲を除きほぼ全て叩き潰され、戦闘を行うためのシステムから要員まですべてを吹き飛ばされ、戦闘不能になっていた。そのため、降伏自体はなんとか生きてた士官連中がとつと行ってくれた。

そしてもう1隻は、先程もカルトアルパス湾に来航履歴のある戦艦

だった。

そう、戦艦グレードアトラスターである。

この艦はヘルクレス級の2隻よりも損傷は少なかったものの、やはり戦闘不能に陥っていたため、艦長ラクスタルにより米海軍への降伏が決められていた。

見物人たちは、これらの戦艦の大きさ、そしてこれらが純科学製であるということに驚愕し、同時にそれを一方的に叩き潰した米海軍艦隊と日本艦隊に驚愕と畏怖の感情を抱いた。

おそらくあれらの戦艦は米国の所有となり、今後グラ・バルカス軍の旗の下で戦う事は無いだろう——カルトアルパスにいた人々、さらに降伏したグラ・バルカス帝国軍のほぼすべての将兵がそう感じていた。

所変わって先進10カ国会議では、今回の戦闘における後始末が話されていた。やはり見物人や野次馬らの思っていた通り、3隻のグラ・バルカス戦艦は米海軍の所有となろうとしていた。

米国側も、それには賛同している。戦艦は運用にバカみたいな高コストが懸かるが、現在米海軍の運用しているアイオワ級・サウスダコタ級戦艦は半世紀以上に建造された老齢艦ばかりだ。

その更新のために活用してやろうではないか。そう考えている。

またグラ・バルカス帝国の処遇に関しては、ムーの提案により、すべての侵略行動の停止と撤兵、さらに今までの侵略行為への謝罪と賠償を行えば、今までのことはすべて水に流そう、ということが決まっている。既に声明はグ帝側に伝えられ、しかも旧レイフォル勢力圏の領有継続は許可しており、かなり寛大だ。

あとはグラ・バルカスが話を呑んでくれるのだが、まさか今回手ひどくやられたというのにも関わらず、それを蹴ったりするほど、グラ・バルカスもバカではなからう。

さて、そんな訳で一応の後始末は終わり、ここで米国の代表は本来

会議で行おうとしていたことを議題に出した。以前、グラメウス大陸での開拓中にて見つかった、何かのビーコン——魔帝復活ビーコンに  
関してである。

これがどこかの国の所有物なのか、正確な意見を聞くため、米側は  
直接そのビーコンをさまざまな角度から撮った写真を資料として、会  
議場に持ち込んできている。

米国の代表が議長の許可をもらうと、米国代表者はそのビーコンに  
関する資料を各国の代表に配った。

最初こそ、誰もがクエスチョンマークを頭の上に浮かべたが、その  
写真の一枚、ビーコンに古の魔法帝国ラヴァーナの紋章が描かれていることにパ  
ンドーラ大魔法公国の代表が気づき、それを口にした。ラヴァーナの  
話題が出た途端、再び会議場は荒れに荒れた。

またこのとき、米国と日本はラヴァーナがビーコンなどという物  
を作れるあたり、かなり高度な技術を有していることを悟った。

同時にこの世界で聞かれる古の魔法帝国の噂が、全くの与太話では  
ない、ということも。

さらに所変わってグラ・バルカス帝国。

その首都である帝都ラグナは皇城ニブルズ城。そこでは皇帝グラ  
ルクスを始めとする国政や軍事のトップが集まっていた。緊急で  
行われた、国の今後を決定づけるための帝前会議である。

先ほど外交官護衛の名目のもと、カルトアルパス急襲に出撃したグ  
レードアトラスターから攻撃隊壊滅とカルトアルパス急襲作戦が完  
全に失敗したことが通信により伝えられた。

それどころかグレードアトラスターは戦闘——それもミリシアル  
ではなく米国の艦隊と交戦ののち降伏し、ヘルクレス級戦艦2隻とと  
もに鹵獲されたという。グレードアトラスターとヘルクレス級戦艦  
は帝国の象徴である戦艦であり、それが鹵獲されたことは帝国上層部  
に大きな衝撃を与えていた。

特に「今回の作戦で現地人どもは我らにひれ伏す事になるでしょ

う」などと皇帝に自信満々で語っていた外務省長官モポールは顔面蒼白で今にも卒倒しそうである。

作戦を立案した帝国海軍東方艦隊司令長官カイザルと帝国監査軍司令長官ミレケネスの2人も顔色が優れない。

この世界をすべて支配することを夢見ていた皇帝グラルークスは、決断した。自分たちがこの世界を支配することは不可能、であるならば、今後は彼らと融和の道を歩むしかない、と。

グラルークスはモポールに最後の仕事として、カルトアルパスにいる帝国外交官——シエリアに列強国との交渉を行うように命じ、また今回の責任として、これをモポールの最後の仕事とする、と伝えた。その言葉の意味を理解したモポールは、御意を伝えたのち、今にも卒倒しそうな顔をしつつ、急ぎ部屋を出ていった。

責任を取るべく、まだ他にも処罰されるであろう人員は多数いるだろう、そしてそれは自分かもしれない、と会議参加者の大半は腹を括った。

## 第四章 戦間期

### 第31話 「未来への警戒」

2018年11月3日

グラ・バルカス帝国がすべての侵略行動を停止し、ミリシアル他列強諸国による声明を受け入れてから7カ月が経過した頃。

アメリカは先進12カ国会議のあと、惑星αの各地にて伝わる古の魔法帝国——魔帝、ラヴァーナル帝国への調査を本格的に行うようになった。

理由はもちろん、先の国際会議にてグラメウス大陸にて見つかった謎のビーコンらしき機械を作ったのがラヴァーナル帝国であることが判明したからである。

ビーコンは魔法で動いていることが米国の某研究機関（日本派遣支部）における調査で判明している。

どのような調査をしたのかは不明であるが、それは重要ではない。問題は、このビーコンを作るにはかなり高度かつ精密な技術——地球における21世紀前後の技術力が使われていることである。

つまりそのビーコンを作った国はかなり高度な技術力を持っていると考えられたのだが、それがまさかの1万年以上前に消えたラヴァーナル帝国が作ったというのに、未だ稼働していることが会議にて判明した。

米国からすれば1万年以上も前にそんな技術的に進んだ国が存在していたことはもちろん、1万年以上も稼働する精密機械を作れる技術を持つ国が存在していたことには心底驚かされた。

だとすれば、どうも21世紀先進国並みか、それ以上の国家である可能性もあった。

しかも先進12カ国会議においてはラヴァーナル帝国が近いうちに復活することが予言されている。

最初、占いによる予言ということもあって米国側はあまりマトモに

話を聞くつもりはなかった。

だが、報告を受けた米大統領も事態を重く見たために、ラヴアーナル帝国に関する大規模な調査を行うことを許可した。

もしかしたら自分たちと同じ技術力の国家がいきなりこの世界に現れるかもしれない――。

米大統領の命令により、CIAやNSAといった情報機関の人員が惑星αに派遣され、他にも米国国務省は外交官に調査命令を出すなどして情報を収集し、精査した。

その結果、ラヴアーナル帝国がトンでもない国であることが判明した。

ラヴアーナル帝国は進み過ぎた文明ゆえ、かつてはこの世界をすべて支配していたらしいが、非常に傲慢だったらしい。

そのため支配下に置いた他種族を家畜以下の存在として扱い、他国に奴隷の差し出しを拒否されると核戦争を起こしたというのだ。

もはや傲慢なんてレベルではない。

理不尽な要求を断ただけで核兵器を使用するなんて、話を通じることがない。

しかもあまりに傲慢すぎて、進み過ぎた文明ゆえに驕り高ぶり、ついには神に弓を引いたとされている。

その結果として神々は怒り、彼の国が支配するラティストア大陸に大隕石を落とそうとしたのだが、彼らは国全体に結界を張り、大陸ごと1万年後の未来へ転移して隕石から逃れたのである。

それが1年以上前の話。

そして――。

どう考えても、間もなく復活する。

武器兵器のレベルも判明している。

ラヴアーナル製の古代兵器をリヴァース・エンジニアリングして運用している神聖ミリシアル帝国を元に、様々な可能性が浮上した。

超音速ジェット戦闘機やミサイル、核兵器に相当する兵器はもちろん、さらに空中戦艦のような超兵器の所有も考えられた。

より具体的には最低でも1970年代アメリカの軍事技術力であ

る。

こんな危ない国が復活されてはたまったものではない。ところがラヴアーナル帝国に関する調査の過程で、ほかにもあることが判明した。

アニウンリール皇国が、ラヴアーナル帝国の復活を支援している――

それは件のラヴアーナル製のビーコンが見つかったグラメウス大陸の国家、鬼人族の国にて外交官が調査した際に判明したことである。

アニウンリール皇国は南方の大陸に存在する国家で、文明圏外国でありながら広大な土地を支配しているため、この前の先進12カ国会議にも招かれていた。

しかし偵察衛星がアニウンリール皇国の国土を撮影した写真によると、文明圏外国でありながら何故かミリシアル以上の進んだ文明の存在が確認されている。

しかも偵察衛星で確認されたところによると、アニウンリールの港にはミリシアルのものと同じような、ラヴアーナル帝国の古代兵器に似た戦艦なども確認されている。

どうにもラヴアーナル帝国の技術を持ち合わせながら、それを隠しているようなのである。

証言者はバハーラという、鬼人族の国にて暫定代表を務める鬼人で、そんな立場の者が嘘を吐く可能性も低い。

しかもグラメウス大陸侵攻時に発見した魔王城や、グラメウス大陸にて活動するアニウンリール皇国の工作員が使用していたと見られる仮拠点では、複数の証拠となる書類や証拠資料が（一部は日本の手によって）回収されており、信憑性は高かった。

狂ってる――。

理不尽に核兵器を持ち出すとは、そしてそんな国の復活を手伝う国とは、さしものアメリカでさえもそんな感情を抱かざるを得なかつ

た。

米国はもしもの時に備えて、各国との間でラヴァーナール帝国やア  
ニウンリール皇国に関する情報の収集や連携の緊密化、さらに対ア  
ニウンリール戦争の作戦立案を開始した。

### 第32話 「戦力拡大」

2019年4月25日。

カルトアルパスでの戦闘から1年が経過した。

アメリカは古の魔法帝国——ラヴァーナル帝国に対する警戒を強め始めている。

それはつまりアメリカが神話を真に受け始めたということ——さらに、極秘裏に対ラヴァーナル帝国・対アニウンリール皇国に対する戦争への準備を開始していた。

少なくともジェット戦闘機やミサイル、核兵器や弾道ミサイルを所有していると考えられているラヴァーナル帝国や、偵察衛星により戦艦の存在が確認されているアニウンリール皇国。

せっかくこの惑星 $\alpha$ ——異世界をフロンティアとして市場や開拓地を築き、多大な利益を得ているアメリカにとって、地球の先進国並みに国力を持つ彼らの台頭は好ましくない。

それにラヴァーナルは奴隷の差し出しを拒否しただけで核戦争を起こすような国だ。

そんな国が現れては、とてもではないが共存すらできそうにもない。

ゆえに、アメリカには戦争でかの国を滅ぼすという手段しかない。そのため米軍は戦争に備え、恐ろしいほどの勢いで軍備拡張を行っている。

具体的に言えば、兵器類の更新である。

例えば、米海軍空母航空隊の異世界派遣部隊は、機体不足で以前から『航空機の墓場』から引きずり出してきたF-4やF-14などのモスボール機を大量に運用している。

また、やはり旧式機の割合が高かった米空軍も、海軍と同じように航空機の墓場から引きずり出してきた旧式機の割合が高い。

具体的には、例えば戦闘機や攻撃機だと初期型のF-16やF-15、退役済みのF-111やF-117、どこから持ってきたのかA

—1やF—100、なんとMiG—21のような（どこから持ち出したか、なぜ持ち込んだかは不明）、お前らどこぞのベトナムの亡霊かとツツコミたくなるような機体まで様々。

爆撃機も、B—52GやB—52H、B—1Bのモスボール済機を現役でも運用できるように最低限の改修を施した上で運用している。そんな彼らもついに旧式機を手放しつつある。

旧式機の更新のため作られた大量の後継機が、次々と彼らの部隊に配備され始めたからだ。

米海軍航空隊にはF—35CやF/A—18Fブロック3、米空軍にはF—15EやF—35A、F—22A——2018年から改良型が再生産されていた——といった最新鋭機が配備され始めていた。

無論、旧式から最新型への更新が行われてるのは航空機だけではない。

陸軍・海兵隊であれば銃火器や戦闘装甲車輛、海軍であれば駆逐艦やフリゲートなどの艦艇も更新されている。

陸軍と海兵隊の装甲車輛は、ハンヴィーから最新の装甲車M—ATVやJLTVへと更新され始めており、軍の強化は進んでいた。

海軍は4軍の中でも特に規模が大きく、それは先述の航空機の他に多数の大型艦艇を更新し始めていることが原因だった。

海軍異世界派遣部隊の旧式空母7隻や戦艦4隻（非派遣艦も含めると6隻）は相変わらずそのままであったが、フリゲートや駆逐艦は一部が更新された。

フリゲート艦は、本来とつくの前に退役するはずだったオリバー・ハザード・ペリー級などの旧式艦も含まれていた。

だがそれはすでに更新され、インディペンデンス級やフリーダム級などのLCS——戦力不足を理由にVLSを16セル追加、主砲も76mm砲に変えられた——へと変わっている。

駆逐艦だって、最新型駆逐艦のズムウォルト級——既存のままでは全くもって使えないため、レーダーをSPY—1B（V）に換装、さらに既存のイージス・システムを装備し、イージス艦に艦種変更させられていた——も配備され、戦力増強は著しい。

それどころか、潜水艦<sup>S</sup>発射型<sup>L</sup>弾道ミサイル<sup>M</sup>搭載のオハイオ級戦略ミサイル原子力潜水艦まで派遣されていた。

後継艦のコロンビア級戦略原潜の早期就役によって予定より早く現役任務を退いたオハイオ級はすでに2隻が惑星αに派遣されている。

オハイオ級の搭載するトライデントⅡ型SLBMは核弾頭搭載かつ多弾頭<sup>MIRV</sup>で射程は11,000キロ。

言ってしまうえば過剰戦力である。

なぜこんなものを地球から送ってきたのか。

そう疑問に思われる方も多いかもしれないが、それは米国が、古の魔法帝国——ラヴァーナル帝国や、その復活の支援を行うアニウンリール皇国にそれほどの警戒心を抱いているからだ。

何せ、理不尽な要求を一方的にしてきて、それを断ると核戦争だつて起こすようなめちやくちやな国家である。

しかも彼らの有する弾道ミサイルは、射程50,000キロ以上で星のどこでも届く可能性があり、核戦力で対抗するにはSLBM搭載の戦略原潜が最適だった。

またラヴァーナル帝国は伝承から伝わるその高い技術力や軍事力とは裏腹に、戦艦を所有しているらしく大艦巨砲主義が生きてる可能性もある。

これに対抗するには、やはり大艦巨砲主義で作られた戦艦しかない。

そう考えた米国は、戦艦の戦力強化を依然として進めた。

米国にはアイオワ級、サウスダコタ級、ノースカロライナ級などの他に、さらに1隻、特に巨大な戦艦が存在していた。

米国はその戦艦を大改造し、戦力にしようとしていた。

大和型戦艦に酷似した形状を持つ戦艦——グラ・バルカス帝国より鹵獲した、超戦艦グレードアトラスターである。

またこれを受け、地球では大艦巨砲主義が再興しつつあった——。



## 作中登場の米軍兵器解説まとめ（随時更新）

### ◆航空機

・ F-14E スーパートムキャット

本作オリジナル兵器。機体不足に陥った米海軍がデビスモンサンでモスボールされていたものの中でも耐用年数に余裕のある F-14A/B/D を引つ張り出し、アビオニクス類とコックピット、エンジンを一式すべて F/A-18F のものに換装した近代化改修型。機体耐用年数が短いため、飽くまでも後継機就役までの繋ぎである。

・ F-14F

何を考えたのか、現役復帰した F-14E をさらに改修した機体。エンジンを F135 へ変更し超音速巡航能力の追加と機動性の向上、AN/APG-81 AESA レーダーの搭載、フライ・バイ・ワイヤと CCV の装備、機体全周に FLIR の装備、HUD から HMD への変更、CFT 装備、エアインテークの小型化・傾斜と尾翼の V 字傾斜による RCS 低減、機載コンピュータの高性能化による単座化などの改修がされている。記述は無いが複座型である F-14G も存在する。飽くまでも最新鋭機への繋ぎだったが、この改修の結果繋ぎなのか何なのか分からなくなり始めている。

・ F-15SE

F-15E 戦闘爆撃機改造のステルス戦闘機。正面 RCS だけなら第五世代ジェット戦闘機のそれに相当する。本作では一部が米空軍向けに試験運用されたほか、自衛隊でも 6 機が試験運用中。

・ F-22A

世界最強とも名高い、米空軍の誇るステルス戦闘機。世界初の第五世代ジェット戦闘機でもある (F-117 は戦闘機ではない (戒め))。その性能は他の戦闘機を長年圧倒する高性能機だったが、あまりにも高価すぎて 200 機以下の製造数で生産中止となった。が、本作では財力にものを言わせたアメリカにより再生産が行われ、米空軍異世界派遣部隊でも配備が進んでいる。

・ F-4、F/A-18A/B、A-7、A-6、A-4 など

米軍にて退役した戦闘機・攻撃機たち。退役してモスボールされたが、米軍異世界派遣部隊が機体不足により、航空機の墓場（デビスモンサン）から引きずり出してきた。外見はお古でも中身は最新機器でアップグレードしている。が、やはり最新型機と比べると性能不足は否めない。

#### ◆ 船舶

##### ・ USS エンタープライズ

米海軍が建造した世界初の原子力空母。排水量は8万トンとニミッツ級より軽い、全長は336メートルとニミッツ級より長く、軍艦としては最長。本作では2012年には現実同様に退役し、解体が進んでいたものの、日本転移後に解体工事中止、からの大改装を施して再就役した。

##### ・ USS ジェラルド・R・フォード

米海軍最新の原子力空母。でも電磁カタパルトと着艦関係の機器の問題で現実では欠陥空母扱いもされてる。本作のアメリカは現実以上に潤った資金源を駆使してそれらの欠陥を解決した。

##### ・ USS モンタナ

米海軍がグラ・バルカス帝国より鹵獲し、米海軍に編入された戦艦グレードアトラスター。艦番号はBB-72。現在様々な改造が予定されている。

##### ・ アイオワ級戦艦

米海軍最後の戦艦。同型艦はアイオワ、ニュージャージー、ミズーリ、ウイスコンシン。現実では記念艦となっているが、本作では異世界進出に合わせて再就役した。CIWSをブロック2型に変更、SeaRAMと57mm砲CIGSの装備、トマホークSLCMをタクティカル・トマホーク対応型へと変更、他艦とのデータリンク能力の強化をするなどの改修が施されている。国定歴史建造物からは一時的に除外されている。

##### ・ USS ミズーリ

兵装試験のために新装備を搭載するため、他の同型艦以上の大改装

が施された。主な改造点として、アーセナルシップの実験としてデータリンク・システムの強化、Mk. 41 VLS（32セルを艦橋を挟む形で2基64セル）、レーザー砲SA COILの搭載など。言うなれば、兵装とガワがアイオワ級のアーセナル・シップ。

・改タラワ級制圧ロケット砲艦

ワスプ級強襲揚陸艦の就役に伴って退役したタラワ級強襲揚陸艦（全長250m、排水量4万トン）の二隻を米海軍が再就役のち改造させ、艦首から艦尾まで伸びる飛行甲板の上に自走ロケット砲『MLRS』の227mmロケット弾12連装発射機を100基も敷き詰め、一艦あたり総数1200発の『M26A2』227mmクラスター弾頭ロケット弾を一斉発射可能にしたロケット揚陸艦。ウエルドック機能と航空機運用能力を完全にオミットされたが、代わりに驚異的な火力を手に入れている。USSナツソー、USSペリリューの二隻が改造された。

・キティホーク級及びフォレストアル級空母

米海軍の通常動力型空母。現実では全て退役済み。本作に登場しない同型艦のUSSアメリカは漁礁として沈められ、USSフォレストアルは解体済みとなっている。残りの艦は（当時は）解体途中またはモスボールされ予備保管艦となっていたが、本作では航空機輸送艦として一斉に再就役を果たしたあと、再び空母として運用できるように改造されて米海軍異世界派遣部隊が運用している。全6隻。

・サウスダコタ級戦艦

アイオワ級戦艦の前級である戦艦。同型艦はサウスダコタ、インディアナ、マサチューセッツ、アラバマ。本作では現存する三番艦マサチューセッツ、四番艦アラバマが博物館船にされていたところを引っ張り出され、SLIPと近代化改装を施し復活した。

◆陸上兵器

・グリフィンII軽戦車

米陸軍が現在開発中の軽戦車（空挺戦車）。120mm低反動砲搭載、重量28トンでかのエイブラムズ戦車を作ったメーカーが開発している。ただステルス仕様はかなりダサイ。本作では日本転移によ

る国際情勢の緊張により現実よりも早く開発・採用されたという設定。

◆その他

・SACCOL

弾道ミサイル迎撃機AL-1のレーザー砲を艦載対空レーザー砲として移植したもの。正式にはShip-to-Air Chemical Oxygen Iodine Laser。元が対弾道弾用なので、LaWSやTHELなどの普通の対空レーザーと比べたらオーバークイルと言わんばかりの火力を持つ。

・UFO

何十年も前に鹵獲し、エリア51にて保存されている異星人の宇宙船。超光速巡航飛行が可能だが、まだ色々分かっていないことが多い。2話にて一瞬登場したが、おそらく今後は登場しないと思われる。

・X-37C

米軍の運用する無人宇宙往還機(スペースプレーン)『X-37』の拡大発展型。本作では惑星 $\alpha$ こと異世界に2機が搬入され、異世界でGPS衛星を軌道投入するべく使用されている。宇宙往還機という、滑走路から飛び立ちそのまま軌道突入する特徴から、嘉手納米軍基地の滑走路が宇宙港に指定されている(通称：嘉手納宇宙港)。

・オリオン型恒星間宇宙船

50年代米国にて計画・研究されていた原子力推進宇宙船計画。核融合パルス推進、要するに核爆発のエネルギーで推進する。宇宙条約とか様々な理由で計画中止。本作では秘密裏に計画が継続されていた。速度は光速の5分の1。

### 第33話 「大艦巨砲主義の再興」

2019年4月25日。

カルトアルパスでの戦闘から、丸々1年が経過した頃。

アメリカが古の魔法帝国——ラヴァーナル帝国に対する警戒を強め始めていたが、このとき地球世界でも軍拡が進んでいた。

具体的にどのような軍拡が進んでいたかという点、この21世紀において地球各国が再び、大艦巨砲主義に走りつつあった。

大艦巨砲主義——それはデカイ軍艦にデカイ大砲を載せれば、それすなわち最強の軍艦であるという主義だ。

例えば7万トンの船体に46cm砲を載せた旧日本海軍の戦艦大和、武蔵がこれに当てはまる。

とはいえ20世紀も半ば、航空兵器が主戦力に置き換わりつつあった第二次世界大戦でこれは一気に廃れた。

現在は廃れた戦艦に代わって、空母や原子力潜水艦が大海を支配する時代となっている。

その廃れた戦艦と大艦巨砲主義が、再びこの現代に甦りつつあるのだ。

事の発端は米国が異世界進出米軍の戦力としてアイオワ級戦艦USSアイオワ、ミズーリを再就役させたことから始まる。

その後にはUSSアリゾナ、ニュージャージー、ウィスコンシン、マサチューセッツといったアイオワ級・サウスダコタ級の戦艦を4隻を米海軍は再就役させた。

さらにノースカロライナ級戦艦1隻も再就役可能な状態にまで置いている。

この21世紀における戦艦の復活をひどく警戒した国がいた。

中国である。

大陸国家でありながら現代において世界有数の近代海軍を有するに至ったこの国は、しかしながら近代海軍の誕生からまだ日が浅い。世界レベルの大型空母もつい最近に導入したばかりであり、当然のことながら、本格的な大型戦艦を運用していた経歴が一度もない。そんな彼らは太平洋戦争における日米の戦闘から戦艦の能力を大雑把には予測できても、詳細な戦艦の能力、そして運用性がどれ程なのかは完全に推測出来ない。

もし自分たちが米国と戦争になった際、最悪自分たちは戦艦と戦うことになるのでは？

そうなったとして、自分たちは戦艦相手に勝てるのか……？

戦艦を運用したことがない故に、米国における戦艦の復活に恐怖した中国は、とんでもない行動に出た。

21世紀に戦艦を新造したのだ。

2019年、中国海軍は国産大型空母「山東」<sup>サントン</sup>の就役に合わせ、国産かつ中国初の超弩級戦艦「北京」<sup>ベキン</sup>を進水させた。

「北京」は6万トンの船体に40・6センチ3連装主砲3基を搭載、また346B型多機能レーダーとVLS、CIWSなどの近代火器を搭載した汎用防空戦艦である。

設計は、ソ連崩壊時のドサクサに中国が入手したソヴィエツキー・ソユーズ級戦艦の設計図をベースに改設計して造り上げられた。

わずか3年、いくら中国といえどいったいどんな魔法を使えばこんな大型艦をこんな短期間で造り上げたのだ、と問いたくなる規模だ。ただその代償として、小型艦艇の建造計画の大半がキャンセルされたらしい。

もつとも、21世紀における戦艦の復活を受け、世界各国は大慌てとなった。

すでに6隻の戦艦を再就役させた米国ならいざ知らず、他の戦艦を持たない国は、この中国の戦艦を大きな脅威と捉えたのである。

その結果が、世界規模での大艦巨砲主義の再興である。

戦艦を建造するだけの余裕のある国は少なかったが、各国はその代わりとなる艦——例えば巡洋戦艦や砲撃艦、または戦艦に対抗するための艦艇を自国海軍に次々就役させた。

例えば、ドイツとフランスは155mm砲を載せた砲撃型フリゲート艦を就役させ始めたし、ロシアは旧式化しつつあるキーロフ級ミサイル巡洋戦艦の近代化を開始している。

イギリスの場合、戦艦の代わりに2隻のクイーン・エリザベス級空母の早期戦力化と能力向上を急がせた。

他の国々も戦艦に相当する戦力の拡充を始めていたが、一番無茶したのはインドである。

彼らは中国に対抗し、国産の戦艦「ヴィカラー」を新造し始めたのである。中国と少なからず対立関係にあるインドにとっては、このくらいの艦が必要なのだ。

もしかしたら長年の対抗相手であるパキスタンに対するための戦力なのかもしれないが、それは分からない。

また日本も、異世界にいるのであまり影響はないのだが、この機会にとムーからラ・カサミ級前弩級戦艦1隻をレンタル、米国からヘルクレス級戦艦1隻（グラ・バルカスからの鹵獲艦）を購入、現在それらを魔改造して十分使える代物にしようと努めてる。

本音を言えば改造より新造の方が安いし、こんなことをするのなら護衛艦を造った方がよろしいのだが、転移後に防衛予算は増額されていたし、それに何事も経験であるということで行われていた。

改造後はムー海軍に売り付け、試験運用するらしい。

もちろん、米国もこの大艦巨砲主義にのめり込んでいた。米国は去年の先進12カ国会議にて戦艦グレードアトラスターを鹵獲している。

7万トンの船体に46センチ砲を持つこの巨大戦艦は、BB-72

『USSモンタナ』の名称で米海軍に編入されていた。

運用にはグラ・バルカス帝国海軍が協力しており、多数の人員が帝国から派遣されていて——その代表はミレケネスが務めていた——、主砲である46センチ砲の砲身も定期的に米国が購入する契約を結んでいる。

そしてモンタナは現在、異世界からはるばる地球に曳航され、サン・デイエゴのドックにて大改造工事の真っ只中にあった。

今後、アニュンリール皇国やラヴァーナル帝国、さらに中国などの地球国家との衝突に備え、モンタナは近代化改装を行わされている。新造とは異なり、戦艦の船体と主砲（それも46センチ級）がすでにある。

それをベースに様々な案のもと——VLS×300セルを載せてアーセナル・シッフ化、イージス・システムを載せてイージス艦化、飛行甲板とF-35Bを載せて航空戦艦化、何をとち狂ったか強襲揚陸艦化など多数の改造案がある——どのように改造するか検討中だ。

モンタナ——もといグレードアトラスターが先に攻撃するのはアニュンリール皇国か、ラヴァーナル帝国か、それとも地球の国家なのか、それはまだ分からない。

### 第34話 「対アニウンリールの準備」

地球で大艦巨砲主義による軍拡競争が激しくなってきた頃。

米国は次の戦争相手をアニウンリール皇国として主眼を置き、これに対する戦争の準備を始めていた。

米国はあの後も、魔帝やアニウンリール皇国に関する調査活動を継続している。

具体的には、CIAやNSAの調査員らによる調査活動、外交官らによる各国からの情報の収集を行い、集めた情報を精査した。

他にも偵察衛星による宇宙空間からの観察、空軍のU-2偵察機による高高度からの皇国本土の偵察など、その内容は様々である。

その結果として、アニウンリール皇国に住む有翼人たちは、古の魔法帝国を作った光翼人の末裔であることが判明しており、アニウンリール皇国は魔法帝国——ラヴァーナル帝国の末裔であることも分かっている。

他にも、皇国は他国に対し自らが文明圏外国のように振る舞っている。

だが実際には文明の発展を他国に隠してるようで、皇国本土の発展具合が神聖ミリシアル帝国を凌駕していたり、国内に戦艦や空母らしき大型の近代艦艇が存在することも確認済みである。

他にも亜音速で飛行するジェット戦闘機のような存在や、ミリシアルも持ち合わせているような空中戦艦なる兵器らしき影なんかも確認されていた。

要するにある程度の文明レベルと戦力は把握しているのだ。

少なくともアニウンリールは、鬼人族たちの証言から、気分で核戦争を起こすようなヤバイ帝国——つまりラヴァーナル帝国の復活を支援していることは分かっている。

そんなヤバイ帝国が出て来てもらっては困る。

ヤバイ帝国はもちろん、その復活を支援する国も、米国は問答無

用で叩き潰すつもりだ。

しかもラヴアーナル帝国が考えているのはおそらく世界征服だ。となればそれを支援するアニウンリール皇国は手段を選ばない筈だから、解決手段は全面戦争しかないだろう。

だが厄介なことがいくつもある。

まず最初に、アニウンリール皇国の発展具合である。

アニウンリールはパーパルディア皇国のような近世文明でもなければ、グラ・バルカス帝国のようにWW2頃の文明でもない。

戦艦や空母の存在、都市の発展具合、さらに皇国への直接の偵察活動により、最低でも1950年代の地球国家並みの文明を持った国であると米国は判断している。

今までこの世界では文明レベルが極端に低い国家や存在ばかりを相手にしていたため、これは今までと異なり、中々苦戦しそうである。

もつとも、米国も地球ではイラクのようにあまり文明レベルの離れてない相手と戦争をした経験はあるので、負けるとは微塵も思っていない。

他にも厄介なことがある。人質を取られているのである。

アニウンリールに関する情報を米国にリークしてくれた、鬼人族の代表者バハーラ。

彼は情報提供の見返りに、あることを要求してきた。

それこそが、アニウンリール皇国がグラメウス大陸で活動していた際、鬼人族から人質としてさらっていった鬼人族の姫君——鬼姫である。

アニウンリールは彼女を実験動物として、また他国にアニウンリールの情報をばらさせないための抑止力としてさらっていったのだ。

バハーラら鬼人族にとって、自分たちの象徴的存在である鬼姫が帰還することは願ってもないことである。

それに米国としても鬼姫は実験動ぶ……もとい、様々な研究に使えるような力を有しているとのことであり、是非とも彼女は入手したい人材だ。

これらを考慮した結果、アニウンリール皇国とは全面戦争でケリをつける。

ただし鬼姫の所在を特定し、これを救出したあとに、ということでは決まった。

端から外交による交渉での解決など、米国は切り捨てていた。

これらが決まった米国は、急ぎ皇国に対する戦争の準備を開始した。

例えば、他国——もちろん惑星αこと異世界の国家である——との協議であったり、地球世界からの米軍戦力の持ち込みであったりする。

海軍は今回の作戦に、航空戦力として空母8隻と艦載機650機、水上戦力として戦艦5隻と戦略原潜2隻を含めた艦艇143隻を投入する予定である。

また、前回のグラ・バルカス帝国との戦争で出番のなかった空軍と陸軍もやる気満々だ。

空軍は異世界進出以降から生産を続けていた、新型機のB-52J、B-1Rを合わせた戦略爆撃機を合計100機近く持ち込んでいた。

戦闘機もF-22A、F-35のような高性能新鋭機からF-15E、F-16などの現行機、F-4、F-111など一度退役した旧式機まで全て投入する。

この他にもA-10、AC-130のような攻撃機、C-17、C-17M、MC-130Wなどの輸送機、KC-10、KC-135、KC-46などの空中給油機、EC-130、E-3Cなどの電子戦機まで多種類である。

空軍だけでも作戦参加機数は800機以上にのぼるが、これでもまだ戦力として足りてるかどうか分かってない。

なにせアニユンリールは空中戦艦なるものも保有しているのだ。

これがどれ程強いのか分からないが、全力で機を投入するに越したことはないだろう。

陸軍と海兵隊も同じようなものである。

彼らの大半を構成する陸上部隊は、グラメウス大陸派遣部隊から転用した米陸軍、米海兵隊の部隊である。

兵員数約15万、戦車約300輛を含む戦闘車輛約2,000輛と他車輛3,000輛、回転翼機（ヘリ）400機の大部隊だ。

その規模はかつてのパールディアにおけるそれを軽く上回る。

やり過ぎのような気もしなくもないが、とはいえ米国は昔から相手の戦力を見誤ることに定評があるのだし仕方ない。

例えば太平洋戦争の初期は日本の戦力に対して過小評価をしていたし、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アナコンダ作戦のときも、常に相手のことを読み間違えてきた。

今回の場合もそうであり、米国はアニユンリールに対して過小評価——ではなく、過大評価をしていた。

米国がそのことに気づいたのは、アニユンリール皇国の土地が地獄と化してからのことだった。

### 第35話 「開戦前夜」

2020年4月5日。

万全を期すために長い時間の与えられた、米国による対アニユンリール戦争の準備は、最終段階に入りつつあった。

3月29日、米国大統領により対アニユンリール侵攻が許可され、米軍は行動を開始した。作戦開始期日は東部標準時4月21日夜――中央暦1644年4月20日早朝と決定されている。

当然ながら、作戦に参加する米軍の戦力は圧倒的である。すでにアニユンリール皇国近海には米原子力空母 USSカール・ヴィンソンを含む8隻の空母を主力とした143隻の艦隊が展開し、アニユンリールを包囲しつつある。

米陸軍および米海兵隊の約15万人、空軍および海軍の航空機1,400機もロデニウス大陸やアルタラス王国の基地に展開を完了している。さらにこれを支えるための兵力輸送・兵站に関する準備も徹底され、不安要素はほとんど打ち消されている。

圧倒的な戦力、強大な兵力、山積みされた弾薬、尽きることのない燃料、完璧に用意された兵站物資と輸送手段。ああ、素晴らしい――と米大統領すら感嘆してしまうほどの準備態勢が完了していた。

無論、米国の動きに少なからず気付いていたアニユンリールが、これを無視する筈もなかった。

本来、領内の魔石不足で装備・兵員のかなりの部分を日常的に稼働させることのできないアニユンリールだが、その時は事情が違った。魔石不足を解消するべく東征を準備していた彼らは、数カ月前から国外侵攻のために物資を集積し、軍を動員していたからである。

そしてその際、近海の哨戒活動を行っていた哨戒機が、アニユンリール近海を包囲する艦隊の反応を探知した。明らかに自分たちと戦争するつもり艦隊である。これを受けて皇国軍上層部と皇国政

府首脳部が大混乱に陥ったのは、言うまでもない。

これがどこの国の艦隊なのか、というのはサツパリ分からなかったが、明らかにこの国へ侵攻しようとしているのは明白だったため、東征の準備のために稼働状態にあった皇国海軍の艦隊は急ぎ出動した。

ジェット機搭載の空母、誘導魔光弾を搭載する魔導戦艦や魔導巡洋艦、小型艦、さらに潜水艦や海上要塞。バルカオンまで、稼働できる艦はすべて投入している。

空軍の保有する『天の浮舟』——ジェット戦闘機や攻撃機の類いも、稼働する機体はすべて武装を施し地上で待機状態に入った。

皇国は魔石不足にあるとはいっても、少ない採掘量からコツコツ溜めてきた魔石の備蓄は大量にあつたため、軍隊が全力で行動しても（将来的に備蓄不足に陥ることを除いて）1回くらいなら問題はない。

さて、両軍は互いに互いを視認できない程の距離にいたのだが、すでに2つの国の艦隊は、両者ともに相手を対艦ミサイルと対艦誘導魔光弾の射程へと引きずり込んでいた。

両者の緊張状態が高まるなか、1隻の軍艦が低速で、アニユンリールの外交窓口であるブシュパカ・ラタンに襲来した。ブシュパカ・ラタンに襲来した軍艦から降りてきたのは、米国の外交官を名乗る使節だった。

アニユンリール皇国でも米国に関する噂は聞いていた。列強パーパルディアを一晩で叩き潰し、魔物大陸ごとグラメウス大陸を解放、さらに全世界に宣戦布告したグラ・バルカス帝国を瞬時に降伏させた国だからである。

「貴国が保有するすべての魔帝に関する情報の提供、および鬼姫の解放を要求する」

米国の外交官はブシュパカ・ラタンに到着するなり、皇国の大使に開口一番で要求する——アニユンリールが魔帝の末裔であるという証拠と、魔帝復活の支援をしているという証拠を添えて。

鬼人族の証言、グラメウス大陸にて回収された皇国工作員の書類、

ビーコンに関する情報、偵察機の撮影した本土の空撮写真などなど、できる限りの証拠を米外交官は突きつけた。

(この時点で米国は僕の星が魔帝製かつビーコンの役割を果たしていることは確認していない)

皇国大使は自国の正体が完全にバレていることに愕然としつつも、最後まで否定を続けるしかない。だが最後に、米国外交官は一枚の文書突きつけ、屹然とした態度でこう告げてから立ち去っていった。「もし我々の要求を呑めないのであれば、2週間後、我々は貴国への侵攻を開始する。要求を呑む覚悟ができたのであれば、魔信で我々にご連絡を。では、これにて」

最初の外交なのに、事実上の最後通牒である。話がトントン拍子で悪い方向に進んでいったことに、皇国外交大使は泡を吹いて卒倒してしまった。だが、この米国の要求は上へ上へと届けられ、ついにアニュンリール皇国の皇帝ザラストラのもとへも届けられた。

「ただちに戦時態勢へと移行し、すべての皇国軍を戦闘配置に就かせよ」

米国に関する噂は皇帝ザラストラも聞き及んでいた。だがアニュンリールは誇り高きラヴアーナル帝国の末裔であり、戦わずして屈服などしない、というプライドから要求を蹴った。

皇国にとって近代文明国との戦争は今回が始めてだが、そもそも皇国は強大である、という意識があり、ザラストラは我が国が負ける筈がないとも思っている。

確かにアニュンリール皇国はこの世界の国家としては国力もあり、空中戦艦パルキマイラや海上要塞パルカオンなどの魔帝製超兵器の存在も考慮すれば、軍事力もたしかに強い。

今回の戦争では相手国たる米国の所在が不明である。積極的に攻勢をすれば相手の罠にかかる可能性もあるため、防戦のち態勢を整え、米国の所在を把握したのち攻勢を開始することでア皇軍部では決まっていた。

しかし、皇国はパルキマイラやパルカオンを再生産する事は可能だが、それらは高コストだし、なにより能力を最大限に引き出して運用

する事は出来ない。

魔力量の凄まじい魔帝人——光翼人は、乗員自らを燃料としていたため、魔帝製兵器の能力を最大限に引き出すには乗員の魔力量が影響する。だが度重なる混血により魔力量が薄れたアニウンリール皇国人——有翼人には、それは不可能なことである。

そのため、有翼人は魔帝製兵器の燃料に魔石を使用してるが、その性能はオリジナルの70パーセントが限界だ。

魔帝製の兵器のみならず、制空型天の浮舟——ジェット戦闘機も微妙だ。最高時速500km程度のミリシアルのそれよりはマシで、アニウンリール皇国の戦闘機はマッハ1.5の超音速飛行が可能である。

だが、それでもこちらは魔帝オリジナルを再生産できたわけではなく、劣化コピーの第2世代ジェット戦闘機——地球で言えば60年以上前の旧式戦闘機くらいの性能しかない。米軍の第4、第5世代戦闘機と戦えば喜劇にしかならないだろう。

アニウンリール皇国はこれを2,000機以上所有してるため数では勝る。だが、数ではカバー仕切れない質の差が、両者には存在した。

もちろん、そんなことを皇帝ザラトストラはじめ、アニウンリール皇国の人間は知る由もない。皇国は米国の要求は吞まず、鬼姫の解放も行わなかった。代わりに皇国軍は「攻撃されたらやり返す」ことを前提に完全に展開を終わらせ、攻撃に備えた哨戒網の強化も行った。

だからこそ4月19日夜、米軍がその哨戒網をくぐり抜けて鬼姫を救出したことに、皇国上層部はおおいに混乱する事となった。

航空偵察と鬼人族の証言をもとに鬼姫の監禁場所を特定した米軍は、鬼姫の救出作戦を実行した。

救出部隊を務める米海軍特殊部隊ネイビー・シールズは、原子力潜水艦に乗って皇国の哨戒網をくぐり抜け、そのままボートで皇国に上陸。

鬼姫の監禁場所である沿岸の施設——先進生物研究所を彼らは襲撃し、15分もせず鬼姫を救出して立ち去っていった。

この救出成功から7時間後の4月20日 午前6時、米軍による対アニウンリール侵攻作戦

——作戦名『異界の夜明け——Dawn in a Different World』が始まった。

## 第五章 皇国への侵攻 第36話 「開戦」

中央暦1644年4月20日 早朝――。

「作戦開始、作戦開始」

司令部からの号令一下に発動された、米軍による対アニウンリール皇国侵攻作戦『異界の夜明け』にて、まず最初にアニウンリール皇国へと襲来したのは空軍だった。

皇国近辺の空域に空中待機した戦略爆撃機100機、攻撃機150機、戦闘爆撃機100機、戦闘機200機のうち、皇国軍防空網の制圧を主任務とする第1波攻撃隊が、作戦開始の号令と共に皇国へと侵入した。

その主力を務めるのは超音速ステルス戦略爆撃機B―1B、B―1R、敵対空火器制圧用の空対地ミサイルと制空権制圧用の中距離空対空ミサイルを搭載したステルス戦闘機F―35A、F―22Aからなる、合計80機の超音速ステルス攻撃隊である。

B―1B、B―1Rの群れはレーダーによる探知を避けるため超低空から、F―22A、F―35Aの群れは囷となるために超高空から、各々がステルス性を失わない程度の持てる武装を施し、両者ともにマッハ1.1の超音速飛行でアニウンリールの防空網へと突入した。

――

アニウンリール皇国軍の保有する魔導電磁レーダーの性能は現代地球におけるレーダーと比較するとたいした性能ではなかった。

「レーダーに反応！ 距離……おい嘘だろ！」

だがそれでも、各地にあるレーダー基地は、設置されてる魔導電磁レーダーにより米軍機の反応を捉えた。いくらレーダーが優れておらず、敵がステルス機であろうと、80機以上の航空機の襲来ともな

ると、少なくない電波の反射で敵機の接近を感知することが出来た。「なんでもう防空網の内側にいるんだよ?」

しかしステルス機の探知は困難を極めるため、レーダーが米軍機の群れを捉えた時点で、米軍機は皇国軍防空網の内側に侵入していた。しかも幾つかの基地では、すでに米軍機が目と鼻の先にまで接近しており、攻撃される寸前であった。

「敵機、誘導魔光弾を発射! こっちに来ます!」

「待避——待——」

そして防空網制圧を目的とする米軍機の獲物は、もちろん皇国軍のレーダーであった。侵攻前に行われたU—2偵察機の航空偵察により、皇国軍のレーダー基地・空軍基地の位置は完全に把握されていた。皇国各地のレーダー基地を目標につけたF—35Aは、手当たり次第にレーダーや対空兵器に対して対レーダーミサイルをぶちこんだ。

「哨戒中の戦闘機は遅滞戦闘に向かえ! 各空軍基地の稼働機は急ぎ離陸、迎撃を開始せよ!」

各地のレーダー基地が次々と沈黙していくことを受け、皇国空軍防空司令部は急ぎ迎撃命令を出した。命令は上空に展開した空中管制機を経由して各空軍基地に届けられる。

スクランブル命令を受けて、エンジン推力全開で、各空軍基地の滑走路から天の浮舟——皇国空軍の主力戦闘機ラフシーズが列をなして次々と蒼空に上がっていく。

地球における第2世代ジェット戦闘機に相当するラフシーズは、僅か10分にして200機以上が各基地から離陸し、レーダーが破壊された地域へと急行した。全機は射程40kmの空対空誘導魔光弾を満載しており、またパイロットの士気も初の本格的戦争ということもあり高かった。

そして——あつという間に彼らは撃墜された。

敵機がいるであろう空域に急行したラフシーズ戦闘機隊は、ステルス機なため米軍機をレーダーで捉えられなかった。それどころか、F—22AとF—35Aが放った、誘導魔光弾の射程を大幅に凌駕する一

方的な遠距離——100km近い遠距離からの中距離空対空ミサイルAMRAMによるアウトレンジ攻撃で一方的に殲滅されたからだった。

仮に米軍機に急接近できたラフシーズがあつたとしても、1:10近くに相当する圧倒的キルレシオを誇るF-22A戦闘機とドッグファイトして勝てるはずもなく、あつさりと墜とされていく。

数分にして100機以上のラフシーズが殲滅されたが、皇国空軍防空司令部は次々と迎撃機の追加を行った。

ラフシーズのみならず、各地に存在する対空魔光砲や地対空誘導魔光弾の発射機(SAM)もF-35AとF-22Aの空対地ミサイルによつて次々と狩られており、さらにECM(電子妨害)を米軍が開始したことで皇国軍は無線・レーダーが使えなくなり、防空能力の減衰は著しい。

だがそれでも迎撃機を上げさせ続けた甲斐があり、総計して300機近くの迎撃機が上空にあつた。だがそのころには内陸のものを残すレーダー基地はすべて破壊されていたし、さらに各地の空軍基地に爆装したB-1B、B-1Rの群れが来襲し始めていた。

低空から超音速/亜音速で飛翔し現れたB-1B、B-1Rに対し、対空砲火を試みる対空魔光砲や地対空誘導魔光弾はなかった。すでに防空網制圧のためのF-22A、F-35Aがそれらを空対地ミサイルで叩き潰していたからだ。

B-1B、B-1Rは目標である敵空軍基地の滑走路・管制塔・格納庫・燃料タンクなどの施設に対し、2000ポンドJDAM爆弾を大量投下する。高速による一航過で数十発が投下され、それらはGPSで正確に誘導された。

飛来。

着弾。

炸裂。

閃光。

熱波。

衝撃。

爆音。

爆風。

瞬く間に様々な要素に襲われた施設には多大なる負荷がかかって倒壊、さらにパイロットなどの人員、燃料・弾薬などの物資、ラフシイズなどの機体、すべてまとめて吹き飛ばされていく。

正確な誘導により基地外への着弾はゼロだったが、基地内への着弾は多数であった。基地の被った損害は、もはやその施設が使い物にならなくなるには十分すぎるものだった。

わずか数十分のうちに先述のような事が各地で繰り広げられ、アニュンリール皇国内にある多数のレーダー基地、複数の空軍基地が沈黙し、皇国軍防空網はズタズタとなっていた。

防空網制圧から30分後。

今度はB-52爆撃機を始めとする空軍の戦闘機、攻撃機、戦闘爆撃機からなる軍用機約600機、加えて洋上の各空母から飛び立った海軍機約200機、合計約800機による大編隊がアニュンリール皇国を目指していた。

アニュンリール皇国内の軍事施設、さらに生産施設や港湾施設などを制圧すべくフル爆装した彼らは、アニュンリール皇国を地獄へと変えるべく進軍する。

### 第37話 「アニウンリール大空襲」

米軍ステルス攻撃隊による皇国空軍基地・レーダー基地への空爆から1時間後、米空軍・米海軍混成の戦略爆撃機・戦闘爆撃機ほか軍用機の大群からなる爆撃隊の群れは皇国内の各軍事施設の制圧を目的に飛来した。

作戦戦力は以下ようになる。

今回の作戦参加戦力は、基本的にパーパルディア大空襲のときと同じである。大量の爆弾で広域の制圧を目的とする戦略爆撃機、誘導兵器を載せ精密爆撃を行う攻撃機および戦闘爆撃機、そしてそれらを護衛する戦闘機だ。

その数は空軍・海軍あわせて総計して800機であり、パーパルディアのときの2倍だ。

爆撃機 B-52、B-1B、B-1Rには2000ポンド爆弾、BLU-121サーモバリック爆弾などの大型爆弾が搭載量ぎりぎりの重さにまで載せられたほか、数発の大規模爆風爆弾兵器——MOAB——を載せたMC-130W特殊輸送機も出撃している。

他にも空飛ぶ戦車ことA-10攻撃機、空飛ぶトーチカことAC-130ガンシップなどの攻撃機も載せられるだけの弾薬を載せ、重武装を施してアニウンリール各地に向けて飛来していた。

そして護衛および主力を務める戦闘機・戦闘攻撃機・戦闘爆撃機も、先の空襲から引き続き参加するF-22A、F-35Aを含め、F-16、F-15、F-15E、F-4、F-111まで何でもかんでも飛ばされている。

通常爆弾、小直径爆弾、地中貫通爆弾、サーモバリック爆弾、クラスタ爆弾、ペイブウエイ、バンカーバスター、JDAM、JSOW、デュランダル、マーベリックミサイル、JSM、LRASM。

各航空機に搭載された、ありとあらゆる航空兵装は皇国各地へ次々と投下され、そしてそれらの地域に破壊を広げた。

皇国の防空網がズタズタにされまくったことを受け、皇国空軍防空司令部は戦闘機ラフシーズほか全ての空軍機を、まだ破壊されていないブランシエル大陸内陸の空軍基地へ撤退させることを決定した。

残された空軍機を内陸へと撤退、皇都マギカレギア含む内陸部の主要都市の周辺にそれらを集中させることで、主要都市周辺の制空権だけでも維持しようという算段であった。

実際、沿岸部の空軍基地・レーダー基地はすべて叩き潰されていたが、それらが叩き潰される直前に離陸に成功し、さらに米軍機の要撃も受けなかった空軍機はかなりの数におよんでいた。

ブランシエル大陸には撤退した戦闘機ラフシーズ200機がスクランブル待機を行い、空中魔探警戒機（AWACS）4機が空中哨戒態勢と迎撃網を設置し、他の空軍機も周囲の飛行場へと移動させられている。

そして米軍はこの防空網を完全に無力化することも含め、皇都などの都市を叩き潰すために大規模な航空戦力を向かわせていた。

「——ッ！　これは!!」

皇都マギカレギア周辺に展開するシエズナ型AWACS——魔導電磁レーダーを搭載した早期警戒機——に搭乗する管制官が驚愕の声を上げる。敵機の大群をレーダーが捉えたからだ。

先ほどの米軍の空爆はレーダーに映らないという一方的なズルをしてきたが、逆に今度は堂々と、しかもとんでもない大群を送り込んできたようである。

「至急！至急！　敵大編隊が皇都に接近中！　迎撃機は直ちに離陸し、これを迎撃されたし！」

シエズナの管制官は皇都周辺の各空軍基地へと指示を飛ばす。また命令は陸軍にも伝わり、周辺の陸軍基地では高射砲兵が対空魔光砲やSAMの射撃準備を開始していた。

そして各空軍基地からは、迎撃機たる戦闘機ラフシーズが緊急発進の準備を整え、管制塔から離陸許可を得たのち、最大推力で滑走路から飛び立とうとした

——瞬間、ラフシーズが滑走路ごと爆散した。

ラフシーズだけではない。空軍基地にある他のあらゆる物も吹き飛ばされていく。つまるところ、迎撃機が発進する前に、米軍の攻撃が成功してしまったのだ。

基地より数百キロ離れた空域から米軍のF-35やF-15Eより投下されたJSOW-ER滑空誘導爆弾が、ラフシーズが離陸しようとした段階で基地に着弾、離陸途中のラフシーズを吹き飛ばしたのである。

着弾したJSOW-ER滑空誘導爆弾はクラスター爆弾の子弹を撒き散らし、皇国の空軍基地の滑走路・格納庫・管制塔ほかあらゆる施設を爆発で一瞬にして叩き潰してしまった。

JSOW-ERの空軍基地への着弾により、基地に待避していた多数の空軍機は吹き飛ばされ、この時点で皇国が米軍の空爆を防ぐ手段はなけなしの対空砲火を除き、もはや残されていない。

皇国内へと侵攻した米軍機約800機の大群は部隊ごとに分かれ、アニュンリール皇国各地の陸軍基地、海軍基地、残存していた空軍基地、リーダー基地といった軍事施設へと襲いかかった。

物騒な航空兵装を抱えたF-22、F-15E、F-16、F-4など戦闘機の群れは皇国軍事施設の上空に飛来するや否や、それら航空兵装を次々に投下した。パイブウェイやJDAMなどの誘導爆弾が次々に投下される。

誘導爆弾の直撃を受けた基地施設は吹き飛び、周辺に置かれたあらゆる施設や人員すらも、衝撃波や爆風に巻き込まれて蹴散らされる。

さらにA-10が30mm口径のアヴェンジャー機関砲からモーター音を唸らせ、毎分3,900発の連射速度で30mm機関砲弾をバラ蒔き、要塞化された陣地を片っ端から粉碎していく。

逃げようとする皇国陸軍の車輛にはAC-130ガンシップが空から105mm砲、40mm機関砲、25mm機関砲により大量の砲弾を撃ち込み、それでも逃げようものならA-10から放たれるマーベリック空対地ミサイルが襲来する。

他にも便器、バスタブ、キッチンシンクに信管と炸薬をしこたま詰めこんだものまで落としていく、といういつか見られた光景もあった。どうにも米軍は、こういうおふぎげが楽しくて楽しくて仕方ないらしい。

またMOABも使用されていたが、それすらも凌ぎ特に猛威を振るったのが、B-52やB-1爆撃機から投下されたBLU-121サーモバリック爆弾だった。

核兵器に次ぐ威力を持つとされるサーモバリック爆弾は、主に皇国内の要塞型の基地へと投下されていた。しかしあまりの威力にキノコ雲が立ち上ぼり、要塞だろうが何だろうが木っ端微塵にしてしまったのである。

あまりの威力に使い勝手はかなり悪いが、むしろ都市への戦略爆撃などであれば、少数機でもかなりの戦果を生み出すことが出来そうである。そして都市への戦略爆撃など経験したことがないであろう皇国への効果は高そうだ。

少なくとも今回の戦果はいくつかの兵器の実地使用によるテストが行えたこと、そして皇国軍軍事施設の大半を叩き潰すことに成功したことだ。

先述のような戦闘機による誘導爆弾の大量投下や、攻撃機による地上掃射、爆撃機によるサーモバリック爆弾はじめ大型爆弾の多数使用により、ブランチエル大陸内にある皇国軍の軍事施設はそのほとんどが叩き潰された。

都市部への被害はかなり抑えられたが、それでも皇国が負ったダメージは計り知れない。

皇国は米軍の侵攻開始からわずか数時間で大打撃を被ることとなった。皇国陸軍の一部や、洋上の皇国海軍はまだ無事だったが、彼らとてそう長くは持ちそうになかった。

4月20日の夕刻――。

皇国近海で遊弋していたはずの米海軍空母艦隊の艦艇が集結し、艦隊決戦でも挑もうと言うのか、アニュンリール皇国へと一直線に舵を切り最大戦速で突っ込んできたからである。

皇国海軍もまたこれへの対抗のため、海上要塞。パルカオンも含めた艦隊を集結し、艦隊決戦を挑む運びとなってしまうた。

### 第38話 「大陸沖大海戦①」

4月20日 夕刻

ブランシエル大陸が夜を迎えようとしていたとき、アニユンリール皇国海軍は稼働しているすべての艦艇を出撃させ、ブランシエル大陸へと接近している米海軍空母艦隊へと艦隊決戦を挑もうとしていた。

米海軍の目的はおそらく制海権の確保、または皇国海軍の殲滅。皇国海軍はこれを残存する戦力をぶつけて対処する。

皇国艦隊の陣容は空母11隻、魔導戦艦8隻、魔導巡洋艦20隻、駆逐艦及びフリゲート35隻、潜水艦21隻、海上要塞パルカオン8隻。

皇国海軍の艦艇は全艦が誘導魔光弾、およびVLSを搭載しており、射程40kmの長SAM、射程180kmの対艦誘導魔光弾を搭載している。レーダー等はフェイズドアレイレーダー式だが、光翼人の運用を前提とするそれは出力不足で大した探知能力を持たない。

また艦船のほかにも、これに艦載型のラフシーズ戦闘機が約400機とランバート攻撃機が約100機、その他の海軍機約200機に、何とか無事で航空支援に参加できた空軍機120機の合計約800機が戦力となる。

本来なら皇国海軍はこれの倍の規模を誇るのだが、ここにいない艦艇はすべて港湾停泊中のところを米空軍の徹底的な空爆により、港湾施設ごと無力化されていた。

米空軍の空襲部隊は、洋上の皇軍艦艇に対する攻撃は行わなかった。皇国陸上施設への攻撃に専念したのと、無闇に攻撃して下手に損害を受けないようにするためである。

だがそれでも艦艇数は約100隻、艦載機は800機もいるし、それに何より切り札的存在の海上要塞パルカオンも12隻中8隻が出撃している。

海上要塞パルカオンは俗に言う超兵器であり、単艦で敵国艦隊——皇国の場合は主にミリシアル艦隊を殲滅することを目的に作られた、全長400mの巨大戦艦だ。

武装はパルキマイラと同じアトラタテス砲や150mm3連装魔導砲、各種の誘導魔光弾とそれを運用するVLS、さらに航空戦艦よろしく全通甲板に艦載機まで搭載する。

本来のパルカオンは対空レーザー砲や対艦用のレールガンも搭載していたが、これらは使用に膨大な魔力を必要とするため、皇国軍では運用不能だった。

それでも皇国海軍は強大であるという自信があった。なにせ自分たちはかの魔帝の子孫であるから——そんな裏表のない根拠が、彼ら皇国海軍に自信を与えていた。

しかし易々と皇国空軍の防空網が突破された挙げ句、1時間もせず皇国内の各種軍事施設はすべて無力化され、皇国海軍司令部すら音信不通だ。

彼ら皇軍艦隊に、皇国海軍司令部は空爆で指揮機能を喪失する寸前に命令を発していた。

——死守せよ。

これだけだった。

まだ開戦から一日も経っていないのに、皇国は末期戦に突入しつつあった。

これに対する米艦隊は8個の空母打撃群を皇国近海で集結させていた。

この8個の空母打撃群は空母 USSカール・ヴィンソンが率いるのを除き、すべてがエンタープライズ級、キティホーク級、フォレストアル級などの旧式改造空母を旗艦に据える新編艦隊である。

合計の戦力は空母8隻、戦艦5隻、巡洋艦16隻、駆逐艦40隻、沿海域戦闘艦14隻、攻撃型原潜16隻、戦術ミサイル原潜2隻、この他に揚陸艦、補給艦などが後方海域に45隻ほど。

艦載機はF/A-18F、F-35C、F-14Fなど最新鋭の艦載戦闘機160機、モスボール機を復活させたA-4、A-6、F-4など旧式改造機240機、EA-18G、E-2Dなど電子戦機80機、MH-60、V-22など回転翼機160機。

戦闘艦の数、艦載機数は皇国海軍、米海軍ともにほぼ同等であるが、この現代において艦船200隻と艦載機総計1000機がぶつかりあった海戦など存在しない。

そのためこの際に発生した『大陸沖大海戦』は、現代史上最大規模の大海戦と化した。

両艦隊は相手を艦対艦ミサイルの射程圏内に引き摺り込んでいたが、戦闘はまず航空戦から始まった。ミサイルを比較的近距离で発射し、ミサイルの集中攻撃による効果を高めるためである。

また万全を期して空海両面からの飽和攻撃を施行すべく、両者ともに戦闘機を出して制空権を確保しようとしたのも、その一因である。

米空母8隻から次々にF-35C、F-35B、F-14F、F/A-18F、さらにF-4やA-6までもが飛び立つ。その数300機。米空軍機は補給・整備のためにすべて帰還しており、空軍機による航空支援は望めない。

対する皇軍空母からはラフシーズ戦闘機、対艦誘導魔光弾を満載のランバート攻撃機が飛び立つ。それを援護する空軍機のラフシーズと、ラタプラセ爆撃機。その数600機。

両者ともに保有機の半数以上、投入できる最大数の艦載機を飛ばす。全力投入である。数で2倍以上に勝る皇国軍機だが、先の米軍による空襲においては空軍機が圧倒的遠距離から一方的に中距離AAで攻撃されている。

そのためまともな戦闘にはなりそうもないことから、皇国軍は敵戦闘機に対し、リーダーに見つかからないよう超低空を速力最大で急接近、ドッグファイトを仕掛けようとした。

マツハ1.5で皇国軍戦闘機ラフシーズが、マツハ1.1で米海軍戦闘機F-35、F-14F、マツハ0.9でF/A-18が真正面からぶつかり合った。

が、空戦の結果は先の空襲と同じく、あえなく皇国軍機の惨敗。そもそもステルスと電波妨害を受けて皇軍機は敵戦闘機的位置を

把握できなかつたし、接近中にAIM-120中距離対空ミサイル——各機合計で1200発もあつた——を撃ち込まれては、接近すらままならない。

とはいえ急接近によるドッグファイトを狙つたのは効果があつたようで、中距離AAMで全滅する前に40機弱のラフシーズが米軍機とのドッグファイトに突入することに成功した。

しかし、結果はまたも皇国軍機の惨敗。

低中速での機動性でかなり優れるF/A-18、HMDで後ろにすらミサイルを照準できるF-35とF-14F、そして50Gの高機動も発揮できるAIM-9短距離AAMを載せる米軍機に対して、ドッグファイトでも勝てるはずがなかつたからだ。

結局、皇国軍の戦闘機ラフシーズ 300機は、今回の空戦でもまたも惨敗することとなつてしまった。

ラフシーズが殲滅されると、今度は対艦攻撃のために対艦誘導魔光弾を搭載した皇国軍の攻撃機、爆撃機に対する攻撃が始まつた。

護衛機を失つた攻撃機ランバート、爆撃機ラタプラセには対抗手段がなく、米軍機にとつてはいいカモである。瞬く間に米軍機のAAMを喰らつた6割の機体が火を噴き、海面へと転針していく。

しかしどんな存在であれ、己の死期を悟つた生物というのは最後まで足掻こうとするものである。攻撃機ランバート、爆撃機ラタプラセの編隊は、最後の足掻きを見せた。

全滅させられるくらいなら、と搭載していた対艦誘導魔光弾を艦隊よりも先に米艦隊へと一齐に発射したのである。

制空権が確保されていない状態での対艦誘導魔光弾発射、さらにこれを受け、皇国艦隊までもが半ば引き摺られる形で対艦誘導魔光弾による飽和攻撃を開始してしまった。

米海軍艦隊の水上艦艇95隻に対して行われた飽和攻撃で、皇国艦隊の発射した対艦誘導魔光弾——対艦ミサイルは距離150kmの地点で、驚異の712発に到達した。

うち1割以上が動作不良で飛翔中に海面へと叩きつけられたが、それでも605発もの対艦ミサイルが依然として飛来していた。

人類の歴史上、おそらく経験したことがないほどの対艦ミサイルの雨あられ。E-2Dホークアイが居たから良いものの、あまりの多さに、イージス艦の追跡上限可能数すら軽く上回っている。

米海軍にとって幸運だったのは、皇国軍の対艦ミサイルはレーダーによる探知を避けるようには作られておらず、低空ではなく高空を飛翔しており、またマツハ0.9と比較的低速であることだった。

さらに上空にはAAM満載の最新戦闘機120機が展開し、洋上にも対艦ミサイルによる攻撃に対処すべく造られたイージス艦が50隻以上も展開している。ミサイルを迎撃する上で、これほどまでに条件が整ってるのだ。

それでも対艦ミサイルが艦隊に到達するまでの所要時間はミサイルの加速を考慮しても4分程度しか残されていない。

米海軍にとって、そして人類の有史上にとって、一度も行われたことのない600発以上の対艦ミサイルの同時迎撃。

それがいま、夜を迎えようとしているこの洋上で行われようとしていた。

### 第39話 「大陸沖大海戦②」

皇国艦隊が対艦誘導魔光弾——対艦ミサイルによる飽和攻撃を開始してきたと同時に、米艦隊はイージス艦、および防空警戒のE—2Dホークアイのレーダーでそれを捉えていた。

速度はマッハ0.9、発射弾数は605発。

2,000個以上の目標を同時に追跡可能なAN/APY—9レーダーを持つE—2Dホークアイが防空警戒をしていたからこそ、全てのミサイルを捉えることが出来ていた。

迎撃はすぐに始まった。

警報が発令され、直ちに全兵装使用自由——オール・ウエポンズ・フリーが発令される。

タイコンデロガ級巡洋艦、アーレイ・バーク級駆逐艦、ズムウォルト級駆逐艦の合計56隻の米イージス艦が目標を捕捉し、各々が迎撃すべき獲物を割り当てる。

データリンクにより照準が重複しないよう目標を割り振られたイージス艦はVLSを開放、夜を迎えようとしている暗色の空へ次々にスタンダードSM—6艦対空ミサイルを発射した。

1秒に1発のペースでSM—6が白煙と炎を盛大に噴き上げつつ、VLSから急速に蒼空へと舞い上がっていく。あらゆるイージス艦から発射されたそれらは、目標に向けてマッハ3の高速で飛翔していく。

数十秒後、撃ち上げられたSM—6の第1波は、次々に近接信管を作動させ、爆発に敵ミサイルを巻き込む形で叩き落とした。次から次へと夜空に爆発が起き、洋上の夜空にいくつもの閃光が巻き上がる様は、迎撃地点から離れた米艦隊からも確認できた。

正直なところ、米海軍将兵らはこの対艦ミサイルの飽和攻撃を乗り切ることが出来るか否か不安であった。なにせ米海軍は飽和攻撃を

想定した迎撃訓練はしていても、実際にそれを受けた事がないからだ。

さらに言えば、その飽和攻撃の想定はどんなに多くても200発程度が限度、しかしこの時やって来たのは3倍の600発以上という大群であった。いくら艦隊にイージス艦が多くとも、不安は不安である。

だが迎撃そのものは上手く進んでいた。艦隊とミサイルの距離が50kmを切った時点で、ミサイルの半数以上は打ち落とされていた。

それでも爆発は段々と米艦隊の方向へ近づいていたが、さらに爆発が艦隊へ近づくと、米艦隊に含まれるアイオワ級戦艦 USSミズーリが対空レーザー砲 SACOILを照射し、迎撃を開始する。

他のイージス艦からのデータリンクを受けて照準を行うそれは、薙ぎ払うとはいかずとも連続してミサイルを叩き落としていくため、今回の迎撃戦闘において絶大な威力を誇った。

他にも制空権確保に動いていたF-35B/C、F/A-18F、F-14Fなどの戦闘機群も、皇国軍の対艦攻撃機に対する迎撃を中断、AMRAAM中距離AAMでミサイル迎撃に動いていく。

それでもミサイルが艦隊へ近づくと、今度は各艦の主砲たる単装速射砲が火を噴きはじめる。

ミズーリ以外の戦艦4隻もその戦闘に参加し、副砲兼両用砲の127mm砲（改装時にMk45に換装済み）を発射する。

SM-6、ESSM、AMRAAM、砲弾、対艦誘導魔光弾、戦闘機、攻撃機、爆撃機、レーザー、爆発、破片、衝撃波、ありとあらゆる物が入り乱れるこの夜の空で、延々と繰り返られる必死の防空戦。

暗い空が爆発に照らされる。

ミサイルの来襲、接近、発射が止むことはなく、永遠の時が流れていたかのようだった——だがそれも、30秒以内に完全な決着が付いていた。

その瞬間、レーダー・スクリーン上で、すべての敵ミサイルを表す

輝点が消失した。

その瞬間すべての米艦艇の艦橋で、CICで、甲板で、あるいは艦内厨房で、米海軍水兵らは歓声を上げた。世界最大規模となる対艦ミサイルの飽和攻撃を、ただ一隻の被弾艦も負傷者も出すことなく、完璧に成功させたからだ。

「さあ諸君、反撃の時間だ。痛いのをブツ喰らわせてやろうじゃあないか」

迎撃を成功させた米艦隊はお返しとばかりに反撃の準備を開始する。1分後、全艦の対艦ミサイルの発射準備が完了。その報告を受けて、艦隊司令はただ一言、力強く命じた。

「ファイア  
撃て」

瞬間、艦隊各艦のミサイル・ランチャーが煙と炎を噴き上げつつ、一斉にミサイルを射出した。

米艦隊の水上戦闘艦艇から、ありとあらゆる対艦ミサイルが飛び出した。

ハーブーン対艦ミサイルの他にも、VLSからの発射が可能なLRASM対艦ミサイル、小型艦搭載のNSM巡航ミサイルなどなど。

タイコンデロガ級巡洋艦、アーレイバーク級駆逐艦、ズムウォルト級駆逐艦、インディペンデンス級LCS、フリーダム級LCS、改タラワ級ロケット砲艦、対艦ミサイル攻撃が可能なあらゆる艦艇から、それらが飛び出していった。

恐ろしいまでの数の対艦ミサイル、白い尾をひき飛翔するそれらは、夜空でエンジンを微かに光らせつつ、亜音速で飛翔していく。

そしてそのような対艦ミサイルの射出に伴う光景は、途切れることなく連続して行われる。

特に猛烈な射撃を行っていたのは、グラメウス大陸侵攻の際にも活躍した、改タラワ級ロケット砲艦 USS ナツソー、USS ペリリューの二隻だった。

かつてグラメウス大陸にM26A2ロケットの嵐を降り注がせた

改タラワ級の二隻は、空へと多数の弾体を打ち上げていた。

しかしこの時二隻が打ち上げているのはM26ではなく、ノルウェー製の対艦巡航ミサイルNSMである。

二隻は今回の海戦においてミサイル発射機のうち20基にNSM対艦巡航ミサイルを搭載し、対水上戦闘の火力支援として参加していた。

その射撃の勢いたるや凄まじく、まるで打ち上げ花火の大会が大目玉を迎えたときのような規模で、花火の代わりに対艦ミサイルを発射していた。

この他にもUSSアイオワ、ニュージャージー、ミズーリ、アラバマ、モンタナの5隻の戦艦も、それぞれが搭載する16発のハーブーン対艦ミサイルを発射している。

さらに上空ではハーブーン、JSMなどの空対艦ミサイルを装備したF/A-18、F-4、A-6、A-4等180機の艦上攻撃機が同時に対艦ミサイルを発射、攻撃を行っており、その規模たるや正に「数こそ正義」。

このとき米海軍がアニュンリール皇国海軍に向けて発射した対艦ミサイルの数は、1,219発という驚異の4桁代にまで到達していた。そのうち9割以上が正常に作動し、皇国艦隊へと一直線に突き進んでいた。

皇国海軍は、自分たちの放った攻撃の倍数の反撃を乗り切らねばならなかった。

## 第40話 「大陸沖大海戦③」

皇国艦隊は艦載の魔導電磁レーダーにより、接近しつつある1,000発以上の敵対艦ミサイル——彼ら風の言い方なら対艦誘導魔光弾——の反応を感知することに成功していた。

「レーダーに反応！ 特徴より対艦誘導魔光弾に相当すると推定！

速度マツハ0.9！ 数……な……」

「どうした！」

とある皇国海軍艦の発令所では、レーダーの反応を監視していた監視員が、その規模に思わず絶句する。それを訝しんだ艦長が声がける。

「か、数えきれません！ 数えきれないくらい大量の敵弾です！ 最低でも4桁はあります！」

「4桁だ?!? ば、馬鹿な……」

今度は艦長が絶句する番だった。最低でも1000発はあるであろう数の誘導魔光弾、先ほどこちらが700発以上（機能したのは600発程度だが）もの誘導魔光弾を撃ち込んだのに、それでも平然と上回る規模の攻撃を返してきた。

そんな、まさか、こちらの攻撃が一切通用しなかったとでもいうのか——

それは皇国海軍全体のほとんどの艦の乗員にとって、共通の感情であった。

彼らはこちらの攻撃を耐えてなおこちらを上回る規模で反撃してきた米艦隊に対し、一種の恐怖と絶望を抱いていた。

だが絶望することと、何もしないことはイコールでは繋がらない。

皇国海軍の艦艇は直ちに各艦の間隔をあけ、対空レーダーを作動させて迎撃用の対空誘導魔光弾——長距離SAMの発射を開始した。

長距離SAMを搭載する艦艇の割合は、皇国海軍は十分高い方だと

言える。対空魔艦——ミサイル駆逐艦を始め、魔導戦艦や魔導巡洋艦、さらに航空魔導母艦など。

皇国海軍の水上艦艇であればほぼ確実に搭載していた。無論、海上要塞。パルカオンもまた、VLSに長距離SAMを180発近く搭載している。

だが皇国艦隊が敵弾を迎撃する上で、いくつかの致命的な問題があり、その一つとして長距離SAMの命中率が、米海軍のそれと比べると致命的に低いことにあった。

皇国海軍艦艇の有する艦対空ミサイルの命中率は、驚異の50パーセント——10発撃つても5発しか当たらない。

何故こんなにも低いのかと言えば、もともとは光翼人による運用を想定している装備を光翼人なしで運用してるからだ。

本来、魔力が驚異的に高い光翼人による運用を想定して作られた魔帝製兵器は、光翼人の魔力を燃料として使用される。

しかし光翼人なき現在、それら装備は魔石を燃料に代用して使われている。

しかしそれでも魔力不足は否めず、光翼人の代わりに魔石で運用してる魔帝製兵器は、全力でその性能を発揮することが出来なくなってしまう。

例えば海上要塞パルカオンも、レールガンのような超兵器を搭載するのだが、レールガンは発射に膨大な電力を利用する。

そしてその電力は魔力を換算することで充填するのだが、魔石では電力換算の効率は、光翼人が行うよりも高くない。

そのため電力供給を十分に行えず、パルカオンはレールガンを一発でも撃てば電力不足となり、数時間は魔導電磁レーダーすらも使えなくなるため、レールガンを使えないのである。

よって皇国海軍のパルカオンではレールガンを撤去していた。

皇国軍魔導艦の長距離SAMを始めとする誘導魔光弾でも、同様の問題は発生する。

まず発射時の動作不良弾の割合が高くなるし、射程も命中率も速度

も悪くなるのだ。

現在、米海軍の対艦ミサイル飽和攻撃を迎撃すべく、皇軍魔導艦から乱れ撃ちされている長距離SAMはそのような欠点を抱えながら撃ち上げられていた。

だがそれでも、ミサイルが艦隊へ20キロにまで近づいた時点で、皇国海軍はミサイルの撃墜数は1,200発中480発以上にまで到達していた。

長距離SAMのみならず魔導艦そのものも、同時処理可能な目標はイージス艦と比べたら半分以下だったが、それでもかなりの数の撃墜に成功していることには違いなかった。

やがてミサイルがさらに艦隊へ近づくと、長距離SAMのみならず短距離SAMや150mm3連装魔導砲、アトラタス砲等による迎撃も始まる。

短距離SAMは長距離SAM同様に命中率が低かったため、実質的にはアトラタス砲などの砲兵器による迎撃が主体となった。

空中戦艦バルキマイラにも搭載されているそれらは、敵誘導魔光弾の迎撃を主目的に作られたため凄まじい命中率を誇った。

特にアトラタス砲の射撃は凄まじかった。魔導CIWSとも呼ばれるそれは、シャワーのような勢いで20mm魔光弾による弾幕を作り出し、迫るミサイルを触手のように絡め取っていく。

ミサイルの迎撃に成功しているアトラタス砲に対し、皇国海軍の水兵らは少くない希望を抱いた。もしかしたら、この攻撃を乗り切れるのではなからうか――

――そして次の瞬間、その希望は一瞬にして砕かれた。

艦隊前衛の魔導フリゲート数十隻に閃光が走ったかと思うと、次の瞬間にはその閃光が艦隊全域に広がっていき――次の瞬間、爆音と爆風が海上に轟いた。

対空魔艦、魔導戦艦、魔導巡洋艦、航空魔導母艦、海上要塞、すべての艦艇にアトラタス砲の弾幕を潜り抜けたミサイルが、次々と突っ込んだ。

400kgから1tの重量を持つ塊が、大落角から亜音速で突入したことで、大抵の魔導艦の装甲は貫通されてしまった。

元々、皇国軍魔導艦のベースとなった魔帝製魔導艦は、装甲が薄く作られている。1万年前の魔帝には、戦艦の装甲を破れるような兵器を持つ敵の存在がいなかったからだ。

その結果、わざわざ分厚い装甲を持つ必要もないとして装甲不要論が魔帝では主流となり、戦艦であっても大した装甲は施されることがなかった（装甲に魔法を流し魔法障壁を形成することは出来たが）。

それが裏目となり、本来戦艦の撃沈を目的としない米国の対艦ミサイルは魔導戦艦であっても装甲を貫通、内部に炸薬による爆発と残燃料による火災を撒き散らした。

爆発と火災はやがて魔導艦の機関や火薬庫にも到達し、魔導艦の内側から大爆発を引き起こさせ、艦そのものに致命的なダメージを与えた。

米海軍からすれば皇国海軍はダメコンのノウハウが素人レベルであつたことも、艦のダメージを増やす一因となつてしまった。

そして艦が致命的ダメージを受けたあとに待っているのは無論沈没か、どんなに運が良くとも漂流という結果のみだった。

海上要塞たるパルカオンのみ、その名称通り要塞並みの装甲を持っていたので沈没艦こそなかったが、それでも8隻中5隻が大破、残りの3隻も中破するなどの被害を負った。

パルカオンは単艦で敵艦隊を殲滅するという、その本来の役割を全うできぬままに無力化されてしまったのだ。

この時点で、運良く被弾を免れた艦、被弾したが耐えた艦、水中で被弾しようがない魔導潜水艦、そしてパルカオンのうち5隻と、無事だった皇軍機たちは本国へと敗走を開始していた。

最終的に、双方合計1,500発近い対艦ミサイルが撃たれあつたこの大陸沖大海戦は、誰もが予想した通りの結果となった。

皇国海軍は今回の作戦に参加させた艦艇113隻のうち84隻を

撃沈・無力化されるといふ大損害を被つたのである。

残された3隻のバルカオン、1隻の魔導空母、1隻の魔導戦艦、3隻の魔導駆逐艦は本国へと敗走し、残る21隻の潜水艦は、自分たちの本来の任務のため、独自の行動へと移った。

だがすでに本国の港を破壊されている皇国残存艦艇に、帰る場所など存在していなかった。

また21隻の潜水艦とて、16隻の米海軍攻撃型原潜、120機以上のMH-60対潜ヘリが対潜掃討戦を仕掛けており、長く保たないのは明白である。

そしてそもそも、彼らの祖国自体が長く保ちそうにもなかった。

## 第41話「島嶼制圧」

4月23日――

皇国海軍の壊滅から49時間後、皇国周辺の制海権が確保されたことで、ついに米陸軍と海兵隊が行動を開始した。

彼らはAFVなどの車輛、弾薬その他物資とともに海軍の揚陸艦、輸送船の中に詰め込まれ、洋上を突き進んでいる。

彼らが向かうは、アニウンリール皇国領であるブランシエル大陸周辺の島々である。

彼らの任務は、ブシュパカ・ラタン島を除くすべての皇国領の島々に上陸作戦を施行、これを制圧することだった。

この皇国周辺の島々を制圧し、今後の皇国本土制圧における前線基地をそこに構築することが作戦の狙いである。

飛行場を建てれば今後皇国本土への空爆が可能になるし、物資集積所を建てれば今後皇国本土への上陸作戦も可能となる。

そのための前線基地を建てるべく、米陸軍と海兵隊は動くこととなった。

それに上陸作戦というものは、米軍にとって最大の十八番でもあった。

作戦はまず島嶼内にある皇国軍施設への空爆、艦砲射撃による制圧作業から始まった。

黒煙が立ち上ぼり、火焰が噴き延びて、鼻腔を刺激するような硝煙が充満して、雨のように砲爆弾が降り注ぐ。

島に近づいたアーレイ・バーク級駆逐艦、タイコンデロガ級巡洋艦、ズムウォルト級駆逐艦、インディペンデンス級LCSの艦砲射撃だ。

島に近づいたそれら海軍船舶は主砲である5インチ速射砲、3インチ速射砲、6インチ砲、またはトマホークによる攻撃を行っていた。

また今回の作戦でも前回同様、改タラワ級ロケット砲艦が参加し、

M26A2クラスターロケット弾による大規模面制圧を実施している。

このほかにも、USSモンタナ——戦艦グレードアトラスターも参加し、46cm砲による艦砲射撃を行っていた。

改造を終えたこの戦艦はUSSミズーリ同様に、半アーセナル・シップ艦化されている。今回、モンタナは他のイージス艦から情報を受け取り、ピンポイントでの正確な艦砲射撃をしていた。

海上からの攻撃は熾烈だったが、上空もまた然りであった。

海軍のF-4、A-6は、海兵隊のF-35B、AV-8BハリアーII攻撃機と共に島々へのピンポイントでの空爆を施行していた。

JDAAM、ペイブウェイ、バンカーバスター、世界トップクラスの命中率を誇るそれらの誘導兵器は、上空から正確に皇軍施設を叩き潰した。

島々にある皇国軍の水際の陣地を、海岸の要塞を、対艦用の砲台を、それらありとあらゆる施設を吹き飛ばさんばかりの砲爆弾が襲来し、全てを吹き飛ばして行く。

それこそ、もはや無駄弾としか思えないほどの密度での攻撃である。

島内の塹壕に待避した皇軍兵士は、何もかもが粉碎されまくったことで士気は崩壊寸前であった。

だがやがてピツタリと、空爆と艦砲射撃は納まった。

いったい何故攻撃が止んだのか、不思議に思った兵士らが塹壕から頭を出してきたが、その時になりすべてを悟った。

多数のボートや海面を走る装甲車——装甲車が海面を走る？——が、白いスモークを曳きつつ海岸に迫っていたからである。

洋上の揚陸艦から発進した米海兵隊の硬式ゴムボートやAAV7水陸両用装甲車は、スモークを展開しながら海岸へと上陸を開始した。

海岸に乗り上げたAAV7が車載の40mmグレネードランチャーと12.7mm重機関銃で弾幕を形成し、後部ハッチから海兵

隊員を次々に吐き出して行く。

ボートから、A A V 7から降りた海兵隊員らは一気に分散し、皇国軍との戦闘を開始した。

さらに遅れて揚陸艦から展開したL C A Cが海岸に到着すると、L A V—25装甲車、陸軍のM 1 A 2エイブラムズ主力戦車も展開する。

対する皇国軍も、地下防空壕に待避させていた戦車やゴーレムを展開させたことで戦車戦が発生、戦闘はさらに苛烈なものへと変貌した。

魔帝時代に造られた強固な地下防空壕は、地中貫通爆弾の直撃にも耐え、中に待避させていた兵器たちを空襲から乗り切らせたのだ。

皇国陸軍の主力戦車たる、リグリー魔導戦車は魔帝製の戦車を改良再生産したもので、地球における第二世代主力戦車に該当する性能を持っていた。

サイドスカート付きT—62の車体にP L—01の砲塔を載せたようなそれは、51口径114mm砲を搭載、重量は41トンにもなる。

しかし複合装甲ですらない装甲は薄く、魔帝オリジナルの搭載する自動装填装置は使用できない、F C Sも無いなど、酷いものである。

とはいえ、そんな駄作戦車であろうが、自動式魔導銃を装備する歩兵や、対戦車ロケットなり大口径機関砲なりを抱えたゴーレムと現れれば厄介極まりないのは事実であった。

だからこそ、米海兵隊は陸軍のM 1 A 2主力戦車、M 2ブラッドレー歩兵戦闘車などを筆頭に、周囲に歩兵を散開させて対戦車・対歩兵戦闘を実施する。

アメリカ軍・アニュンリール皇国軍双方の砲弾が飛び交い、全速力で疾走する戦車が交錯し、曳光弾を交えて弾幕が伸びる。

リグリー魔導戦車の砲塔が高く吹き飛び、心臓部を撃ち抜かれたゴーレムが崩れ落ち、魔光弾を浴びて履帯の千切れたM 1戦車が停止する。

両者一進一退の攻防、このまま戦局が変わることはないかのように

思えた。

もちろん、そんな事ある筈もない。

米軍と皇軍の両者の鼓膜に、遠くから何かの音楽が流れ始めた。

何事かと、空を見上げた兵士らが目にしたのは、ロービジ仕様の白い星を機体に浮かべた、ヘリコプターの大編隊であった。

洋上の空母や強襲揚陸艦から展開した、米海兵隊のヘリコプター部隊である。

数十機におよぶ米海兵隊ヘリの大編隊は、機体に取り付けた大型のスピーカーからワグナーを、ロックンロールを、合衆国歌を、海兵隊讃歌を大音量で鳴り響かせながら襲来した。

そして島上空に飛来するや、AH-1Z攻撃ヘリがヘルファイア対戦車ミサイルを、UH-1Y汎用ヘリがロケット弾やM134ミニガンを乱射しまくった。

次々とリグリー魔導戦車が、軍用ゴーレムが、そして皇国軍兵士らが吹き飛んでいく。

対空砲や機関銃が反撃をしようとしたが、射撃を開始した途端に光弾で位置がバレ、すぐさまミサイルの嵐が吹き荒れ沈黙していく。

心強い歩兵の味方である戦車が次々に殺られた途端、すでに士気が崩壊寸前であった皇国軍兵士らは、この瞬間完全なる限界を迎えた。

彼らは武器を捨て、海兵隊に対して降伏を宣言した。

このような光景は、同時に上空作戦を仕掛けられた皇国領の他の島々でも繰り広げられることとなった。

ここに、戦闘は終結した。

しかしまだ、戦争は終わっていない。

## 第42話「神々の落星」

4月27日

開戦から1週間が経過していた。

米軍による皇国周辺の島嶼への上陸作戦が行われてから2日が経過しており、連日連夜、米空軍による空爆と米海軍によるトマホーク攻撃が行われていた。

米軍は皇国周辺の島々に飛行場を設置、そこを拠点に航空部隊を補給させていたため、皇国本土は連日連夜の攻撃を受けている。

だが、未だに皇国が降伏する気配はなかった。

そのため米国は“ある兵器”の実戦テストも兼ねて、その“ある兵器”を皇国に使用することを決定した。

「戦況は……最悪か」

アニユンリール皇国皇帝ザラトストラは、皇国各地から入ってくる戦況報告を聞いて、皇城オラタナ城の私室で頭を抱えていた。

皇国はすでに、末期の状態になりつつある。

海軍は先の海戦により壊滅、唯一その海戦で無事だった空母はドックに船体を横たえていたところに空爆を受けて地上で破壊されていた。

活動中だった潜水艦21隻もすべて消息を眩ましていたし、残る数隻の駆逐艦と巡洋艦は、洞窟型の地下ドックに待避してから出られなくなっている。

空軍も制空権を奪われているために動けず、また戦力の85パーセントを喪失している。

残りの15パーセントは地下基地に待避した回転翼機とVTOL機だけだ。

陸軍は辛うじて他の軍よりは損害が少ないが、それとて全部隊のう

ち40パーセントが消失していた。

先の島嶼への上陸における損害や、基地へのトマホーク攻撃、移動中の空爆を受けての被害である。

また海上要塞パルカオンは12隻中8隻が損害を受け、うち1隻は自沈、2隻は放棄され、残る5隻は修理のため洞窟型の地下ドックに船体を横たえている。

空中戦艦パルキマイラも、今のところ損害は受けていないのだが、制空権が早々に奪われたため出撃の機会を失っていた。

空中戦艦と名前にはあるが、実態はパルキマイラは対地用のガンシップとして設計されているため、友軍による制空権が確保されていない現状での出撃は危険でしかなかった。

対する米軍の被害は、確認できる限り今のところほぼゼロ。皇国軍は何も出来ていないのだ。

また、米軍は都市部への攻撃をチラつかせるかのように連日連夜、都市部・工業施設へのビラ撒きを行っている。

おかげで地方への疎開を目的に皇国人たちは魔導車で高速道路から、鉄道で都市部から、そして徒歩で道から、あらゆる手段での都市部からの脱出を図っており、交通の混乱も起きていた。

いくつかの都市では避難に伴う混乱と事故により、総計して数千人の死者が発生している。

攻撃を受けずにこれなのだから、もし攻撃を受けたとしたら、いったいどれだけの死者が出るのだろうか。

「皇国が戦争を生き延びる術は……いや、ないな」

ザラトストラ自身も、それは分かっていた。圧倒的戦力の米軍相手に勝つ手段なんて無いのだと。

だが降伏だけは受け入れられない。

光翼人、そして魔帝の末裔であるというアニユンリール皇国人としての誇りが、それを妨げていたからだ。

皇帝として、皇国人として、光翼人の末裔として、せめて一矢報いてからでないか――

ザラトストラがそう考えていたところ、扉がノックされ、彼の相談役の男が飛び込んできた。冷や汗か、顔面が酷くびっしりである。

「陛下、突然申し訳ございませんが一大事です」

「どうした。何かあったのか」

ザラトストラは問い返す。何かあるのだから飛び込んできたのだろうが、問い返さずにはいられなかった。ザラトストラは何か嫌な予感がしてならない。

「もしかしたら……もしかしたら、我々は神と戦争しているのかもしれません」

「どういう意味だそれは？」

「伝承の通りになりました。我々は神と戦争してるとしか考えられません」

訳が分からない、そう言いたげな表情でザラトストラは問い返すが、男も酷く慌ててるようで、何を順番に話すべきか定まっていないうのである。それほど常識外れなことが起きたのだろうか。

「ひとまず落ち着いてくれ。そして、何かあったのか、順番に説明してくれないか？」

ザラトストラにそう言われてからようやく、男も自身の様子がある程度理解出来たようで、「すみません」と一言伝えてから深呼吸をする。やがて、ゆつくりと口を開く。

「ご無礼をお許しください。では、順番に説明させて頂きます」

男はようやく説明を始めた。

「先日、米国から魔信によりあるメッセージが届けられました」

「なんだそれは？ 余は聞いてないぞ」

「申し訳ございません。敵の欺瞞情報と決めつけられ、陛下の元に届けられる前に処理されていたのです」

そう言つて懐をまさぐると、男はそのメッセージが書かれているらしき一枚の紙をザラトストラへと差し出す。

そこにはこう書かれていた。

『警告する。我々に降伏せよ。さもなくば明日正午、怒った神々は大』

陸に星を落とす』

——怒った神々は大陸に星を落とす。

それはこの世界の住人なら誰でも知ってる、古の魔法帝国の伝承の一節だ。

かつて魔帝は神に弓を引き、神々の怒りを買った。そして怒った神々は、魔帝の存在するラテイストア大陸に星を落とした。

星を落とすなんて諸行は、おそらく神でしか出来ないであろう、だが、これがなんだと言うのだろうか。未だ、ザラトストラは理解に苦しむ。

「陛下、これから私が伝える内容は、信じられないことかもしれませんが、すべて事実です」

男は紙を仕舞いザラトストラに対する説明を続ける。ザラトストラも、どんなことを言われるのか、心構える。

「それを踏まえた上で、よくお聞きください」

「うむ」

「我が国に星が落とされました」

「は？」

男の言ってる意味がさっぱり分からず、ザラトストラは呆けた声を出してしまった。それに構わず、男は説明した。

「アメリカは、時間通りに星を落としてきたのです」

## 第43話「星の落下」

1時間前――

ブランシエル大陸沖の海中で1隻の米海軍籍の原子力潜水艦が、浅海にまで浮上し、ある兵器の発射準備を行っていた。

オハイオ級戦略ミサイル原子力潜水艦7番艦『USSアラスカ』――この世界に派遣された米軍戦力の一角である。

米国がアニュンリール皇国に対して行った攻撃の正体、つまりころそれはSLBM、潜水艦発射型弾道ミサイルであった。

アラスカは実戦テストを兼ね、今回のアニュンリール皇国に対するSLBM攻撃へと参加させられていた。

『警告する。我々に降伏せよ。さもなくば明日正午、怒った神々は大陸に星を落とす』

先の皇国への警告――星とはつまりSLBMのことだ。SLBMは値段が高くこんなことに使うのはコスパとして最悪だが、地球では行えない実戦でのテストと、皇国への示威効果を狙ったの行動であった。

「トライデント発射はじめる！」

潜水艦アラスカの背面に設置された24基のSLBM用垂直発射型ミサイルハッチのうちひとつの蓋が開放され、そこからトライデント型SLBMが放たれる。

飛翔開始から2分以内に時速2万1600キロメートル以上――マッハ17にまでつき上っていたミサイルは、ほんの数分後には低高度軌道にまで到達していた。

本来のトライデントは多弾頭弾<sup>MIRV</sup>であり、14発のW88核弾頭を搭載するのだが、このトライデントは核弾頭を搭載しない通常弾頭型である。

核はおろか爆発物すら搭載されていないが、それは再突入体の質量と、超音速での衝突速度が十分なエネルギーと効果をもたらし、それだけで周辺の目標を破壊するからである。

こんなものが仮に都市部にでも着弾すれば、死者数万人は下らないだろう。

アメリカはアニユンリール皇国の巨大要塞メンヒルに対し、この通常弾頭型トライデントを向けていた。

メンヒルは1万年前、ブランシエル大陸に魔帝が建設した要塞である。

シエルターも兼ねた地下数十メートルにまでおよぶ地下階層、VTOL機を運用する飛行場、トーチカ、そしてパルクマイラ用の巨大格納庫などなど。

施設そのものはほとんどが地下に造られているのが最大の特徴であった。

元はコア魔法用の発射サイロもあつたのだが、アニユンリールはコア魔法を運用する技術を持たないため、無用の長物と化していたことが理由で撤去されている。

目立ってたためすでに開戦直後から米軍の攻撃対象とされ何百発もの地中貫通爆弾の直撃、MOAB、サーモバリック爆弾による攻撃を受けていた。

それでも陥落しなかったあたり、魔帝の技術力の高さが窺えるであろう。

またメンヒルは、魔帝転移後に周辺を有翼人たちが取り囲むように住居を建てたため、メンヒルの周辺には大都市が多いというのもあつた。

都市部からの疎開が始まるとはいえ、パニックによる交通網の混乱により、多数の人間がそれらの都市にいたままだった。

だからこそSLBMがメンヒルへと落下していく様を、都市部に住む多くの人間が目撃することとなった。

成層圏へと再突入したトライデントSLBMは弾頭のノーズコーンを真っ赤に輝かせながら、極超音速で落下していた。

地上からそれを見ていた有翼人たちからは、それが流れ星であるかのように見えていたであろう。

慣性航法による航法更新および再突入体の精密な誘導と制御により、トライデントSLBMは目標に対しほとんど誤差なく着弾した。

メンヒルに30トン以上の塊がマツハ20以上の高速で突入したとき、メンヒルを構成する要塞の壁や天井は着弾地点を中心にぶち抜かれ、その瞬間発生した高圧力の衝撃波は周囲にある様々な物体を粉砕した。

要塞表面には高圧力の衝撃波が吹き荒れあらゆるものを薙ぎ倒し、要塞の地上施設の四割に致命的ダメージを与えた。

運が悪かったのは、着弾地点がちょうどメンヒルの中央——パルキマイラの地下格納庫上部で、要塞内部に突入してなおその速度を落とさなかったトライデントSLBMは、ちょうどそこに駐まっていたパルキマイラを直撃したのである。

その瞬間、パルキマイラの上部構造物は叩き潰され、多数の破片がパルキマイラの装甲を突き破り、内部に搭載されていた超大型魔導爆弾の誘爆を招いた。

パルキマイラ内部の大型爆弾同時一斉誘爆——さらに高出力魔導機関、液体魔石の誘爆も招いたことで大爆発を起こした。

地下格納庫という密閉された空間で、瞬間的に発生した爆発エネルギーと衝撃波によるエネルギーは荒れ狂い、他のパルキマイラさえも誘爆させ、瞬間的に連鎖的に勢いを高めていく。

そしてそれらは逃げ場を求めてトライデントの突入口から吹き出たが、それだけでは収まらず要塞内部の隔壁を突き破りつつ急速にメンヒル内部を駆け回った。

そうしてメンヒル内部の燃料タンク、弾薬庫、地下格納庫は次々に誘爆を引き起こし——20秒も経ったころ、メンヒル要塞は爆発による内部からの崩壊と、手の施しようがない大火災により完全に無力化

されていた。

この光景は当然、メンヒル周辺の都市の住民たちにより目撃されていた。

まるで流れ星かのような物体が落ちてきたかと思うと、衝撃波が吹き荒れ、巨大要塞メンヒルが内部から爆発する。

その信じられないような光景を見た皇国人たちは、それを見て一瞬に悟った。

神々が星を落としたに違いない——と。

1万年前、自分たちの先祖たるラヴァーナルが転移する原因となった、神による星落とし——実際に星は落ちなかったが、それを先代から言い伝えとして聞いてきた有翼人たちはすぐにそれだと判断した。

なぜ今頃になって神々が攻撃してきたのかは不明だったが、そんなことは関係ない。

少なくとも、アメリカは神の眷属であり、自分たちが再び滅亡の危機にあることに違いはない。

米軍もそれを意図しての、メッセージをしたあとの攻撃であったが、その効果は完全に抜群であった。

これを受けて、アニユンリールもようやく、米国に対して降伏する決心がつくこととなった。

## 第44話 「終戦、次に備えて」

4月28日

アニユンリール皇国が米国に魔信で降伏宣言を発したのは、SLBM着弾の翌日、米軍がいよいよ皇国本土への直接上陸を開始しようかと考え始めていた段階でのことだった。

このころ米国は海兵隊が制圧した皇国周辺の島嶼に前線基地をおいて物資を集積し、輸送船や揚陸艦を集結させていつでも上陸作戦が可能なる状態を整えていたのだが、それが行われることはなくなったらしい。

SLBMによる攻撃が、神々による星の落下として皇国に受け止められ、この段階になってようやく皇帝ザラトストラは米国への降伏を許可したのだろう。すぐにザラトストラは皇国軍の全軍に対して戦争停止と武装解除を命令した。

ただいくつかの部隊はそれでもなお徹底抗戦を叫び続け、手持ちの戦力で米軍への戦闘を仕掛けるべく独断の行動を行ったり、クーデターを狙い皇都へと進撃するといった行為が多発。

挙げ句は先進生物研究所で保管されている開発／研究中の魔物を開放して暴れる部隊まで発生する始末。

いくら皇帝たるザラトストラの命令でも、魔帝の子孫というプライドのあるア皇人には降伏が受け入れがたかった——無論、星の落下を見てない者に限るが。

星の落下を見ていたり、知らされた者は神と戦争していることに恐れてすぐ戦闘を止めたが、知らされていない者たちには（例え全軍が壊滅状態でも）関係のないことだった。

彼らは「魔帝様の望むこと」として、戦闘停止や武装解除を無視したのである。

ただこれらは、ザラトストラの「武装解除を行わず活動する部隊はすべて攻撃して構わない」というメツセージが魔信により直接米軍へと伝えられたことで、すぐさま空爆の対象と化してしまった。

皇都へ向けて進撃中だった皇国陸軍の機甲師団は、幹線道路を移動中に米軍攻撃機と攻撃ヘリの襲撃を受けて壊滅することとなる。

無理やり地下格納庫から出撃した皇国空軍のVTOL戦闘機も、離陸した直後に米軍戦闘機の攻撃を受けて撃墜された。

先進生物研究所にも爆装した15機のF-15E、3機のB-52Jが飛来し大量の焼夷爆弾と燃料気化爆弾、サーモバリック爆弾が投下され、魔物どころか施設ごとまとめて焼却された。

魔獣が危険なことをグラメウスでの戦闘を経験した米軍はよく理解してるし、鬼姫からの情報では、少なくとも鬼姫以外の他国の人質はいないとのことである（少なくともそうなってる）。

なので先進生物研究所は問答無用で米軍の攻撃目標となつてしまつていたのだ。

どんなに他の通常生物より圧倒的に優れた身体を持つ魔獣や魔物でさえ、人工の灼熱地獄を乗り越えることは不可能である。

このとき、この施設に身を寄せていたアデムは、自身の使役する百足蛇や魔獣軍団ごと、その灼熱の業火に焼き払われることとなった。

## 2週間後――。

講和条約の締結は、ブシュパカ・ラタンで可及的速やかかつ迅速に行われた。アニウンリール唯一の外交窓口たるこの島には特に脅威たりえるものもなく、そもそも唯一の外交窓口であるため、米軍は攻撃を行っていない。

講和条約の内容は、アニウンリールの保有するすべての魔帝の情報を開示すること、そしていくらかの賠償金と軍縮の要求であった。

ミリシアルやムー、エモールなどの異世界側の国々の国民には、すでに米軍が戦争することは聞かされていた。

だがそれら一部の国の政府高官を除き、なぜアニウンリールなどという南方の文明圏外国相手に開戦したのかは知らされていなかった。だが、終戦後によろやく米軍が情報を開示したことで驚愕した。ア

ニユンリールは魔帝の実質的な末裔だったのである、そう判明したからだ。

当然といえば当然である。

もし開戦前にそんなことを公開してたら、エモールかミリシアル辺りの国が国民に煽られてアニユンリールに宣戦布告していたであろう。

そんな事されてたら戦争の邪魔でしかない。

エモールの風龍やミリシアルの戦闘機はIFF（敵味方識別装置）を装備していないため、アニユンリールの近くにやつて来られると敵なのか味方なのか分からず、最悪ミサイルにより誤射しかねない。

いや、エモールの風龍は生体電波を発してるとの報告もあるためIFFには応答するかもしれないが、どちらにせよ作戦行動の邪魔だ。せいぜいムーが、アメリカか日本辺りからIFFを購入しようか検討中との話があったり、新兵器を開発しようとの手この手を尽くしてる程度だ。

今のところは米軍の作戦行動への随伴は不可能であり、これでは参戦して貰わない方がいい。

ちなみにその日本であるが、今回の戦争でもアメリカ軍への後方支援に徹しており、グラメウスの時同様に米軍への物資輸出で儲けていたらしかった。

さて、今回の戦争の後、アメリカほかミリシアル、ムー、エモール、日本など各国の調査団がアニユンリールのブランシエル大陸に上陸した。

目的はもちろん魔帝ことラヴァーナル帝国に関する調査である。さすが魔帝の末裔といったところか、アニユンリールは魔帝の遺跡であつたり魔帝の情報であつたりを多数揃えていた。

例えば魔帝復活ビーコンの役割や構造、軌道上の魔帝製人工衛星『僕の星』、魔帝の国力、魔帝の技術力、魔帝軍の軍事力、などなど。

特に有り難いことに、ラヴァーナル帝国の存在するラテイストア大

陸の位置やラテイストア大陸の地形情報までも判明した。

これほどの情報があるのであれば、魔帝への備えも何とかかなりそう  
だ、すぐにでも魔帝復活に備えた準備を行おう、米国はじめ各国の調  
査団員らはそう結論付けていた。

アニユンリールとの戦争を終えた米国は、すぐさま次の戦争への準  
備を始める。

## 第六章 未来への備え

### 第45話 「彼を知らば百戦危うからず」

中央暦1644年10月20日

アニウンリールと米国の戦争が終結してから半年が経過し、米国は異世界惑星αの国々および日本と協力し合って魔帝——ラヴァアーナルとの戦争に備えた準備を行っていた。

例えば、ワームホールを通じて地球からCIA、NSAといった諜報機関および国務省の職員が次々と現地に派遣され、各地で魔帝に関する情報の収集にあたっており、アニウンリールに数十名の人員が派遣されている。

アニウンリールに派遣された人員の多くは現地人らの協力のもとラヴァアーナルの遺跡の調査にあたっており、ラヴァアーナルの軍事施設、魔導サーバー施設、さらにインフラや研究所跡地などを調べている。

技術に関してはマルチコプターを運用してたり、半完全環境都市を都市部に形成していたり、パルカオンを収容可能かつ地中貫通爆弾の直撃にも耐える巨大地下ドックを整備してたりと、一部が突出して優れていた。

だが軍事技術に関してはそうではない。

軍事施設に派遣された人員のいくらかは皇国軍の協力のもと魔帝製の魔導兵器の調査にあっている。魔導戦車、軍用ゴレム、魔導艦艇、戦闘機、爆撃機、VTOL機、回転翼機、さらにパルキマイラ、パルカオン等々。

戦闘機は皇国製のラフシーズは大した性能ではなかったものの、魔帝オリジナル——博物館で時空遅延式魔法を施し保存されていた1万年前の骨董品——は地球における初期の第4世代ジェット戦闘機に相当することが判明した。

工業地帯は破壊してたとはいえ、米軍が民間施設への破壊を行わな

かったのが功を為した。もし民間施設への攻撃も行つてたらこの博物館も破壊され、この魔帝製戦闘機を調べることも敵わなかっただろう。

丁寧なことに博物館にはその戦闘機——レイカーという名前らしい——のカタログスペックや各種の説明、1万年前に魔帝軍で運用されていた頃の飛行映像が残されていた。

それらを勘案したレイカーのスペックは、速度マッハ2.0、レーダーは探知距離120km、固定武装は20mm魔光砲1門のみ、ステルス性は全く考えられてないが、射程70kmのSARH式空対空ミサイルほか最大7.5トンの武装を搭載するマルチロールらしい。

射程180kmのAMRAAM空対空ミサイルを搭載する米軍戦闘機相手には大した敵とはならないだろうが、それでも今までの敵と比べたら脅威的だろう。

レイカー戦闘機だけではない、魔導艦艇も対空戦能力は「貧者のイージス艦」と言われるスプルーアンス級駆逐艦と同程度、リグリー戦車も湾岸戦争時のT-72程度には強いらしい。

どれも米軍の兵器と比較すれば今ひとつ——米海軍イージス艦はスプルーアンス級の倍の戦力にはなるし、湾岸戦争時の米陸軍M1A1戦車連隊はイラク軍のT-72戦車旅団と戦闘した際にほぼ損害なしでこれを壊滅させている——といったところである。

以前ミシアルの軍の装備を調べた際にラヴァーナル帝国軍の兵器のレベルが1970年代アメリカの軍事技術力とほぼ同等、という仮説はやはり正しいのだろう。

ただ電子戦の技術や対潜技術は発達途上など一部はガバガバだ。

1万年前に世界最強として君臨していた魔帝には電子戦を行う相手も、敵となりうるような強力な潜水艦を有する相手もいなかったせいでそれらを発展させることが出来なかったのだろう。

パルキマイラがその良い例で、あれは敵制空権下での戦闘を想定しておらず——つまり敵戦闘機が現れない前提である——ただ弱者を上空から一方的に叩くためだけに造られた妙な存在だ。

パルカオンは敵艦隊を単艦で殲滅することを目的に造られたので

少々異なるものの、防空能力の強さ以外はレールガン搭載のただデカイ武装空母だけで、対潜能力も貧弱であり対処可能だろう。

ただそれでも魔帝を侮れない点が存在している。それは光翼人ゆえの残虐性と、核武装している点だ。

魔帝は確実に大陸間弾道ミサイルを保有しているらしく、単弾頭弾だがその射程は一部の文献によると最大で50,000km以上におよぶ。

しかも以前も述べたと思うがラヴアーナル帝国は進み過ぎた文明ゆえ、かつてはこの世界をすべて支配していたらしいが非常に傲慢だった。

そのため支配下に置いた他種族を家畜以下の存在として扱い、他国に奴隷の差し出しを拒否されると核戦争を起こしたというのだ。

こんな傲慢を通り越して理不尽な国なのだ、仮に復活してくれば理不尽な要求を寄越してきて、それを断れば戦争を起こし、そうなれば問答無用で各地に核ミサイルを撃ち込むだろう。

となると話し合いはまずあり得ない。

であれば、復活した直後に先制攻撃を仕掛けた方が妥当だろうか。

ラヴアーナルに関する情報はワームホールを通じて次々とアメリカ本国に届けられ、CIAやNSA、ペンタゴンなどで精査されたのちホワイトハウスの大統領の下へと届けられていった。

結果として大統領は決断した。

ラヴアーナル帝国が復活した直後に、ラティストア大陸へと先制攻撃を仕掛け、圧倒的な物量を投射してラヴアーナルの国力と戦力を激減させることを。

これを念頭に置いて国防総省<sup>ペンタゴン</sup>では、大統領命令により対ラヴアーナル戦争計画の本格的な策定が開始されていた。

米軍が異世界に投入可能な全戦力、なんなら日本国自衛隊やミリシアル、ムー、グラ・バルカスなど惑星αの国々の軍隊を投入してでも、復活した直後のラティストア大陸に総攻撃を仕掛けてラヴアーナルを一気に叩き潰す。

米軍主導による対ラヴァーナール戦争計画

——計画名『神罰の代行——Acting for Punishment』はこの時から本格的に策定が進められた。

## 第46話 「異世界での準備、地球での備え」

2020年。

一方、地球。

米国が魔帝への対策を進めている最中、地球もまた少し騒がしかった。

本来なら東京での開催を予定されていた夏季オリンピックが日本の転移により、急遽開催地をイスタンブールに変更されるなどの騒ぎが起きたが、世界は繁栄を謳歌していた。

現在、地球は数年前からずっと好景気である。

アメリカの惑星<sup>異世界</sup>α開拓による史上稀な好景気は地球各国にもその恩恵をもたらし、人々の購買意欲を高め、工場で大量生産された物資が人々の手により大量に消費される。

まさしく資本主義な時代であるがこの年、ついに米連邦政府と議会は決断した。この好景気をさらに長引かせるため民間企業に限り、企業の異世界参入を許可したのである。

イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、スイス、スペイン、スウェーデン、異世界への参入が許可されたことで特にヨーロッパ諸国の企業は異世界に市場を求め、こぞって異世界開拓に参入した。

異世界への参入は許可されたといっても、当然参入するその企業はFBI、CIA、DIA、NSAなど米国諜報機関が徹底的に調査した上で許可されるので、例えば裏で他国軍と繋がってるペーパーカンパニーは門前払いを受ける。

そのためいくつかの企業が裏での繋がりに——中国人民解放軍、ロシア連邦軍、朝鮮人民軍、やはりというかイギリスのMI5やMI6——を指摘されて突っぱねられたが、それでも何十もの企業、何百万もの人材が地球から異世界へと渡った。

何千人もの異世界行き地球人を搭乗させた旅客船や輸送船からなる輸送船団。もちろん人々も全員身元を照会されるし、船も隅々まで臨検調査を施される。

米海軍の巡洋艦、駆逐艦、潜水艦と哨戒機や空中警戒機による何重もの警戒システムが周辺海域に目を光らせる惑星αのワームホールの入り口をくぐり抜け、輸送船団は異世界へと渡っていった。

フロンティアと化した異世界——ロウリア王国、フィリア大陸各国、グラ・バルカス、ブランシエル大陸などは市場として製品輸出により莫大な利益を上げている。

そしてクイラ王国、グラメウス大陸、ムー大陸では、大地に眠る莫大な地下資源を求めて資源開発が行われている。

もちろん、米国が他国企業の参入を許可したとはいえ、それを指を咥えながら黙って見守っているだけではない国だっている——日本だ。

日本企業もそれら地球企業に負けじとばかりに販売競争や開発競争をしており、ミリシアルとムーの間で米国も貿易をしているとはいえ、文明圏外国や大半の第三文明圏内国、そしてムーも比較的日本の独壇場に近い。

それでもグラメウス、グラ・バルカス、ブランシエルなどの巨大市場も存在しており、日本企業か地球企業か、どちらがどれだけ市場を獲得するかの勝負でもある。

異世界での経済競争は熾烈そのものであった。

もともと競争は経済だけではなかった——そう、軍事競争である。

米国は地球国家——中国との間で、戦火を交えない軍事的競争を繰り広げていた。

現在、米国が他国企業の異世界参入を許可したことで、世界屈指の人的市場たる中国はその世界市場としての立場を失いつつあった。

すでに中国では経済的低迷の兆候が見られており、当然ながら米国に対して抗議声明を発すると共に、軍事力の強化を推し進めていた。

経済的低迷の兆候が見られたとは言え、腐っても経済大国たる中国にはそんな状態での軍事力の強化とて不可能ではなかった。

彼らは特に海軍力と空軍力の強化を推し進めていた。飽くまでも

米国への示威とは言え、いざとなれば軍事行動を開始し、力付くでも惑星αと繋がるワームホールを奪取または破壊するための戦力である。

中国空軍は最新鋭機であるJ-20、J-31ステルス戦闘機の量産、最新爆撃機H-20の早期戦力投入、H-6U空中給油機やKJ-500早期警戒機の量産、J-10やJ-16など既存戦闘機の整備を急いでいる。

戦略ロケット軍もDF-41大陸間弾道ミサイル、超音速巡航ミサイルDF-100の戦力化を、陸軍も99A式戦車や04A式歩兵戦闘車、15式軽戦車などの量産および実働戦闘部隊の整備を実施。

そして中国海軍は航空母艦「遼寧」「山東」、国産戦艦「北京」ほか055型駆逐艦、052D型駆逐艦など最新の艦艇を次々に就役させており、艦載機J-31、J-11L、J-10K、MiG-29K（艦載機の技術的不安から急遽購入された）の量産配備を進めている。

さらに海底固定式ソナーによりワームホール近辺で複数隻の国籍不明の潜水艦——音紋解析の結果ほぼ中国潜だった。稀にロシア潜やイギリス潜、どうやって来たのか北朝鮮潜まで——が行動しているのが確認されている。

もちろん米国はこれに対抗する。

ワームホール近辺には強固な対潜哨戒網が敷設されたほか、異世界派遣軍の兵器更新のついでとばかりに最新の駆逐艦や巡洋艦、ステルス戦略爆撃機B-21や戦闘機の量産、戦艦の近代化が行われている。

その他にも予算だつて潤沢だし、兵力だつて最近大量に増加した（異世界に夢見た多くの若者が入隊したのである）のだから、ほとんど問題ない。

それに核戦力や弾道ミサイル戦力、宇宙戦力だつて——惑星αにおける対魔帝戦争計画『神罰の代行』の遂行のため試験的に準備されており、特に核戦力は強硬派の大統領が計画を推し進めたことで準備が進んでいた。

コロンビア級戦略原潜、B-52J、B-1R、B-21戦略爆撃

機、通常弾頭型弾道ミサイル、神の杖——しかも異世界ではこれらを制限する条約が適用されないことを良いことに、それを整えつつある。

アメリカは異世界で戦争の準備を行い、その片手間で自分たちの世界における戦争に対抗する力を備えつつあった。

## 第47話 「6年後に向けた軍拡」

『神の杖』――

――米国が計画していた核兵器に代わる戦略兵器である。タングステンで出来た大重量の金属棒を、宇宙空間から地上に向けて発射し、落下する速度で莫大な運動エネルギーを生み出し目標を破壊する兵器だ。

投下された金属棒の落下中の速度はおよそマッハ10に到達し、地上に激突すればその破壊力は核爆弾に匹敵する。それどころか地下数百メートルまでのありとあらゆる物を破壊できる恐ろしい兵器だ。

しかしこの兵器は宇宙条約の第4条、平和利用の原則「地球軌道に大量破壊兵器を乗せてはならない」により配備禁止も同然の状態だった。

……だったのだ。

米国は神の杖――KB-1攻撃衛星、通称『オーデイン』を惑星αという地球以外の星の軌道に乗せることで宇宙条約をくぐり抜けたのだ。

開発自体は2015年から――日本の転移直後に発生した、中華人民共和国の台湾侵攻と北朝鮮の南進による第四次台湾海峡危機・半島危機により――急ピッチで進められている。

ワームホールを通じてオーデイン攻撃衛星と金属棒の誘導を行う専用衛星を惑星αこと異世界に運び込んだ米国は、それを『X-37C スペースプレーン宇宙往還機』で異世界の宇宙軌道に投入した。

さて、ところでKB-1攻撃衛星は何を攻撃対象としているか、疑問に感じる者もいるだろうが、もちろんそれはラヴァーナル帝国である。

魔帝ことラヴァーナル帝国に関する調査もだいぶ進み、アニユンリールでの大規模な調査によって魔帝の存在するラティストア大陸の復活する場所、そして復活する時間も判明した。

魔帝の復活場所は日本列島の南東、ロデニウス大陸の真東にある『大東洋』と呼ばれる大海のど真ん中である。

時間はビーコンの解析、エモール王国での占いの結果、中央暦1650年——西暦2026年の9月から12月の間とされた。

ちなみに魔帝復活を支援する魔帝復活ビーコンは地上の他にも宇宙空間の『僕の星』なる魔帝製人工衛星にも搭載されているようである。

これは異世界版ブラックナイト衛星とも呼べる代物で、魔帝が1万年前に打ち上げ、今も35基がメンテナンスフリーで飛び続けているとのことだ。

現在魔帝復活の阻止のため、世界中に散らばってるビーコンの回収活動が行われており、宇宙空間の『僕の星』も米空軍のX-37C宇宙往還機が参加して回収活動が行われている。

日本もこの回収活動に参加しており、日本製の大型無人宇宙往還機——『サンダーバードらいちよう』という名前らしい——を投入していた。

しかしいくつかのビーコンはいくら調査しても位置が判明しておらず、またいくつかの『僕の星』は極軌道を周回しているため回収が困難であったため、ビーコンを全て回収、破壊して魔帝の復活を阻止することは難しいと考えられている。

よって魔帝の復活直後に、先程の『神の杖』を含む、弾道ミサイルや巡航ミサイルなどあらゆる長距離攻撃をラティストア大陸へと投射し、復活した直後の魔帝の戦力を大幅に削ぐことが想定されている。

一応、米軍が核兵器のみでこれを無力化する作戦案もあったのだが、その場合は惑星αの環境への影響が激しすぎる。

核の冬が発生した場合、星全体が氷河期に突入し、核爆発で大量発生したCO<sub>2</sub>による温暖化で数年以内に気候は元に戻るが、それまでに大半の生物が死滅することが予測されたのだ。

よって核兵器は必要最低限の使用とされる。

それ以外は基本的に通常弾頭の長距離兵器を大量投射し、その後魔帝への空爆や艦砲射撃による直接攻撃、その後上陸作戦に出ることと

された。

この空爆と艦砲射撃には、米軍はもちろん日本国自衛隊、さらにミシアル、ムー、グラ・バルカスなどこの世界の主要国も参加予定である。

とりあえず持てるだけの火力をぶつける、そうなっていた。

そのためにこの世界の国々や日本は、魔帝戦に備えて兵器開発や準備を行っている。

日本は防衛予算を奮発した。

陸自は装甲車輛1000両、回転翼機300機の増産と隊員数の大規模な増強を実施した。

空自は2024年までに次期主力戦闘機F-3を配備することを決定、またP-1改造の戦略爆撃機、C-5級新型輸送機の開発を急いだ。

海自は2025年までに規模を7個護衛隊群にまで増強し、6000t級の空母、原子力潜水艦の建造、DDG・FFM・SSの量産を始めた。

また、ムー国は空母機動部隊戦力の強化、ラ・カサミ改級戦艦——日本で改造され、護衛艦化されたラ・カサミ級戦艦——の量産を行い始めた。

これにはムーとリーム王国の間で起きたとある出来事が関係していた。

数カ月前のことだ、リーム王国周辺では海賊行為が多発していた。

この海賊行為にはムーの輸送船も被害に遭い、ムーはこれの対応のため第三文明圏に展開していた機動部隊と、日本で改造工事を終えたばかりの『ラ・カサミ改』を派遣した。

その際、海賊行為がリームの私掠行為であることが判明したことでムーはリーム王国に宣戦布告、『ラ・カサミ改』とムー機動部隊はリーム王国軍との間で戦闘状態に突入。

リーム王国は米パ戦争（米国とパールディアの戦争）後のドサクサに紛れて、パールディアから最新戦列艦や竜母、さらに新兵器として開発中だった装甲艦、ワイバーンオーバーロードを入手し、軍事

力を強化していた。

空母を含めた機動部隊と『ラ・カサミ改』からなるムー海軍艦隊、戦列艦や竜母に装甲艦など第三文明圏では比較的新兵器な装備で武装したリーム王国海軍は、アワン王国の沖合いにて激突した。

が、もちろんムーに敵うはずもなく、アウトレンジ攻撃でリーム艦隊は瞬く間に壊滅、その後報復攻撃としてリーム王都に艦砲射撃が実施され、リーム王国は降伏した。

——その際、ムー艦隊の撃破スコアの七割以上が『ラ・カサミ改』単艦によるものであり、『ラ・カサミ改』の圧倒的な戦果に惚れ込んだムー軍上層部は、日本に更なる戦艦の改造を求めたのだ。

またこの他にも、ムーのある技術士官が日本で手に入れた設計図を元に開発されたジェット戦闘機、震電改（エンジンは米国から購入した）、日本から購入したコンテナ船を改造した巨大空母なども建造中だ。

ムーだけでなく、ミリシアルでは米国と日本での技術支援で開発したエルペシオ4、ジグラント4——最高時速1080キロ——や、ジビルの搭載が可能な爆撃機の配備が始まっている。

またグラ・バルカス帝国では、旧日本軍幻の富嶽にそっくりの、グテイマウン型超重爆撃機の大量生産が始まっているらしい。

グテイマウンはB-36相当の性能であり、グラ・バルカス帝国の技術力では明らかにオーバーパーツなのだが、どうやって開発したかは不明だ（噂だと技術者に天啓があったのでは、とされている）。

すでに200機が生産済みで配備されたく、あと400機は作るつもりらしい。

もちろん米国はこれらと共同作戦を行うために演習や、IFFの輸出、T-45やT-7A改造のCOIN機の貸し出しを行っている。

米国、日本、ミリシアル、ムー、グラ・バルカス、この異世界の国々も魔帝の復活に備えた準備を急いでいた。

魔帝——ラヴァーナル帝国の復活は6年後だ。

## 第七章 終着

### 第48話「6年後」

中央暦1649年6月1日（2025年）

ラヴァーナル復活の時期と場所の詳細な情報が判明し、惑星α——異世界の国々が魔帝復活に備えた準備を開始してからというもの、時は流れに流れ、実に5年が経過した。

来年のラヴァーナル復活も迫り、各国の準備もいよいよ最終段階に迫っている。

特にミリシアル、ムー、グラ・バルカス、日本など、この世界の主要国はほとんどが戦力を整えつつあった。

ミリシアルは日本とアメリカから持たられた科学技術を恐ろしい勢いで吸収し——もともと教養を始めとした基礎自体は十分にあった——、そこから生み出した新兵器によって軍隊の近代化を整えている。

すでに魔導式の自動演算装置や魔導電磁レーダーはそれらの技術を応用することで完成し、それを利用したFCS、マジックミサイル——誘導魔光弾も開発が完了した。

ミリシアルの艦艇はこれらを搭載し、戦艦は対艦型誘導魔光弾のキャリアーに、小型艦はミサイル駆逐艦に、双胴空母という奇妙な形状だったミリシアルの空母は、アングルドデッキに単胴、武装は護衛火器のみの、ようやくまともな形状へと変化した。

また航空機——天の浮舟も、対空型の誘導魔光弾を搭載した亜音速戦闘機エルペシオ4、ジグラント4が大半の部隊に配備されている。

これらは海軍の空母にも搭載され、また空海軍機ともに米国製のIFFが搭載されていた。

そして一部部隊はアニュンリールから接收したラフシーズ戦闘機を運用している。少なくとも、5年前と比べたら明らかに成長していた。

ムー国も戦力を整え、戦艦や巡洋艦は多数が日本で改装を受けて『ラ・カサミ改』のような護衛艦となり、空母にはジェット戦闘機『震電改』の艦載改修型が搭載されている。

そしてグラ・バルカス帝国も、グティーマウン型超重爆撃機600機の配備と運用が開始され、日米から持たられた『主力戦車』の概念から徹底的に設計が改編されたワイルダー重戦車が完成、またグ帝版海兵隊も設立された。

日本も、海自は7個護衛隊群まで規模を增強、60000t級の空母4隻と原子力潜水艦を配備し、陸自は増えた人員で第2空挺団、第2ヘリ団を新設、AFVを4桁単位で増量。

空自はF-3戦闘機を完成させ、F-35、F-15JSI戦闘機の配備を初め、さらに巨大戦略輸送機、P-1改造の戦略爆撃機の配備を完了させつつあった。

また、第2文明圏各国の軍隊に対し、自衛隊が顧問として自衛隊流の訓練を彼らに伝授させている。

異世界の国々は準備を終わらせつつあった。

さて、我らがアメリカであるが、どれほどの戦力を投入するか、今から説明しよう。

予想通りだと思われるが、こちらは異世界の他の国の軍事力全てを併せても到達できないほどの圧倒的軍事力を投入させようとしていた。

海軍だけで8個の空母打撃群、4隻の戦略原潜、650機の戦術航空機が投入され、これに空軍も併せて1800機以上の戦術航空機が投入され、さらに陸軍と海兵隊の兵員約15万も空爆後の上陸作戦に備えて準備が進んでいた。

ハッキリ言ってしまうと、いつも通りであった。

ただし今までの異世界での戦争と比べ、少し異なることが2つばかりあった。

まず1つは、彼らの運用する兵器の更新がほぼ完了していることで

あった。

今までの戦争では、数の充足のため、航空機の墓場に眠っていたモスボール機を転用したF-4、F/A-18A/B、A-4、A-6など旧式機を引っ張り出して無理やり戦力化していた。

しかし今回は、兵器の更新が進んだことで、それら旧式機は参加せず、ほぼ全部隊がF-22A、F-35B、F-15E、F-16など、地球の部隊と同等の機を（今さら）装備したのだ。

とはいっても、これは空軍と海軍航空隊だけの話であり、陸軍と海兵隊はそのまま、海軍のフォレスタル級、キティホーク級などの旧式空母は代役がないため、相変わらずそのまま投入されるのだが。

さてもう一つは、通常兵器以外の存在である。

何を隠そう今回は、ラヴアーナルが帰って来た直後に「帰ってくんな」とばかりに先制攻撃を実施、弾道ミサイル、巡航ミサイル、神の杖の金属棒で飽和攻撃を行い、戦争遂行能力を奪うことを目的としている。

すでにラヴアーナル帝国の存在するラティストア大陸の主要都市、軍事施設など戦略拠点、その他重要施設の詳細な位置は、アニユンリールでの情報収集により判明している。

よってミサイルや金属棒はラヴアーナル復活前から、事前にそれらの地域へと照準を合わせている。

使用される弾道ミサイルの数は300発は下らず、神の杖も金属棒を200発、巡航ミサイルに至っては2万発にまでおよぶ。

うち、弾道ミサイルには50発ほどのメガトン級戦略核弾頭が仕込まれている——これが環境への影響を抑えつつの最大の投射量だった。

ちなみにこれには、日本の自衛隊も巡航ミサイル攻撃に限り参加し、空自戦闘機がASM-3改、ASM-2D/L、スタンドオフミサイルを投射する予定である。

魔帝が復活する時は昼間が夜のように暗くなる、という兆候が発生した瞬間から、準備が整い次第、すべての金属の塊がラヴアーナルに指向されることとなっていた。

中央暦1650年1月――。

年が明けてからすぐ、対ラヴァーナ帝国作戦『神罰の代行』の準備は始まった。

主要文明国の船舶や航空機は移動を開始し、復活地点の大東洋沿岸には物資の集積が始まった。特に日本、ロデニウス大陸、フィリアデス大陸、グラメウス大陸には臨時に設置された基地や施設に艦船、航空機、部隊が集結した。

これらは日米主導による魔帝への弾道ミサイル、巡航ミサイル、攻撃衛星による長距離攻撃の後に行われる各国連合による空爆と艦砲射撃。さらに、その後に行われる各国軍連合の上陸作戦に参加するための部隊だった。

3年前の中央暦1647年に実施された先進11カ国会議にて結成が宣言された、主要各国の戦力の参加する対魔帝世界連合『世界連合軍』、それが正式名称だ。

ほとんどの国が自国の軍事力の5割以上を動員し、総数では1500万人に上る人員が――ほとんどがグ帝の人員ではあるが――集まり、物資集積や、実戦に備えた訓練など、彼らはその時に備えた。

その指揮官には米軍の大將――グラメウス大陸侵攻作戦でも指揮を執った男だ――が就任し、参謀として世界各国の将校が集められた。

6月にはほぼ全ての部隊が第三文明圏周辺に集結し、復活予想時刻が間近に迫った9月にもなると、すべての部隊がローテーションを組みつつも、臨戦態勢へと突入。

準備はすべて整った。

少なくともラヴァーナには、かつての罪を償ってもらわなければならない、この世界の国々には、神々による神罰の代行を彼らに下す必要があった。

そして、ついにその時は訪れた。

中央暦1650年11月3日正午――。

その瞬間、星全体の空が、太陽も、星も見えないような暗闇に包まれた。

まるで何もかもを貪欲に吸い込んでしまいそうなその空を見上げた人々は、何が起きたかを瞬時に悟った。

世界連合軍の司令部が設置された日本の在日米軍横田基地で、世界連合軍総司令官の米軍大將はすぐさま指示を飛ばした。

始まったのだ。

## 第49話 「神罰の代行」

空が黒く染まるという、ラヴアーナル復活の兆候が発生し、すぐさまアメリカが打ち上げた多数の偵察衛星から情報が届けられる。

各偵察衛星から世界中の地上を撮影した写真がデータとして届けられ、その中の日本の東、大東洋を写す写真には、今まで存在していなかった大陸の姿が写し出されていた。

ラヴアーナル帝国が復活した。

「作戦開始、繰り返す、作戦開始！」

世界連合軍総司令官を務める米軍大将によりその指示が飛ばされた直後、すべての弾道ミサイル、巡航ミサイル、そして『神の杖』が発射への準備を整え始めた。

「目標、Raven nal Empire ロメオ・エコーの主要戦略拠点」

すぐに在日米軍基地、航空自衛隊基地、ロデニウス大陸・フィリアデス大陸・グラメウス大陸の飛行場から巡航ミサイル搭載のB-52J、B-1Rが飛び立つ。

大東洋沿岸に展開した何十隻ものイージス駆逐艦、ミサイル巡洋艦がVLSの蓋を開放し、そこから射程数千kmのトマホークミサイルが姿を現す。

この異世界に持ち込まれた何百発もの弾道ミサイルが発射可能な態勢となり、軌道上の攻撃衛星『神の杖』は目標地点の地上施設に向けて正確な照準を定めた。

「洋上の全艦艇、トマホーク発射準備完了」

「空軍および空自の部隊、巡航ミサイル発射地点へと展開した模様」

「『神 杖 オーデイン』全機、照準よし」

次々に司令部へと飛び込んでくる報告、ラヴアーナルが復活してから20分ほどが経過している。

米軍大将は僅かに考え込む。

ラヴァーナル帝国の人間——光翼人とは何の対話をすることもなく、いきなり帝国を滅ぼす勢いで攻撃を仕掛けることになる。

別に自分たちは彼らを恨んでるわけでもない。憎んでるわけでもなければ、怨んでるわけでもない。

そもそも直接会ったこともなく、話し合ったこともなく、大して知りもしない。

そんな相手なのに、いきなり攻撃してもいいのか——いや、それは大丈夫か。大将は自らの不安を比較的早いうちに打ち消した。

すでにラヴァーナルと光翼人に関する情報はすべて集まっているし、そしてそこから勘案された結果は、光翼人は話も通じない、精神的に野蛮な民族であるということ——

話を通じる前提で考えてはならない、地球での価値観が、ここでもすべて通用するわけではないのだ。

ラヴァーナルは人間ですら家畜化するような種族で、奴隷が貰えなかっただけで核戦争すら起こすような国である。情けも容赦も、彼らにかかる必要なんて微塵もないだろう。

「攻撃を開始せよ」

だから、彼は、そう短く伝えた。

直後、弾道ミサイルの固体燃料に炎が灯り、巡航ミサイルが噴煙を撒き散らし、軌道上の神の杖が次々に金属棒の投射を開始した。

戦闘機、攻撃機、爆撃機、駆逐艦、巡洋艦、戦艦、潜水艦、地上発射施設、攻撃衛星、ありとあらゆる発射用プラットフォームは煙か閃光に包まれ、光の塊をいくつも解き放った。

空軍と空自の戦闘機と爆撃機から巡航ミサイルの曳く白線が吹き伸び、海軍の駆逐艦と巡洋艦が、次々に同じものを発射する。

また、すでに弾道ミサイルの群れは高空よりも高い位置へと突き進み、弓なりの弧を描きつつ、最終的には重力に従い頭を地上へと垂れ初める。

すでに神の杖から射出済みだった200はくだらない数の金属棒は、成層圏へと突入する過程で弾頭を真っ赤に輝かせながら落下を続

けていた。

圧倒的な数による破壊の暴力が、復活を果たした超古代文明のもとに迫りつつあった。

ラヴァーナル側は異変を察知していなかった。

無事に復活に成功し、ビーコンや僕の星がいくつも見当たらない、グラメウス大陸の魔王ノスグーラと交信が出来ないなどのアクシデントは起きていたものの、事態は概ね順調であった。

あとは僕の星から送られてくるデータを元に現在のこの世界の状況を把握し、再び帝国軍を派遣して世界を服従させるのみだ

帝国政府と帝国軍が世界を再支配し、『恐怖』を撒き散らすための準備を始める最中、光翼人たちは復活記念とばかりに外へ出て、祭りや宴をしようとその準備を始める。

祭りをしようとするのは、一見したら人間社会でもみられるような光景だが、その中にはエルフや人間などの非光翼人の奴隷たちが当然とばかりに虐められる光景があり、かなりの違和感を醸し出している。

彼らは他種を奴隷にし、そこらの虫ケラと同等、いや、それ以下の存在として扱っており、一万年前に同じ世界から連れ去られてきた奴隷たちは、彼らに虐められ、または虐殺されていた。

光翼人らはそれに何の不思議も抱いていない——むしろ奴隷を虐めるのは当然とばかりに殴り、蹴り、叩き、斬りつけ、締め付け、踏みつけ、そして最終的にその命を奪う。

それが光翼人だった。

高度な文明を築きつつも彼らは、精神的に非常に未熟であった。

本能的に自分達を崇め、本能的に他種に対して『恐怖』を撒き散らすことを無上の喜びとしている、そんな野蛮な民族だったのだ。

そんな矢先、光翼人らは異変に気づいた。お祭りを始めようとしていた光翼人も、役所に詰めかけた帝国政府の役人も、出動準備を始めた帝国軍人たちも、空を見上げ、啞然とした。

まるで流れ星のような、いくつもの「なにか」が空、いやさらにその上に広がる宇宙から、燃えるように輝きながら降り注いでくる。

宙からポツポツと現れたそれらは白線で紺色の空にストライプを描き、それだけで空を埋め初め、その様は非常に幻想的であった。

まさか神々により星が落とされたか——そう考える者もいたが、それらの正体を彼らが把握する日は、永遠に訪れそうもなかった。宇宙空間から放たれた金属棒は次々にラテイストア大陸に突き刺さった。

およそマツハ10におよぶ高速で地面に突撃した金属棒は、その運動エネルギーを発散させんとばかりに地面を抉り、周囲に衝撃波を撒き散らす。そしてそれは、核爆発相当の威力を解放した。

大陸各地の都市で、施設で、基地で、街で、港湾で、沿岸で、同じように金属棒が突き刺さり、衝撃波が周囲にあつたあらゆるモノを消し飛ばしていく。

彼らが見たらコア魔法の爆発と勘違いするであろう光景が、そこにあつた。

ラヴァーナル帝国は米国による金属棒の連続攻撃に無力であつた。金属棒は電磁波を放出しないため探知も迎撃も極めて困難であり、それどころか帝国にはBMD——ミサイル防衛という概念が存在していなかった。

まさか自分たちが奴隷として虐めてる下等種族が、自分たちの持つコア魔法と同等の攻撃を仕掛けてくるとは微塵も思っていないかつたし、だとすればコア魔法から自分たちを守る手段も考えてなかったからだ。

光翼人たちと共に攻撃に晒されている奴隷たちには申し訳ないことだったが、軍事目的のための致し方ない犠牲——コラテラルダメージと考えると、まだ少ない犠牲ではあつた。

金属棒による攻撃から遅れて、フィリアデス大陸、ロゼニウス大陸、グラメウス大陸から大量に打ち上げられた通常弾頭型・核弾頭型の弾道ミサイルが、金属棒で壊滅的被害を負ったラテイストア大陸に降り注ぐ。

このときラヴァーナル帝国の大地には、首都から大都市、地方都市

にいたるまで、片田舎の偏屈な街や各地の村々でさえ一発たりとも攻撃を受けていない土地などなかった。

少なくとも首都を含めた40個の都市が更地となり、軍事力の8割が無力化されていた——残り2割は攻撃を免れた地下施設か、洋上の艦艇か、海中の潜水艦か、上空飛行中の軍用機か、僻地にある警備隊の詰め所などだった。

ラヴァーナル帝国は約2億1000万の人口を抱えていた——奴隷は含まれてない——が、弾道ミサイル攻撃が収まったころには8000万人弱しか残されていなかった。

すぐに残存していた帝国軍の部隊は緊急出撃を始めようとしたが、弾道ミサイル着弾から10分も経ったころ、低空飛行でラティストア大陸に接近していた数千の巡航ミサイルの大群が、遅れに遅れて到来する。

運良くスクランブル発進できた帝国空軍の戦闘機の中には、巡航ミサイルの迎撃に成功した機体も存在していたが、全体からすれば雀の涙ほどの、悲しすぎるほど少ない数であった。

都市部は更地と化し、集落という集落には巡航ミサイルがぶちこまれ、森林地帯は大火災を引き起こし、沿岸は照準のズレたミサイルの着弾で起きた津波に飲み込まれており、もはや大陸に無事な場所なんてもう数えるほどしか残ってなかった。

嘘だ、そんな馬鹿な、あり得ない、これは悪い夢だ、こんなこと起きるはずがない、違う、これは現実じゃない、なぜ、どうして、まさかそんな、嫌だ、助けて、死にたくない……

その被害を目の当たりにした、生存した光翼人らは口々に呟く。そして悲嘆に暮れるその声々は、大陸全土に木霊した。

だがそれは、彼らが今までしてきた罪を考えたら、十分妥当なものであった。

30分後、焦土と化したラティストア大陸で、飛行中だったために唯一被害を免れた帝国空軍所属のAWACS——もちろん魔導電磁

レーダーを搭載する——が、さらなる異変を察知した。

レーダーにいくつもの反応が、ラテイストア大陸の外から、海と空を埋め尽くして迫りつつあったのだ。

アメリカ、日本、ミリシアル、ムー、グラ・バルカスを中心とする、世界連合軍である。

帝国空軍AWACSからの報告は、まだギリギリ生きていた帝国軍通信網で各部隊に伝えられる。すでに上級司令部はほとんどが消滅し、地方の下級司令部が代行して指揮を執っていた。

まだラヴァーナール帝国軍には彼らに抵抗するだけの力は辛うじて残されていたが、その「辛うじて」が、まったくもって長続きしそうにないことは明らかであった。

かつて世界に『恐怖』を撒き散らした光翼人たちは、その人生で初めて『恐怖』を経験することとなった。

## 第50話「終着」

ラヴァーナ帝国、帝都ラヴァーナ。

かつて魔帝の名で世界中を恐怖で支配し、その名を星の裏にまで轟かせた国の首都は、中央に位置する皇城を中心として、地球の大都市と比べても非常に発展していると言えた。

地上高1500mにもなるハイパービルディング状の皇城ラヴィ城を中心として、同心円状に超高層ビル群や官庁施設、高層住宅からなる摩天楼が広がり、さらに各種エネルギーや水道、食料の循環機構を備えた完全環境都市を形成している。

帝都の郊外へはクモの巣状に幹線道路と高速鉄道が張り巡らされ、人口は1000万人、万を数える商業施設がひしめき、他にも近衛軍が控えているなど、ラヴァーナ帝国の経済・文化・政治の中心地だった。

……中心地だった、のだ。

いま、帝都ラヴァーナはまさしく“カオス”な状況の真つ只中にあつた。

帝都はすべてが炎に包まれ、高さ1500mの皇城ラヴィ城は中央からバツサリへし折れていた。いくつもの巨大な炎の竜巻が荒れ狂い、高層ビル群は倒壊して瓦礫となり、黒煙は蒼天をどす黒く汚している。

その下の大通りで、逃げ場と助けを求めてさまよう光翼人の姿があり——いや、この時点ですでにその人影すら数えられるだけしか残されていない。人口は1000万から190万ほどにまで激減している。

アメリカによる『神罰の代行』作戦で帝都ラヴァーナは金属棒6本、通常弾頭型弾道ミサイル7発、巡航ミサイル500発近い着弾を受

け、インフラの壊滅、行政機能喪失といった壊滅的な被害を被っていた。

そんな地獄の上空をいくつもの影が過る——アメリカ、日本、ミリスアル、ムーなどからなる世界連合軍の航空戦力である。さらに洋上からも、世界連合軍の艦隊——総数数百隻の大艦隊が迫りつつあった。

帝都ラヴァーナだけではない、この他にもいくつものラヴァーナの都市で、軍事施設で、港湾で、このような世界連合軍のラヴァーナ襲来の光景は広がっていた。

彼らの目的は、金属棒・弾道ミサイル・巡航ミサイルの攻撃の後に空爆、艦砲射撃を実施し、可能な限り、ラヴァーナ帝国の国力を削ぎ落とすことであった。

アメリカの戦略爆撃機が、日本のジェット戦闘機が、ミリスアルの空中戦艦が、ムーの爆撃用飛行船が、グラ・バルカスの超重爆が、エモールの風竜が、その他の国々の様々な竜が襲来する。

そして洋上の戦艦、護衛艦、空母、ミサイル駆逐艦、改造戦艦、戦列艦、総てを纏めると千を超える数の艦艇が海を埋めつくし、あらゆる文明の兵器が入り交じり、空と海一面に広がっていた。

米空軍戦闘爆撃機による軍施設への精密爆撃。自衛隊機によるピンポイント爆撃。ミリスアルによる大型弾ジビルの投下。グ帝超重爆による都市部への無差別爆撃。ムー戦闘機による地上への機銃掃射。

特にグ帝超重爆による無差別爆撃は効果があり、グティーマウン型超重爆撃機600機による都市部への絨毯爆撃は、いくつもの都市を焦土へと変えた。無論、他の魔法文明国だってその役割を十分果たした。

エモールの風竜による地上への魔法攻撃。その他の国々のワイバーンによる地上への火炎弾攻撃、せめて光翼人はすべて滅ぼさなければ——特に現地人は恐怖と共に地上攻撃を実行した。

かつての光翼人による蛮行を、悲劇を、惨劇を、繰り返さないために、そして平和を手に入れるために、様々な国の様々な軍隊が一つの

国をオーバーキルと言わんばかりの勢いで攻撃する、正に「カオス」であった。

その「カオス」の中に、勇猛果敢にも突撃する機影——ラヴァーナ帝国空軍戦闘機レイカーの編隊の姿がある。僻地の地下格納庫に格納されていたために弾道弾や金属棒の直撃を避け、離陸に成功した機体だった。

レイカーのパイロットである光翼人たちは、誘導魔光弾を都市の上空に現れた敵に向け手当たり次第に放った。

——薄汚いウジ虫どもめ、偉大なる我らが魔帝を侵した罪は大きいぞ。

この機に及んでもなお、光翼人らは隙あらばいつでも世界を再支配してやる、という野望に燃えていた。だがそんな野望が長続きするはずもなく、彼らの乗る戦闘機は直後に爆散した。

米軍は制空権の確保にバカみたいな数の戦闘機を投入しており、魔帝機は運良く離陸に成功したところで、上空の制空権は変わらず米軍側にあり、速攻で中距離誘導弾のアウトレンジ攻撃で敗北してしまっ

た。洋上でもラヴァーナ帝国海軍の潜水艦が世界連合軍艦隊に攻撃を仕掛けていたが、こちらも米軍や自衛隊の対潜哨戒網に引っ掛かり無力化されている。

このように散発的にラヴァーナ帝国軍による抵抗作戦が行われ、帝都ラヴァーナでも近衛軍が対空砲火を行っていたのだが、それらは指揮系統の混乱と、そもそも帝国軍そのものがほぼ消滅してたため、無いも等しい。

金属棒は魔帝の主要な軍事基地であれ、秘密基地らしき場所であれ、手当たり次第にあらゆるところに着弾し、空中戦艦・バル・キマイラも、海上要塞・バルカオンも、コア魔法の発射施設も破壊されていたため、まともな抵抗なんて出来るわけがない。

また、ラヴァーナ帝国軍の抵抗が散発的になったことを受け、ラティストア大陸各地の沿岸では陸上部隊による上陸作戦も開始されている。

基本的に装備の性能面ではアメリカ海兵隊、兵士や兵器の数ではグラ・バルカス軍が大半を占め、その他にも日本の水陸機動団、ミリシアルとムーの陸軍も上陸作戦には参加している。

上陸作戦はほとんど抵抗なく、無事に大半の部隊がラティストア大陸への上陸に成功し、そして、生き延びていた現地住民からの手厚い歓迎を受けた。

「大陸から出てけ野蛮人！」

「奴隷は奴隷らしく俺たちに跪いてろ！」

「奴隷のくせに生意気だぞ！」

「蛮族は大人しく私らの靴でも舐めてな！」

民間人の光翼人らにそうやって罵声を浴びせられながら、上陸部隊は上陸した。呆れた、この期に及んでコイツらはまだそんな傲慢なことを言えるのか、これが光翼人なのか。

呆れながらも、上陸部隊は民間人の保護を開始した。が、普通に攻撃魔法で襲いかかってきて、魔法が切れても石を投げたりして闘ってくるものだから、仕方なく、上陸部隊は実力を行使せざるを得なかった。

恐怖しようが、絶望しようが、光翼人は上等種として下等種を跪かせなければならぬ、彼らの精神と本能は、その根底から普通の人間と比べて狂っていた。

そんな民族でも丁寧に対応しつつ、そのようにして上陸した世界連合軍は、核弾頭着弾地点を避けつつ、巡礼するようにラティストア大陸各地を行軍した。

途中、帝国軍の生き残りを掃討し、生存していた光翼人を取っ捕まえながらも、行軍はゆっくりと、しかし着実に行われた。

中央暦1651年2月10日――。

世界連合軍の行軍開始から3ヶ月、年が空けてようやく、ラティストア大陸は全土が世界連合軍の手に堕ち、金属棒、弾道弾、巡航弾の攻撃を生き延びた光翼人らはすべて制圧されていた。

金属棒・弾道弾・巡航弾の総攻撃を生き延びた大半の光翼人は、世界連合軍上陸部隊の上陸後も最後まで抵抗を続けたが、そのために世界連合軍の手で抹殺せざるを得なかった。

保護された光翼人らも、各国の研究施設に移送されるなどして、いまやほとんど残されていない。また、世界連合軍ももうほぼ解散となり、臨時で駐留することとなった平和監視軍を除いて、すべて彼らの本国へと帰還している。

また、まだまだやるべきことはいくつも残されていたが、今までの苦勞と比べたら、それも大したものではなかった。

少なくとも、この世界は、平和を勝ち取ったのである。